GAPニューズレター改題

Cosmic Philosophy & UFOs

GAP JAPAN NEWSLETTER
季刊日本GAP機関誌

宇宙哲学とUFO

SPRING 1982

No. 77

主要記事 金星には偉大な文明がある!?

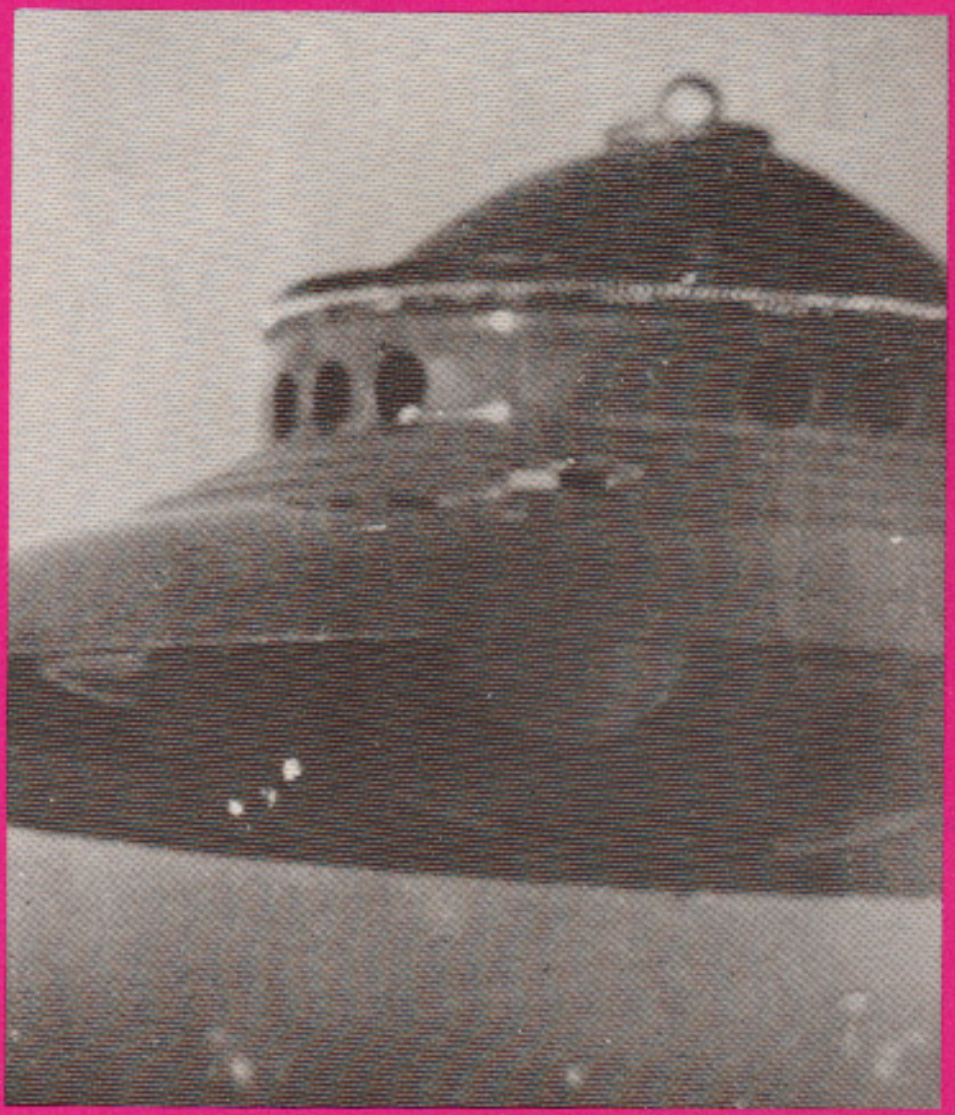
宇宙と愛について (1) 久保山八郎編

反磁場による超推進法 W. ラボート

さらば空飛ぶ円盤 (5) G. アダムスキー

第7章 疑う人に対する回答

第8章 デマとデマ流し屋



宇宙哲学とUFO　第77号目次

金星には偉大な文明がある!? 「UFOコンタクト」誌より……1

宇宙と愛について(1) 久保田八郎編……6

宇宙的動機とGAPの役割　山田宏三郎……11

偶像崇拝と宇宙哲学　石川公一……14

ある山村での宇宙的な生活　加藤修一……15

反磁場による超推進法　ウェイン・ラポート……17

さらば空飛ぶ円盤(5)　G.アダムスキー……20

私についてきた二人の宇宙人　松本隆司……26

日本GAP沖縄支部、琉球新報で紹介！……29

<目撃ルポ>UFO CONTACT……30

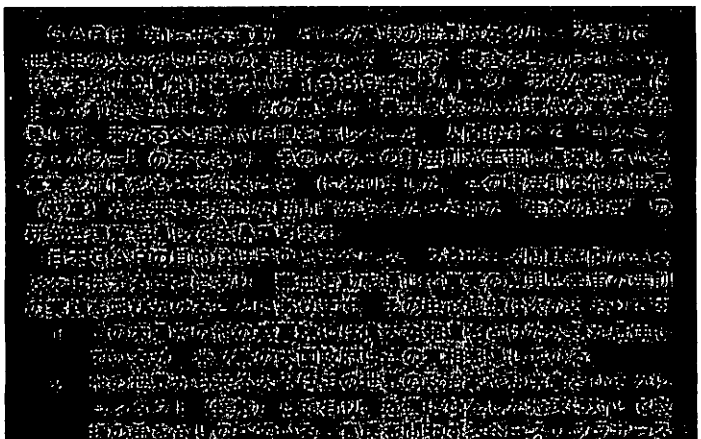
読者の声「コズミック・ポスト」……32

<予告>エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅……36

<報告>松山支部大会……39

日本GAP全国月例研究会案内……40

GAPとは



■表紙写真は1952年12月13日午前9時10分頃、米カリフォルニア州パロマー山腹のパロマーガーデンズでジョージ・アダムスキーが6インチ反射望遠鏡を使用して撮影した金星の円盤。直径は約10メートル。このあと円盤はアダムスキーの頭上へ飛来して金星文字を書き込んだネガ・ホルダーを投下した。

★本誌掲載記事の内、海外関係のものは翻訳転載権取得済。
全記事・写真共他誌への無断転載を禁じます。

金星には偉大な文明がある!?

★デンマークGAP機関誌「UFOコンタクト」より／久保田八郎訳

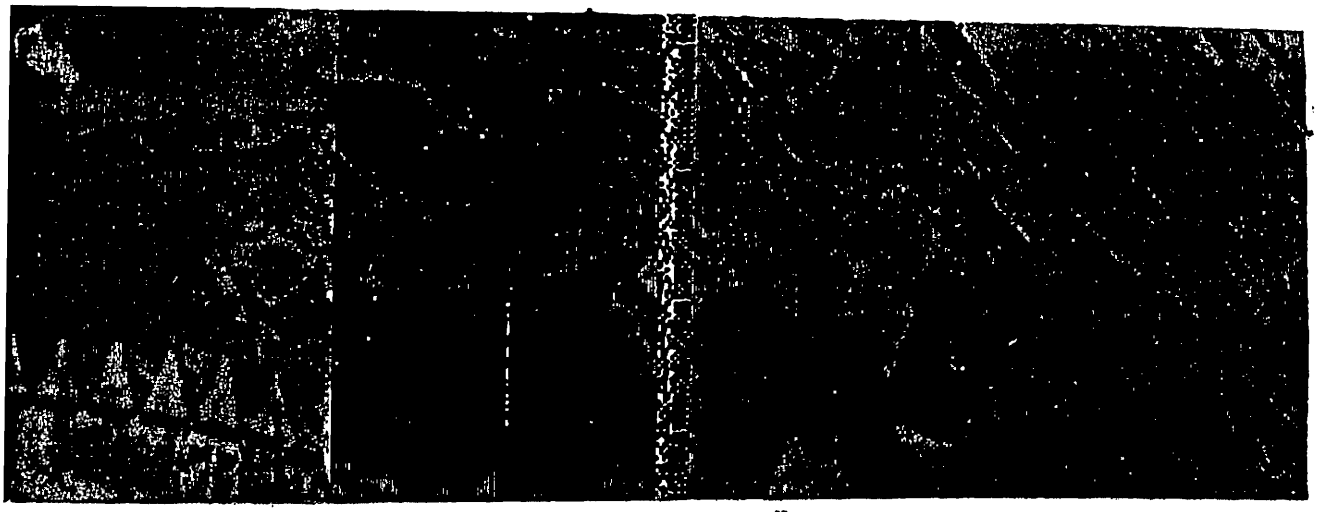
■金星の地表は500℃ 近い灼熱地獄というのに米ソは飽くことなく探査機を送り込んでいる。膨大な国費をつぎ込んで〝役にも立たぬ〟惑星の調査を続けるのは、なぜか？

■米ソとも探査機をパラシュートで軟着陸させたという。地獄の熱風渦巻く地表へ安全に着陸できたのは、なぜか？

■金星地表の不思議な〝白熱光〟が1979年初めに米探査機パイオニア1，2号で発見された。金星大気内の化学的な火が燃えているという。ソ連の探査機もこれを発見したが詳細は秘されている。なぜか？

■米ソ首脳は真相を隠蔽している？　地球の命運に大変化をもたらすかもしれぬ偉大な文明が存在するという驚愕すべき事実を――。

■この謎に挑戦したデンマークＧＡＰの推理と分析を本誌に２頁より一挙掲載。ＧＡＰ会員の好読物！



●金星の地表

●上の写真は今年3月5日、モスクワ時間で5時53分に金星の大気圏内に突入したソ連の金星探査機ヴェネラ14号が、63分後に金星地表に軟着陸して撮影したもの。ヴェネラ13号撮影の金星地表写真はわが国で新聞を通じて発表されたが、この写真は本邦初公開。

（タス通信社提供）

『アカコルの年代記』『ホピ族の本』『カスカラと七つの世界』といった素晴らしい書物は、八万年以上にもわたる地球の文明の発達について述べている。

これらの本はすさまじい大変動とそれに続く信じられないような移住、古い大陸の破壊と消滅、新大陸の出現、空中を飛ぶ乗物を使用でき、地球の引力を無にせしめることのできた時代の輝かしい文明と、ついには石器時代の暗黒の中に投げ込まれ、最低レベルで惨めな条件下に生きながらかろうじて〝原始〟文明を生きぬいた時代などについて語っている。

しかし人類はいまもその歴史を持っているのであり、しかもだしぬけに我々は空飛ぶ円盤の正体とそれが地球へ来る理由などを知ったのだ。というのはジョージ・アダムスキーが高度な道徳レベルにあるスペース・ピープルとの会見や、彼らの素晴らしい科学技術などについて知らせてくれたからである。我々はみな驚愕した。

アダムスキーの知識伝達は早すぎた

いまの世界で大抵の人にとって信じられないほどの大きな出来事になっているのは、UFO問題に関する意見が完全に割れてしまったということである。UFOの正体については世界中に無数にある政党の数と同じほどの考え方があるのだ。

アダムスキーから（大気圏外の真相や宇宙哲学などを）学んだということは、隣の学生の答案を盗み見して試験に合格したようなものである。つまり我々は自分の授業を受けないで試験にパスしたのと同じなのだ。

大抵のUFO研究グループは〝信仰〟ということに堕してしまった。つまりUFOとはまさに未確認の（正体不明の）飛行物体以外の何物でもないと信仰するか、または各種の宗教的心霊的なグループになるかのいずれかである。

GAPは臆病者の集団ではない

国際GAPはいまだに崩壊せず、全くの愚かしい考え方にとりつかれなかったグループの一つであった。我々はアダムスキーを真実の人とするに足るUFO問題の諸事実と正当性とを発見したのである。我々は臆病者が次のように言うことに反対の立場をとった。

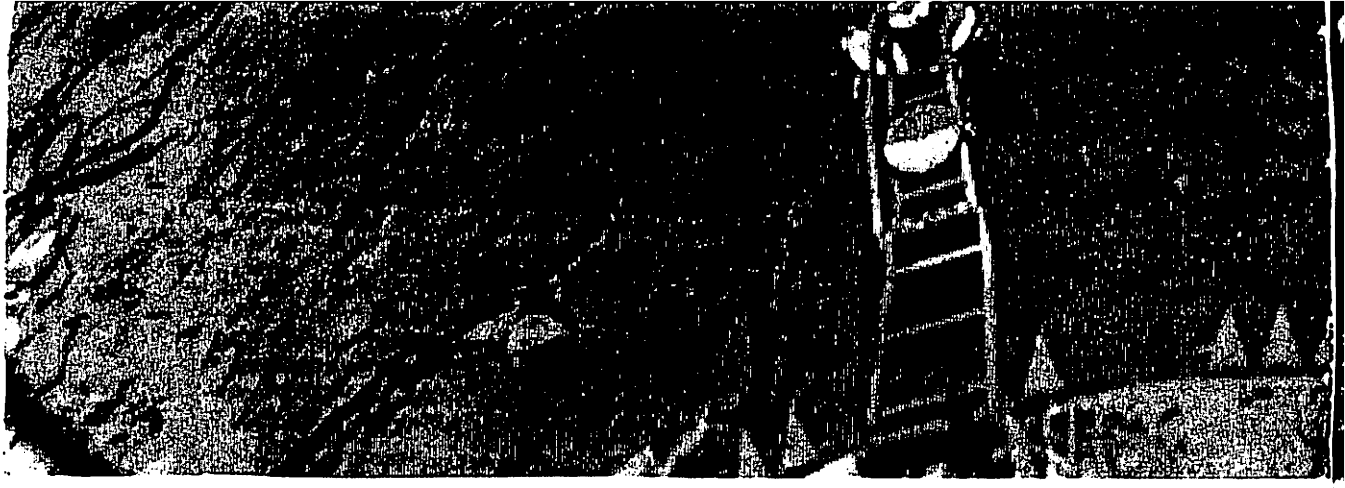
「たとえ我々は現在アダムスキーを全く理解していないとしても、彼は真実を語っていると思う。いずれ時がそれを示すだろう」

（訳注＝これは『現在自分はアダムスキーを全く信じていないけれども、いつか何かの拍子に彼が正しかったと立証されたときには、このように言っておけば自分も内心では信じていたのだということになり、彼にあやかることができるだろう』という計算を含んだ言葉）

時日は経過してアダムスキーは有利となった。彼の写真類は本物であることが立証された。しかし信じられぬほど次元の低い顧問をかかえたデンマークのテレビ局はデンマーク国民に別な事を信じさせようとしたが、それはむなしかった。大気圏外に関するアダムスキーの詳報は多くの場合に確証されたし、テレパシーに関する情報も百パーセント立証されており、転生に関する彼の情報も公式に認められる段階にある。また、スペース・ピープルに関する他の事実、すなわち彼らの生活、知識、宇宙船とそれに付随する現象なども、太古に生き残った原始民族の伝説によって次第に確証されつつあるのだ。

真相は隠されている

しかし地球上の否定的勢力は依然として強大である。たとえ我々が抗争したところで、他の世界から来る訪問者の存在が公式に認められることはむつかしいだろう。そして我々の太陽系の他の惑星群に関する真相は、たとえ世界中の多数の科学者や専門家が真実を知っているとし



ても、一般に洩らされることはまずあるまい。科学者たちも我々と同様に全く無力なのだ。

この八万年を通じて地球上には生命の浮き沈みがあった。スペース・ピープルはいつも地球上を歩いていたし、地球の大気圏内を飛び、地球人と接触し、地球人の指導者になってきた。彼らは太古の文明人にたいして空中を飛ぶ方法や重力を無にする方法などを教えたのだが、レムリア大陸（訳注＝これはムー大陸と同じもの）やアトランティス大陸が海中に消滅してアメリカ大陸が出現したあの大変動とともに、我々はこれらの文明を失ってしまい、以来、ふたたびこの文明を迎えるほどの価値ある人間にはならなかったのである。

だからこそ宇宙からの訪問者は地球人の面前で正体をあらわさないし、同じ理由でその真相は全世界を支配する勢力に屈している指導者たちによって人類の目から隠されているのだ。

日々我々は情報や声明に直面している。それによると教育された世界の大部分は空飛ぶ円盤が実在し、我々がおおやけに教えられたのとは全く違う状態が宇宙空間に満ちていることを認めているのである。以下は各国のＵＦＯ研究グループから寄せられた情報である。まず米アダムスキー財団のステックリング氏の情報を次に掲げることにしよう。

大気圏外の人類

数カ月前（一九八〇年秋）、きわめて興味深い印刷物が我々の注意をひいた。その書物の題名は『我々の祖先は大気圏外から来た』で、著者はアポロ計画のほとんどに関係したＮＡＳＡ（米航空宇宙局）の通信専門家だった人で現在は退職しているモーリス・チャトレン氏である。彼は通信の分野で多くの発明をなした。

その著書で彼は、アメリカの初期のマーキュリー計画からアポロ月飛行に至る宇宙飛行において、すべての宇宙船が地球のまわりの大気圏外でＵＦＯに遭遇しており、後には月のまわりでも遭遇したと述べている。

また彼は一九二八年に月の近くから発射された電波信号が地球で受信されたけれども、これは極秘にされたという。

しかも彼は太陽系には十二個の惑星があると言っている。これを彼は一九八〇年に言及したのだが、なんとジョージ・アダムスキーは一九五五年に述べたのだ。

宇宙飛行士であったゴードン・クーパーはＵＦＯ問題をよく知る人で、現在はカリフォルニア州ラジョーラの『高等技術センター』の所長である。このセンターは偉大な発明家であったニコラ・テスラのあらゆる発明を評価し応用する目的で設立されたもので、現在我々が使用している電気の交流はテスラが開発したのである。

（訳注＝ニコラ・テスラは一八五六年にセルビアで生まれ、後にアメリカに帰化した電気工学者で大発明家。テスラは交流を開発したというよりも、正しくは多相交流による回転磁場の中で回転子に誘導電流を発生し回転させる誘導電動機の原理を発見したのであり、彼が設計した交流発電機で十万馬力以上の電力輸送に成功したのである。なお彼は一種の不思議な人物で、金星から転生してきた人であるとむかしからいわれている）

一九八〇年七月二十三日付『サンディエゴ・ユニオン』紙に掲載された記事にラジョーラのセンターで行われている研究所の仕事が次のように紹介されている。

「テスラ自身は殺人光線とか他の惑星との交信とかセンセーショナルな話題を新聞記者たちに提供した。彼はひじょうに強力なエネルギーをもつ発信器を用いて他の惑星との交信をやったと称していた。ウェスティングハウスやマルコーニも他の惑星から来る信号を受信したと言っている」

ＮＡＳＡは現在宇宙空間の工場建設について語っている。これは無重力状態下で新しい製品が作れる工場なのだ。一方ソ連の宇宙飛行士が大気圏外耐久テストの新記録を樹立していたとき、無重力状態下で何カ月も生活しながら一インチ以上も身長が伸びたという。肉体細胞に重力がかからない場所ならばこれは当然と思われる。いつかこの飛行士たちはふたたび地球上を歩くにつれて元の身長にもどるだろう。

ソ連は金星について新発見をやった。雷光のかたちで電磁放電を記録したのである。ソ連の金星探査機ヴェネラ十一号も、一秒間に二十五回も雷光を発する、九十マイルの広さにわたる強力な嵐を記録した。アメリカの科学者によると、だれしも金星表面に雷光を発見するとは予

想もしなかったので、これは驚くべきことだという。金星の大気が探査機の報告するようなものだとすれば、雷光などが存在するはずはない。探査機が報告したこの〝大気〟は、地球の大気と全く同じほどに濃密であるかまたは海抜下約六百メートルに相当するという。そうするとこの濃密な大気の組成のために探査機は内蔵着陸装置をそなえているにちがいない。したがって放電現象の存在は、金星の大気に関する地球人の説がひどく間違っていることを示すことになる。

金星上に着陸したソ連の探査機により撮影された写真は、地球と大差のない丘や岩だらけの地形を示している。しかしこの探査機の公式な発見が正しいということになれば、この写真類は決して撮影されなかったはずである。なぜなら金星の表面は濃密な大気により完全な暗黒になっているはずだからだ。

もう一つ、パラシュートを用いて濃密な大気中を金星上に着陸したという探査機に関して疑問が生じてくる。もし本当に大気が濃密ならばパラシュートは絶対に降下しないだろう。激烈な高温のためカ氏九百度以上もある大気中を降下するのが不可能なことはいうまでもない。パラシュートは逆に気球みたいに上昇するだろう。

金星の赤道地帯には雲の運動がほとんどない。これは地球で見られるパタンとよく似ている。これは無風帯と呼ばれている。北半球では雲が右回り運動をなしており、北極付近では厚い層を形成しているが、南半球では雲が左回りに動いており、南極地帯には同じ層がある。

しかし、もし金星が我々が信じているように二百八十日の周期で自転しているとすれば、こんな雲の運動はあり得ないはずである。

（訳注＝金星の自転については一九六九年にアメリカのカーペンターがレーダーで観測して、自転周期を二四二・九八プラスマイナス〇・〇四日と算出した）

科学者も信じ始めた

宇宙開発科学者はいま巨大なマスドライバー、すなわち長さ数マイルにおよぶ電磁管について語っている。これは地球から一トンものペイロードを宇宙空間に投げ出すほどの力を持つ。月面では引力が地球の六分の一だから、十トンものペイロードを持つと思われるこの新しい装置は、もっと小規模に建造されており、作動している。これは液体燃料を用いるロケット類にとって代わるだろう。この原理は物理学者のヘンリー・コルムが磁気による浮揚実験を行っているあいだに発見したものである。

将来このマスドライブのおかげで、我々は宇宙空間に植民大都市を建設し、火星と木星間のアステロイド帯から小惑星を地球の軌道に輸送し、豊富な鉱物を採掘するようになるだろう。火星の軌道にある多数の小さな月をながめると、人はたぶんだれかが遠い大昔にこのアイデアをすでに思いついていたのではないかと思って驚くだろう。

我々は火星に生命を発見したんだと、きっぱりと述べたNASAの科学者ロバート・ジャストロウ博士は、一九八〇年十二月号の『サイエンス・ダイジェスト』誌にUFO問題について報告している。

その記事によると、旧約聖書のエゼキエルのUFO報告は空飛ぶ円盤と呼ばれてきたもので、おそらく数千年昔に地球に着陸した宇宙船で、窓か灯火があったと思われるという。

アレン・ハイネック博士でさえもいまは二〜三の写真は間違いなくUFOだと信じているのだ。

（訳注＝かつて米空軍顧問だったハイネックはUFO否定論者として有名だった）

ジャストロウ博士は、我々の太陽系に近い多くの太陽系には生命があるだろうと結論を出している。地球人が発射してきたテレビ信号のすべては大気圏外でキャッチされているのではないかと彼は思っている。

金星内部の熱の謎

イングランドはストックポートのアダムスキー派UFO研究家クリフ・プールは次のような説を出した。

（訳注＝プール氏は昨年一月に訳者・久保田宛に初めて連絡してきた）

金星探査機パイオニアーによる二年間の調査の結果、金星は太陽から受けるエネルギーよりもそれ以上のエネルギーを放射していることを示しているらしい。この驚くべき結果が確証されるならば、それは地球よりも多量の熱を生じていることになる。

オックスフォード大学クラレンドン研究所のF・W・テイラーは、先週開かれたイギリス学士院の会合で次のような測定結果を発表した。

金星の表面温度はセ氏四百八十度もあり、これは太陽系内の他のいかなる惑星よりも高温である。一般に認められている説によれば、太陽光線は金星の地表で吸収され、赤外線として再放射される。すると赤外線は大気に吸収されて、これは毛布の役を果たしながら金星を高温に保つ。つまり温室に似た効果をもたらすのである。

金星にはこの温室効果を生じさせるのに必要な二酸化炭素（と微量の水蒸気）が存在することをパイオニアーが示している。これが事実とすれば、毛布を突き抜けてから宇宙空間へ再放射される放射線の全量は、太陽から吸収される放射線の量と全く等しくなければならぬ。さもなければ金星の地表温度は絶えず変化することになる。

しかしテイラーは金星が吸収する放射線の量よりも十五パーセント多くの量をその惑星が放射していることを発見した。金星は地表温度をコンスタントに保つために内部からこの余分な熱を生じているにちがいないのだ。

地球をも含めて内惑星のすべては岩石中の放射性元素類から内部の熱を生じている。しかしテイラーの金星観測によれば、この惑星は地球よりもほぼ一万倍の熱を生じているというが、これは金星が地球よりも数千倍もの放射性元素類を持つという現在の惑星形成説に従えば、信

じられないほどの高熱である。

先週の会合で、テイラーの理論は他の惑星研究家たちによって疑問的となった。真っ向から否定した学者もいた。

テイラー自身は自分が出した結果にたいする説明はできない。彼はその矛盾が最初は単なる実験上の誤りのように思われたと言っているのだが、もっと正確な測定を行った結果、それではすまなくなった。天文学者たちが彼が出した結果を受け入れる前に、もっと多くの測定が必要なのである。しかもほとんどの惑星研究科学者は、あの余分な熱は今後の調査で消滅するだろうと考えているのだ。

金星上の不思議な輝き

一九七八年のパイオニアー金星探査機その他の探査機から得られた中間報告として次のようなものがある。

●金星大気中の絶えまのない雷光と、金星の地表付近における夜間の絶えまのない不思議な輝き。

●金星の電離層中のきわめて特殊な、おそらく惑星間にまたがると思われる〝磁気のヒモ〟構造。

ソ連の金星探査機ヴェネラ十一、十二号は金星の地表上空三十二キロメートルから二キロメートルの高度にわたって絶えまのない雷光を発見した。

（訳注＝二月のヴェネラ十三号の成果については詳細不明）

この雷光は一秒間二十五回という信じられぬほどの回数であった。パイオニアーオービターもこの雷光を観測しており、金星の夜の部分を通過するごとに同じような回数を測定している。

人間の肉眼ではこのような激しいフラッシュを見分けることは不可能だろう。そして金星上の〝観測者〟は不気味な電気的な輝きを帯びた風景と濃密な大気の中に絶えずカミナリがとどろくのを見るかもしれない。

（訳注＝これには「米ソの金星探査機の報告と称して公表される内容が正しければ」という意味が含まれている）

パイオニアーの責任者たるエームズ研究センターのポリス・レイジェント博士と、パリ大学のジャック・ブラモン博士が信ずるところによると、探査機によって観測された〝不思議な輝き〟は金星上の本物の光であり、探査機の表面で発生した現象ではないという。この輝きは十六キロメートルの高度で発生し、夜の側に入った二個の探査機が地表に接近するにしたがって光を増したのである。

金星地表のものすごい高熱大気中の各種成分の反応によって生じる〝化学的なたき火〟がその輝きの原因とされてきた。パイオニアーの観測では、金星地表付近の〝化学的な醸造〟の反応がこのような〝たき火〟の燃料になったのではないかと暗示している。

雷光現象もこの輝きの原因なのかもしれない。ただし降下するにしたがって増大する輝きは雷光とは思えない。雷光ならばその輝きの性質はきわめて安定した性質のものになるはずだ。

また最新の発見によると、金星の大気はいかなる高度でも、そして昼と夜の部分でも、温度と気圧がいちじるしく均一なのである。

どうも惑星間の磁場が圧縮され、からんで、ねじられて、金星の電離層の中で特殊な磁気のヒモになっているものと思われる。

解答はこれだ！

そこでクリフ・ブール氏はアダムスキーの著書『宇宙からの訪問者』第二部の次の個所を引用する。

〈今度は金星の都市を少し見せてくれた。大小いろいろある。何かすばらしいお伽の国へつれて行かれたような感じがする。建築物は美しく、外形は複雑である。多くは虹色を放射するドームがついており、それが生き返るような力をもつかのごとき印象を与える。

オーソンが静かに言った。

「夜になって暗くなれば、あの色が消えてドームは柔らかい黄色光で輝きます」〉

金星探査の気象観測機がきわめて優秀で、観測結果にむらがない点については、アダムスキーが次のように述べた点を想起されたい。

「金星はフロリダ州に似ている。金星全体がそうなのだ！」

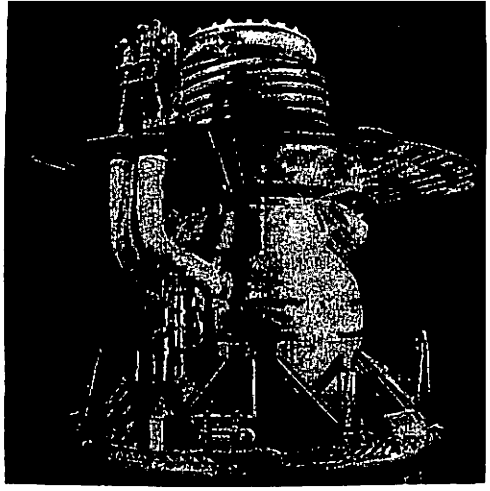
ペテルセンの結びの言葉

最後にハンス・ペテルセンは語る。

ともかく我々の行くべき道はまだ遠い。前にも述べたように世界中の科学者や専門家は真相を知っているのだ。このことはもはや疑いはない。たぶん一般大衆は政府の裏付けなしに遠からず〝だれもが〟真相を知る時期を迎えるだろう。

この八万年にわたる人類の発達史に関する私の次の記事で、なぜスペース・ピープルが今日地球人を認めようとしないのか、地球で一時的に〝あらゆるもの〟をコントロールしている偉大なブラザーが、なぜこの真相を地球人に知らせようとしないのか、といった問題を伝えることにしよう。

（訳注＝ハンス・ペテルセンはデンマークの退役空軍少佐で、アダムスキー存命中からデンマークGAPのリーダーとして活躍した。現在はリーダーの地位をしりぞいているが健在である。編者・久保田とは昔からの連絡仲間）



●ソ連の金星探査機ヴェネラ13号（タス）

●ある偉大な哲人との対話

宇宙と愛について

〈連載第一回〉 久保田八郎編

『愛情』は創造的パワー

――人間を作り出す根元なるもの、すなわちパワーといいますか英知といいますか、これは結局何でしょうか？

「細胞の中に核が存在しています。その核の中に遺伝子があります。通俗的には遺伝素と呼んでもかまいませんが、それはマクロでもミクロでもない単位です。その単位の中にすべてが記録されています。一つ一つの細胞の中に同じような記録が含まれています。しかし特別な場所、たとえばここは目玉だという場所はそこだけを駆使するわけですし、ここは髪の毛ですよという場所は遺伝子の中の髪の毛の伝達に関して核酸、つまりDNAというものがどんな細胞の中にも埋蔵されています。これは完璧な設計図です。するとこの設計図を翻訳する役目をする機械のような形で、言いかえればあなたが英語を日本語に翻訳するような形で、その設計図をアミノ酸という有機質に作動させます。そこまでが遺伝子の中に組み込まれています。そのあとに出てくるアミノ酸は物質です。

以上は化学に関する分野の話ですが、その前に『愛情』というパワーがあります。精子とか卵子とかに言及する前に男女の『愛』というものがあるのです。この『愛』なるものは顕微鏡でも見えません。ただこのエネルギーの移行については最近学問的には映像化できるほどに進歩しました。これを宗教的に解釈すれば『オーラ』といいます。七～八年前に上映された『ザ・ボディー』という映画が日本に来ましたが、これによりますと、エネルギーが映像化された状態を恋をしている人に応用すると太陽のコロナみたいにわーっと出てくるのです。まして接吻をしているときはオーラの状態がすごく出てきます。しかし男女が離れるとそのオーラは静かに消えてゆきます。

このようにしていまはエネルギーというものを『見る』ことはできますが、受精の状態を『見る』ことはできません。受精卵の中が燃えているかどうかはキャッチできないのです。しかし『愛情』というパワーは存在します」

――そうしますと、人間を作り出す根元的なパワーは『愛情』なのですか。これは抽象的な表現ですけれども。

「そうです。適切な言葉がないために抽象的になりますね」

――そうすると人間ばかりでなく、天地の万物を作り出すものは『愛情』ということになるのですか。

「そうです。だから『愛』という言葉はたいへんキザに聞こえるでしょうが素晴らしい力だと言えます」

――惑星や太陽も『愛情』によって作り出されるということになりますと、それは『だれ』の『愛情』なのですか。

「惑星と恒星とがありますが、恒星は惑星群のパワーがぶつかった点なのです。各惑星はパワーを放散しており、その中のある惑星群のパワーがある一点で集合しますと、そのときに核爆発現象を起こしながら恒星を構成します。

もともと恒星はないのです。惑星があると恒星ができるのです」

――では先に惑星ができて、それから恒星ができるのですか。

「そうです。でも現在の地球の学問は逆なことを言っています。まず恒星が生まれてそれが冷却してから惑星ができると言っていますが、恒星というのは最初はただの原子です。言いかえればあるのはパワーだけなのです。そのパワーから物質ができたと言えば、それは『愛情』から人間や生物が生まれてくるのと同じだと言えますが、『空間』というものが母体になっています。これがパワーです。『空間』とはパワーです。その『空間』というパワーによって惑星を構成し、惑星群から発する二次的要素を持つパワーが『空間』というパワーを媒介としてもう一度集積の働きをします。そして集積したパワーで恒星を作るのです。だから『空間』から恒星ができて、そこから枝分かれして惑星ができたのではありません」

――じゃ天文学とは正反対ですね。

「いろいろな惑星、たとえば金星や土星を見ますと、惑星の惑星、すなわち衛星がありますね。それらの衛星を観測するとパワーが強いのですが、この理由は、惑星のパワーが強いのではなくて、衛星のパワーが強いからです。衛星が寄り集まることによって強力なパワーを形成するのです。

たとえば多くの人間が綱を持っていて、家を建てるときに柱を倒さないようにしようと思えば、人間の数が多いほど柱を倒さないですみます。一人で支えるとたいへん重い。だれもいないと柱は立ちません。人間の数が多いほど一人あたりのパワーは小ですみます。最少限度三人は必要で、そうすればどうにか倒さないですみます。それも柱の真下に来るとよけいに力を必要としますが、その綱を遠くに伸ばすと三人でも力は少なくてすみます。この人数が多いほど強力なパワーが生じて柱をひっくり返すことはできなくなります。

いま太陽系という名称で呼んでいますが、太陽系というのはわずか十二個の惑星で構成しているのではありません。ただ太陽というものがあるから太陽系と呼んでいるのであって、実際は他の沢山の力によって一つの溝が作られています。その溝が地球なら地球のパワーを運ぶのです。だから地球がストレートにその溝を構成するのではありません。地球から出るパワーはすべて放散しています。それを集めて一本の力に変えるものが銀河系または宇宙です。

しかし一方、地球の力は他の惑星や他の天体にも影響を及ぼしています。四散するのですから――。そのために溝ができます。たとえばここに四人の人がいるとして、そのなかのAという人が用事でどこかへ行こうとしますと、他の三人をよけて通ります。しかしBという人がDという人にお茶を持って行こうとすればCという人をよけなければなりません。結局それぞれの人が独自に行動をしようと思えば何かを避けなければいけません。それを溝というのです。これをコウともいいます。これは『空間』からもらってできたのですが、『空間』にも沢山の集積された溝ができています。

宇宙は『無』である

宇宙とは何か？と聞かれた場合、その答としては『宇宙には何もない』と言えます。では『何もない』が正解かというと、そうではありません。いろいろな物体が現実にあるのですから――。あるのだけれども『ない』のです。なぜ『ない』のかというと、私たち人間はそれをとどめて見る力を持っていますけれども、宇宙は流れていて、停止してはいません。停止していないために『今』というものは存在しないから、そのために『すべてのもの』は『ない』のです。ややこしい表現になりますが、『宇宙とは何か？』と聞かれても、『何もないんだ。人間もいないんだ』としか言えません。

しかしいろいろな物があるではないか、と言う人もあるでしょうが、『ある』ということは我々人間から見て『ある』のであって、宇宙から見たら『ない』のです。なぜ『ない』かというと、『時間の流れ』を包含してしまっているからです。包含しているから『ない』んです。あらゆる物質や人間も宇宙の中に包含されているから『ない』のです。すべてが包含されているがゆえに『ない』のです。

そして包含された我々人間から向こうを見ると『ある』んです、いろいろな物が――。しかし『宇宙とは何か？』と聞かれると、『宇宙は、ないものだ』としか言いようがありません。宇宙の側から見ると何も『ない』んです。なぜなら、すべての物を含めているから『ない』んです」

――これは般若心経で言う『色即是空』と同じ意味ですか？

「知りません。そういうこととは関係はありません。たとえて言うと、ゴムチューブの中へ空気をいっぱい入れたとしましょう。五気圧入れたとします。しかしその中の空気は自分で五気圧だとは思いません。我々は一気圧の中で生きていますが、そのことにだれも気づきません。学問上そのように言われているから、そうかと思うだけです。人間は莫大な空気を肩に背負っているのですが、自分の体内も一気圧で外部も一気圧ですから空気の重量を感じないのです。これと同様にチューブにつめ込まれた空気は、自分の右も左も五気圧だから空気自体は自分が五気圧だということに気づきません。人間もこれと同じで、我々は空間にいて空気で押さえつけられているのですが、特殊な病人以外に空気を重いと感じる人はありません。それは気圧が同じであるからです。

しかし宇宙というものは同じであるというよりも万物を『包含』しています。だから宇宙は『ない』のです。宇宙は過去も未来もあらゆる歴史を含んでいるがゆえに『ない』んです。全く『ない』のです。宇宙というものは――。大きさも小ささも包含しているのです。だから、『ない』んです。その『ない』世界で踊っているのが我々人間です。もし宇宙からはみ出る人間がいて、それが宇宙を見たら、万物は存在して見えるでしょう。

その場合「存在しない」世界に、おそろしい「存在」があるように見えます。宇宙は物質のすべてを包含していますが、空間をも包含しています。だから宇宙は「ない」のです。宇宙は「空間」と「時間」を包含しています。それに「圧力」も含んでいます。したがって宇宙は無限に小さくできますから「ない」んです。原子その他のいかなる微粒子も包含しているからそれらは「ない」んです。我々の体の中にいる大腸菌にとっては我々の肉体全体がとてつもなく大きいのです。もし体内の一個の大腸菌に電話をかけて、人間の肉体全体をどう思いますかと尋ねることができるとしますと、それは無限に大きいと答えるでしょう。しかし一方で人間は現在の状態で大腸菌を見ますから、それは小さくて象は大きいわけです。マンションという建物も大きく見えるわけです。電気も明るく見えるのです。

しかし我々よりももっと大きな視力を持つ生きものがいたとしましょう。そうするとそのものは私たちにとって少々暗い光景も明るく見えて困るでしょう。我々は所詮、電灯の助けを借りて見ているわけです。

以上の考え方からしますと、人間はすべて自分を中心にしているのです。だから「宇宙とは何か」と聞かれれば、それは「ない」としか言いようがありませんが、人間の側から見ればどうかと聞かれれば、その答はまた違ってきます」

人間は変化するのみ

「人間というものは、宇宙の側から見れば絶対に死にません。それは「変化する」だけです。あなたは「エントロピー」という言葉を知っていますか？　四散する現象、返って来ないという現象です」

――はい、知っています（注＝岩波国語辞典第三版によれば、エントロピーとは「原子的排列および運動状態の混沌性・不規則性の程度を表す量」とある）。

「絶えず変化するとは「戻らない」という意味です。これがエントロピーの意味です。人間が食べた食物は決して元のままの状態で肛門から出ることはありません。必ず変化して出てきます。だから人間の体は「死ぬ」のではなく、「元の状態に戻らない」だけです。我々は今「しゃべっている」という変化の途中にすぎないのです。人間は死ぬのではなく、変化するだけです。生まれてきたというのも変化の一端であり、生きているというのも変化の一端です。昨日も今日も明日につなぐための変化の一端です。人間は生きているのでもなければ死んでいるのでもなく、ただ「変化し続けている」のにすぎません。その変化というものは、どうしようもないもので、ただ「パワー」によって、その変化を組み変えることができるだけです」

――人間が死んだように見えるのは単なる変化であって、また生まれ変わるわけですか。

「生まれ変わるというふうに話をとばすと面白くありませんね。そうなると宗教的な論理に基づく説明になってしまいます。だから、変化し続けていってどうなるかということをテーマにしたときの、「生まれ変わり」を単純な「生まれ変わり」と結びつけると根拠のない話になってしまいます。宗教臭くなるのです。宗教というのは「宗を教える」という意味です。だから宗教とは宇宙の意味を説くのが本当の姿です。その宗とは何かというと、すべての根源であり、それは「ない」という世界なのです。「包含している」ということは「ない」ことなのですが、それは「ある」ということにもなります。でも、あまりにもすべてを包含すると「ない」ことになります。部分的に包含すると「ある」側も見えるんですが、すべてを包含すると「なくなる」のです。あらゆる大と小とを包含しており、形も包含しているから「ない」のです。

ここで間違えてはいけないのは、人間の体内に胃も腸も膵臓も肝臓も肺も脾臓も盲腸も何でもそろっているといいますと、現実に「ある」ということになりますが、体内に「すべて」を包含すると、「なくなる」ということなのです。ある一部を包含するというと存在が認められますが、「すべて」を包含するというと「なくなる」のです。空間や時間まで包含しているのですから――。それが「宇宙」なのです。

宇宙とは「愛」でもある

しかし宇宙には「愛」があります。そして「愛」は「変化」ということです。変化だから、それ自体が変化し続けて、こんなとてつもない宇宙という大きさをあらわしてきたのです。あちらこちらに「愛」というものを合成しながら拡がり続けているのです。面白いでしょう」

――宇宙とは「愛」であるということについて、これは言葉の問題ですが、ジョージ・アダムスキーは「愛」を「意識」と言い替えたに違いないと思うんですが、これはどうでしょうか。

「意志とか意識とかいうものもあるわけですが、「無感覚の出会い」というものには「愛」は芽生えないのです。「意志ある出会い」であってこそ「愛」が芽生えるのです。だから「意志」と言ってよいのかもしれません」

――アダムスキーは「意識」と言っているのですが――。

「それは「意識」でもよいし「意志」でもよいでしょう。「意志」または「意識」も同じことです」

――それはつまり「愛」であると――。

「そうです。Aという人が路傍の人であった場合、「意識」せずして私はその人にたいして「愛」が芽生えません。そのときだれかが注意をうながせば私はその人を「意識」するわけです。そして「愛」というものが芽生えてゆくわけです。たとえば私とあなたがここで話し合える機会が生じたのは、相互に「意識」し合ったからです。その「意識」の結果が「愛」と言えるでしょう。

だから宇宙とは「愛」です。そして、「愛」が変化を起こすときに「意識」が始まります。だから宇宙の源は「愛」です。その「愛」が作動し始めるときに、「意識」が必要なのです。だからどこに

でも「愛」はころがっているのです。だれでも知らない所にいっぱい「愛」はあるのです。それで「意識」が確立したら「愛」が活動を始めます。

たとえば自動車製造工場で沢山の新車が作り出されています。だけど、その工場の従業員は「これはウチの車だぞ」と言われるからこそ、それらの車を大切にするのです。そうでない限り、数百台の車があっても、「沢山の自動車があるなあ」としか感じません。そこで車を買う人も「さあ、車が届きましたよ。乗ってみて下さい」と言われたときに初めてその車にたいして「愛」が芽生えるわけです。最初に車の販売所へお客さんが行ったときは数百台の車しか目につきません。つまりそこには「愛」しかないのです。その「愛」が作動するためにはお客さんの側に「意識」が必要なのです。そうすると初めて「愛」が芽生えます。つまり「変化」というものが作動します。だから「意識」だけでも「愛」だけでもいけないでしょうね」

――両方を一緒にした状態ですか。

「一緒というよりも、「愛」はどこにでもありますから、それを作動させるのは「意識」と言えるでしょう。それでアダムスキーが「意識」と言ったのは、「愛」があまりにも空間にありすぎたからでしょうね」

――アダムスキーが「愛」という言葉をあまり用いなかったのは、キリスト教などで「愛」という言葉をよく用いますので、宗教と思われたくなかったのだと思います。

「なるほど。その「意識」を「一体心」と言い替えてもいいでしょう。万物が変化する状態に至らしめるエネルギーを、「一体心」とも言えます。

人間が万物を愛しなければならない理由

たとえばここに二つの異なる物体があるとします。それは地球人の吸うタバコとライターです。それが相互に作用しますと煙を出します。いったん煙を出したが最後、二つの物体によって生じたものを元の状態にもどそうにもそれはできません。その作用し合う力を「一体心」と言うことができます。二つの物質が一体化して分離できず、しかも更に変化してゆくさまが「一体心」です。これは言葉の問題ですから、あなたがどのように呼び方を変えてもかまいません」

――そうしますと「愛」が根源ですからその「愛」が――。

「「愛」が根源ですから「愛」は無尽蔵にあるのです。この「愛」が宇宙なのですから当然です。どんなに物質や現象をこまかく分割しても、どこまで行ってもあるのは「愛」なのです」

――そうしますと、現実において私たちは、あらゆる人を愛さなくてはいけないということになりますね。

「そうです。人間ばかりではなく、物質をも愛さなくてはいけません。空間も愛さなくてはいけません。善も悪も愛さなくてはいけません。明るさも暗やみも、熱さも冷たさも、すべてを愛さなくてはいけません。自分を中心にすると熱さや冷たさが出てきます。自分を中心にすると「愛」の反対である「憎しみ」が出てくるのです。

「愛」と「恋」との相違

自分を中心にしたときの愛情を「恋」と言います。「恋」とは何かというと、それは「鏡」だと覚えておいて下さい。自分の姿しか映さぬ鏡です。または「恋」とは「省」です。省みることです。これは想とも言います。つまり「恋」とは鏡です。「愛」とは結合することであり、変化することです。見返り（報い）を要求しないことです。先程の煙の例のように、絶対にその力を自然界に返してゆくことにあります。それが「愛」です。

一方、「恋」というのは自分の所へ何かが戻って来ることを要求します。自分の所へ戻って来る状態を「恋」と言います。「愛」は自分の所へ戻ってこない状態を意味します。そうすると淋しい気もしますが、しかし次々と変化して何かが生み出されてゆき、力強く外へ去って行くんです。それが「愛」です。変化してよそへよそへと行きますが、そのかわりに新しいものを生み出しながら、また結合してゆきます。変化して去って行くのでそれで終わるのかというと、そうではなくて、新しいものがもっともっと生み出されてくるのです。だから終わりがないんです。だけどこれを貯えることはできません。これが「愛」です。

「恋」は変化しない状態ですが「愛」は変化してゆきます。「恋」は鏡ですから自分が映ってくれないと困ります。つまり自分の思いどおりにならない場合を「恋」というのです（注＝ここでは男女の恋愛のことだけを言っているのではない）。

一方、自分の思いと相手の思いが結合され融合されて変化の状態が生じるのを「愛」といいます。ただ「思う」という単純な状態は「恋」です。だから「愛」と「恋」とは全然違います。子供のない夫婦の場合、「もし子供が生まれていたら」と言えばそれは「恋」です。「もしも」とか「たとえば」とかいう仮定の気持は「恋」なのです。「一例として」という場合も「恋」です。

「愛」とは「変化」ですから、それは現実なのです。宇宙なのです。「恋」は自分の内部で行ったり来たりするために現実ではなく、仮空なのです。「愛」は変化を生じますが、「恋」は変化を生じません。

宇宙とは「愛」ですから、変化を生じさせることができます。宇宙が「恋」だったら困るんです。我々人間は存在しないことになりますから――。いま話し合っているように「わたし」と「あなた」という関係、あるいはAとB、BとC、CとDというような対人関係が「宇宙」なのです。なぜなら、その関係にとって必要なものがどんどん付随してゆくために、相互の関係が拡大されてゆくからです。宇宙とは何かといいますと、これは「源」です。いまAとBとの二人がどこかで会う約束をしますと、そこに「愛」が構成されることになります。そうする

とそのために、二人の人が一定の場所へ行くには道路、タクシー、電車、汽車、駅、建物その他の物が必要になってきます。結局、「愛」というものを構成するために沢山のものが出来上がって、それらが必要になってきます。他人もそれを利用します。そしてそれらが無限に拡がって宇宙を構成するのです。だから「愛」は素晴らしいパワーです。

だから宇宙とは何かというと、そこにはなーんにも「ない」のです。それはだれの所有物でもないんです。逆に言いますと、原点になった二人の「愛」が宇宙だとも言えます。

以上のことが理解できますか。もっとわかりやすく説明したいのですけれど、とにかく言葉にならない、というよりは言葉がないですね」

円盤が瞬時に宇宙を飛行する理由

――いまのところ「愛」という言葉以外に表現の仕方はありませんでしょうね。「結合と分散、分裂前の存在としか言いようはありませんね。こちら側からゆくと結合し続けたときの頂点が「愛」です。また分散し続けてゆくときの振り出しが「愛」なのです。言葉で表現すればそういうことです。もう一度言いますと「愛」とは結合の頂点を意味し、分裂の始めを意味するということになるでしょう。しかしそのときには時間と空間を取り入れねばなりませんから、そうなるとアインシュタインの相対性原理その他の理論では間に合わない所が出てきます。それで空間の歪み、時間の歪み、光の歪みなどがあとで構成されてくるわけですから、その歪みというものを利用して「愛」が完遂されるのです。活動する物体に他から何かの力が加わると歪みが生じます。それが時間という歪み、物質という歪み、または光という歪みなどになりますが、そういうものが手前まで来て、そこから向こうを見ると大変むつかしいのです。

あなたは子供のときに川遊びをしたことがあるでしょう。上流から水が流れてきます。小さい川です。その中に水をせきとめる小さいダムがあるとします。すると水はその上を溢れて下へ落ち込みます。ダムがあるということは落差を生じさせることです。そして落下した水は渦を巻きます。

あるいはダムのない川があって水が急速に流れているとします。川岸には岩が突き出ています。すると流れて来た水は一様にすべて下へ流れるわけではなく、岩にあたって逆に上の方へ逆巻く水もあります。したがって下へ来るべき水が一度逆に戻って、それから下へ流れるわけです。

そこで、なぜ宇宙が大きいかといいますと、ここに地球があり（図を描く）、ここにAという星があり、こちらにはBという星があります。またこちらにはCという星があります。いずれも惑星です。

いま宇宙からいっせいに大量の時間が流れてきたとします。そしてその途中で障害物となる何かの力が加えられたとします。そこで時間の流れは逆戻りしました。その勢いで上にはねあがるのもありますが次第に力を失って落下し、Cという惑星を通過します。次にBという惑星のエネルギーに引き寄せられて、はね返り、また上にあがって落下し、これを繰り返して、やがて地球に届きます。だけど我々から見ればみんな同時に入って来たのです。しかしこの時間の流れはずいぶん昔に出たものです。ここに別な流れも来ていますが、これはあとから来たものです。ここで二つの流れが結合します。そうすると近くのAという星は観測すると大変遠方にあるということになるんです。宇宙空間に存在する天体の距離は歪みどおりにしか計算できないのです。

このAという惑星は地球の隣にあって、距離は大変短いとしましょう。この図面上で物差しで計ってみると三・五センチメートルあります。この実測を三・五キロメートルとしますと、現在は光を頼りにして距離を測定しますから、そのように計算しますと十三・五キロメートル向こうにあるということになります。大変遠い所にあることになるのです。

このように宇宙というものは歪みを生じるので、すぐ隣がすごく遠方になるのですが、実際は近いのです。光を利用して観測するとひどく遠くになるわけです。地球人はその歪みを破ることはできません。破れば宇宙の遠い彼方へ瞬時にして行けることになります。

空飛ぶ円盤といわれるものは、歪みを向こう側から見るためにそれを破ることができるのです」

（以下次号）

編者付記

右の記事は二月のあるうららかな日に長時間かけて行われた対話の一部である。語り手がだれであるかを現時点では言えないけれども、異星人ではないが地球人のレベルを超絶した宇宙的な偉大な哲人であるとだけ付言しておこう。

ここに展開する哲学はだれしも想起しがちなプラトンの思想などを中心としたギリシア哲学以来の如何なる形而上学や宇宙論、その他の哲学の理論や宗教の教義とも相違することに読者は気付かれると思う。

アダムスキーは「宇宙の意識」と人間のマインド（心）との一体化を説いて、主として個人の解脱と内在する未知の能力の開発法を教えたのであるが、右の哲学は人間と宇宙との関係を明確にし、更に宇宙の本質にも言及している。それは究極において「無」であるというが、これまた東洋の無の思想とは全く関係はないし、「愛」の定義も宗教の説く愛よりもはるかに深遠かつ宇宙的である。その「愛」なるものはアダムスキーのいわゆる「宇宙の意識」と同義語であると思われるが、他に適切な語が見当たらぬので、「愛」という言葉を使用したという。いずれもコトバの問題にすぎぬことで、要するに〝創造的一体性〟を意味する表現である。またここでいう「万物にたいする愛」は、巷間で安易に語られる同胞愛などよりもケタはずれに雄大な愛のフィーリングを意味すると思われる。宇宙的人間を志向する者は、至難ではあるが実践に踏み切る必要があろう。

81年度日本GAP総会講演 (2)

宇宙的動機とGAPの役割

―アダムスキー哲学について思うこと―

〈大阪支部代表〉 山田宏三郎

「アダムスキー哲学について思うこと」というテーマを予定しているわけですが、大体どういった内容なのかについて簡単に説明しますと、『生命の科学』をはじめ『宇宙哲学』、『テレパシー』その他の書簡集、講演録など、わたしがこれまでに知ることができたアダムスキーの哲学に関する記録を読んだり聞いたりしたことについて、わたしたちの実際の生活やわたしたちを取り巻いている社会的な出来事、あるいはGAP活動の周辺で起こる現実的な問題に対してどのように応用すれば良いのかといった内容になろうかと思います。

アダムスキー哲学は、それを知識として記憶しているだけではあまり意味がなく、日々の生活の中で実践してはじめて生きたものになるのだということは当然ですし、その点については誰もがそれなりに努力しておられると思いますが、わたしに関していえば、実際のところ、どれだけ熱心に実践を行い、どれだけ進歩したのかについて多数の方がたの前で披歴するほど自信を持っているわけではありませんので、今日は、わたしの個人的な体験というよりは世間一般で起こっているもの事やGAP活動をめぐる実際的な出来事、あるいは一見哲学の実践とは無関係と思われるような日常の問題について、わたしたちがどのような基準で行動し考えなければならないか、といった事柄についてわたしが感じたことを発表させていただくつもりです。

これは、あくまで意見発表ですから、恐らくは誤っているところもあるでしょうし、自分の無知をさらけ出している部分もあるかも判りませんので、その点についてはご忠告なりご批判なりをいただきたいと思います。

アダムスキー哲学と宗教のちがい

わたしはこれまでに様々な人と出会い、様々なことを教えられ、様々なご援助をいただいてきましたが、なかでもGAP会員の方がたからは大変多くのことを学んできました。それらの人々の中には、わたしなどに比べて精神的にずっと勝れている人が沢山おられます。特に哲学の実践という点については、大変な努力をしておられるのを知っています。

ところが、そういった人々とは別に、わたしのような凡人の目から見ると、やはり非常に熱心に哲学の実践に努力しておられるように見える人々の中から、脇道へそれて行く人が案外多いということに気付きました。脇道といいましたが、それは何もGAPをやめて会員でなくなる人のことをいっているのではありません。そうではなくて、アダムスキーを否定し、もっと勝れた真理が外にあるといって去って行った人々のことをいっているのです。もちろん結果的には、そういった人々は必ずGAP活動を非難します。

このことからいえることは、熱心さというものは必ずしも法則を理解したことにはならないということです。考えてみますと、世間にはいろいろな意味で熱心な人が沢山おられます。その中には、勉強に熱心な人、仕事に熱心な人、お金儲けに熱心な人、宗教の信心に熱心な人など様々です。

このような人々の中で、アダムスキー哲学を実践するうえで一番紛らわしいのは、宗教的、神秘主義的な熱心さです。このような熱心さを備えている人々の中には、一見個人的な動機からではなく、奉仕的な動機で行動をしているように見えることがあるからです。いうまでもなくアダムスキー自身も、ものごとに取り組む場合にどういう動機で取り組むかということが非常に大事であり、個人的な動機ではなく多数の人に奉仕しようという動機が最も重要だといってはいますが、宗教的な行動はこれとは異なり、たとえ外見上は似ているように見えても、実はその行動は本当に法則を理解した結果としての行動ではなく、特定の偶像を催眠的な状態で崇拝するようになり、その偶像とかかわりがあると思われる教義を何の分析もせずに暗示的に信じ込んでいるわけです。そこから狂信的ともいえる熱心さが生れてきますから、この熱心さはわれわれにとって何の参考にもなりませんし、尊敬の対象にもなりません。むしろ、その熱心さのためにその宗教的教義と異なる意見に対して激しく対立し、あげくのはては戦争をも辞さないということが多くの歴史的事実としてあるわけです。

催眠的な熱意は本物ではない

かのインドで、救貧活動に身を挺して働いているマザー・テレサ女史の活動が宇宙的かどうかということが話題になったことがあるそうですが、その活動が多くの人々の模範となり、政治的にも極貧に苦しむ人々を何とかして無くさなけれ

ばならないといった気運を促す点では、大変立派な行為であることには違いありません。しかし、それをアダムスキーの業績と同列に比較したり、GAP会員すべてがこれを見習うべきだということには少し無理があるように思います。なぜなら、彼女が信じる宗教的教義に、ある意味で催眠的要素が含まれているからです。つまり、彼女の行為が立派だということと、彼女が宇宙の法則を理解し催眠的でなく、意識に従って行動しているかどうかとは別問題だからです。

宇宙的な動機と信念

しかしながら、そのことは彼女ほどの信念を持つ必要がないということをいっているのではありません。何の疑惑も持たないで「カラシ種ほどの信念がありさえすれば、自分の望むものが正しいものであればいかなる状態をも達成できる」とアダムスキーは述べています。

それでは、この信念に支えられた正しい熱心さというのは、一体どういうことなのかということになります。それは永遠の法則と働きについて信念と確信を持つことだといわれています。これは今自分が行おうとしていることが、断定とか否定とかセンスマインドによる独断ではなく、無数の人々に奉仕できるのだという動機に基づくものであれば、それは必ず宇宙の法則に叶うものであり、必ず実現するのだという確信を持つことを意味します。

宗教的な熱心さとの違いは、まず、①宇宙の法則がどのようなものなのかを理解していること。次に、②信念を持つ前提として、地球上の古い習慣から出てくるセンスマインドによる断定とか否定とかの意見ではなく、従って催眠的な要素を含まず、意識的な動機、つまり個人的ではなく無数の人に奉仕しようとする動機から出たものであることです。

このように、わたしたちが持たなければならない信念というのは、非常に宇宙的な動機から出たものでなくてはならないことが判ります。もちろん、宇宙的な動機がなくても想念自体は良い方にも悪い方にも応用できますから、何かが実現したからといって、必ずしも正しい信念の結果だとは限りません。しかし、だからといって宇宙的な動機が重要でないということにはなりません。想念の悪用は自分を破壊しますし、想念の善用は調和ある状態をもたらすからです。

トラブルを気にしないこと

このように、外見上の熱心さというものが必ずしも理解力からでたものではないという話をしましたが、つぎに、ある特定の人物なり言葉なりを表面的に判断しただけでは十分ではないという例を取り上げてみました。

わたしたちはアダムスキーに直接会ったことがなく、書物を読んだり他人から聞きづてに知っている程度ですが、なかには、アダムスキーという人は非常に立派な人で、一度も過ちをおかしたことがない、といった英雄的なイメージを描き、そのイメージに反する事実を全部否定してしまう人があります。たとえば、アダムスキーと一緒に活動していた人が後にその活動から離れていったことを見て、今まで信じていたことが裏切られたような気がして、今度は逆に、アダムスキーは大変立派なことをいっていたけれども自分の身辺に最初からトラブルの起こらない人物を選んでおくことができなかったということは、もともと彼が大した人物ではなかったからだと考え、あげくの果てはアダムスキーのいっていることはすべて嘘だなどという人があります。

しかし実際には、われわれが宇宙の法則を学んで行く際に起こる出来事は、必ずしも立派なことをやっているから障害になるようなことは何事も起こらないという性質のものではなく、日常誰にでも起こるような非難、中傷がアダムスキーに向けられたり、一緒に活躍していた人が離れて行ったり、その外いろいろな妨害活動があった中でアダムスキーの活動は行われたわけです。しかし、アダムスキー自身はそれをあまり困難だとは受けとめなかったでしょう。

なぜこんな話をするかといいますと、わたしたちを取り巻いている現境も全く同じではないかと思うからです。もし、わたしたちの横にアダムスキーがいて、毎日一緒に生活をしたと仮定しますと、日常の生活の中ではわたしたちとアダムスキーの間にはさ細な意見のくい違いが生じることもあるでしょうし、それが原因でアダムスキーから離れようかどうか迷う人も出てくるのではないかと思います。時と場所を隔ててながめる場合と違って、実際にその人と接する場合には、様々な問題が起こります。また、わたしたちの実際の活動の場でも、様々な中傷や妨害など、アダムスキーを取り巻く出来事と同じようなことが起こっており、そのような中で自分を見失わないためにはどうすればよいでしょうか。

日頃の実践が基礎

わたしたちの中には、宇宙の法則を観念的に理解しているだけで、日常、生活をしていくうえでの極くありふれた問題に対して、それを応用することが苦手な人が多いと思います。久保田先生がよくいわれるように、明日の米代を今日いかにして稼ぐかということや、今月の家賃をどのようにして払うかが最も重要であって、学校で勉強をし、職探しをし、家族を養いながら毎日をあくせくと生活する中で宇宙哲学を実践し宇宙的記憶を積み重ねて行くよう義務づけられているわけですから、宇宙の法則を本当に理解し、より良きカルマを作るのだという確信を持っていれば、毎日の生活の中でどんな困難な問題が起こっても大して苦労とも感じることなく、また誤った方向に進むこともないはずです。

わたしたちが良き友人たちと共に宇宙の法則を学んで行こうとするときに、その周辺で起こる現実的な問題も、このような日常生活で培われた宇宙の法則の実践力があって初めて乗り越えて行けるのだと思います。わたしたちに対する非難、

中傷や様々な誘惑によって動揺したり、誘惑に負けて離反して行かないためには、このような日常生活で起こるありふれた問題について、良きカルマを作るには今、宇宙的な生活を送ることが重要だという長期的な視野に立った判断が必要なのと同様、わたしたちの「知らせる運動」は、何千年というスペースプログラムの中でどのように進めて行けば良いのかといった立場から判断する必要があります。そうした観点から物事を判断すれば、多少トラブルが起こったからといって少しも動揺する必要はありません。

偉大なるGAPの役割

つぎに、ある特定の言葉の内容をよく理解できないで疑惑を起こしている例があります。

アダムスキーは団体を組織しないといっていたのに、IGAPではアダムスキー財団を作り、アダムスキーの遺産を独占しているのではないか。また、日本GAPもかつて社団法人を作る計画を持っていたことがあり、GAPというグループ自体も一種の団体的な性格を持っているのではないか、というものです。

このような意見は、法律制度という専門的な知識を持っておられないことから出てくるものだともいえますが、もう少し広い視野からもの事を見る習慣をつけていただければ容易に理解できるのではないかと思います。これは、オープンマインドを持つということにもつながります。

まず、アダムスキー財団と称する場合の財団とは、一定の財産――アダムスキー財団の場合は金銭ではなく、著作権や出版権といったものが中心になりますが――を保存しながら、それを一定の目的のために非営利的に活用するという働きを持っています。

このような制度を利用しアダムスキーの財産を独り占めしようとするのは、多くの人に知らせなければならない宇宙の真理が特定の人に私物化されて、知りたいと思う人に知る機会を失わせるのではないか、というのが反対者の意見です。

これに対する解答を見つけるにあたって、アダムスキー哲学を歪められることなく正しく後世に伝えるためには、現在の地球社会では何が最良の方法かという点を考える必要があります。もっとも、制度は適切であってもそれを活用するのは人間ですから、その責任者は当然宇宙の法則を完全に理解していなければならないのは当然のことでしょう。

この制度が最も適切だというのは、何よりもまず貴重な記録が散逸せず、出版権を保護することによってやたらと無理解な人の手に渡ることがなく、哲学の内容が歪められる恐れがないことです。

つぎに秘密が保たれるということも重要です。ご存知のように、何でもかでもやたらと知りたがるという地球人の悪い癖から記録を護り、必要なときに必要なことだけを知らせることが肝要で、すべてが公開されてしまうと、必要以上のことを知ってしまったために自分自身で知るための努力をする機会を失って、真の意味での意識的な進歩が妨げられることになります。財団制度は法律によって秘密を護ることを保障しているわけです。

また、社団法人の場合も財団法人と同様、非営利的に運用することができますが、財団法人が財産的なものに着目して設けられた制度であるため多額の基金を必要としますので、それに代わるものとして社団法人の制度を利用することも考えられます。財団と社団の違いは、運用次第では大した相違とはならないでしょう。

知らせる運動にとって、もう一つ重要なことは出版活動だと思います。書籍を出版する場合、販売の取次ぎをする会社に受け入れてもらえないといけないそうですが、それには出版する人が一定額以上の資本金や基金を持っていて、しかも法人組織になっていないといけないようで、そのためにも財団法人や社団法人が必要になります。

以上のようなことから、財団法人にしても社団法人にしても決して財産を私物化するためのものではなく、アダムスキーが残した哲学を正しく伝えるために今の時代の地球社会では必要なものだということがお判りいただけると思います。

すべての人が必要である

また、GAPというグループ自体、一種の団体ではないかといった疑問については、入会も退会も自由で少しも拘束されるものではなく、特定の人でないと入会できないというものではありませんし、ましてニューズレターを一般向けにも書店で販売しようとして努力しておられることから見ても、あらゆる人に宇宙の法則を知らせようとする目的に叶っているものです。

以上のように、アダムスキー哲学に関心のある人々、とりわけGAP会員の方々との意見交換の中で、様々な問題について、恐らく、多くの誤りや不充分な点はあろうかとは思いますが、自分なりの理解をしてきましたし、全く意見の異なる人々からさえも多くの示唆を与えられてきました。このことからも、すべての人は必要なのだ、という実感をますます深くしている次第です。今後とも、よき友人の皆さんのご指導をお願いしまして、わたしの話を終わらせていただきたいと思います。

●ジョージ・アダムスキー

偶像崇拝と宇宙哲学

石川公一
（日本GAP旭川支部代表）

世の中には（地球は）何かにつけて偶像崇拝主義なるものがはびこっているように思われる。あのイエスが言った「偶像を崇拝することなかれ！」という意味は単に宗教的表現としてではなく社会に対する警告とも受けとめられる。通常の教会はことごとく口をそろえて自分たちに有利な方向へそれを引用したがるのである。

理由はともあれ、その偶像崇拝の存在する世界が、宇宙文明の到来を切望してやまぬ者たちにとっては、まことに遺憾なものなのである。

価値観や理念の相違を捨てよ

この宇宙におけるあらゆる生命体は、常に尊重され敬意を表されるべき存在なのに、どういう訳か価値観や理念の相違によって、いとも簡単に押しつぶされたり、あるいは分裂をきたし、ついには自分自身の存在さえ見失ってしまうのである。

上智大学教授でドイツ人のエルリン・ハーゲンという神学者は『善と神を求める人々のために』という著書を出しているが、当時カトリック信者で二十歳の学生だった私は真理を求めるのあまり、いろいろな書物を購入したり、ある種の新興宗教の門をたたいたりして、そうした中でその本を手に入れた訳であるが、今考えてみれば、アダムスキー哲学と比較すると全く足下にもおよばないものであった。その内容にしても教授は価値哲学というものを全面的に打ち出し、価値の基準を神学思想に求めたのである。それについて教授が、いかに諸々の哲学・歴史学・心理学・教育学・倫理学・論理学・形而上学を学んだとしても、根本的な解決にはならないのである。

なぜなら、そこには思考が宇宙空間の領域にまで達しておらず、テレパシーの問題にもふれていないし、第一、生命についての認識、つまり正しい復活の意味が理解されていないのである。だがそれでもカトリック信者はその神学者を支持するだろうし、学生たちにしても同じことが言えるだろう。とにかく世の中は矛盾だらけなのだ。

しかしこの日本に宇宙の法則を伝える偉大な塾がある。それは日本GAPである。素晴らしき哉！　我々はこの地球という生命の学校にいて、しかも〝日本GAP大学〟に在学して、唯一の真のカルマを持つ久保田会長により宇宙の法則を伝えられ、そしてテキストとして宇宙の大使・アダムスキー師による『生命の科学』と『宇宙哲学』を学んでいる。しかも大師はあのヨハネの黙示録を書き記した本人でもあるのだ。

雑音に耳を傾けるな

以上のことを他の人間が信じようが信じまいが問題ではない。たとえカトリック教会やプロテスタント教会が否定しようが批判しようがそれも問題ではない。大切なのはそれが事実であることを認識することと、周囲の騒音に耳を傾けないことだ。そしてこのためには強烈な信念が必要になってくるのである。

さて本年は一九八二年、惑星直列の年である。世間にはこのことを大異変と結びつけたがる人たちが見受けられるが、これはあくまでも太陽系の現象なのであって、我々は冷静さを保っていればよい。何か知らないが世の中はすぐ偶像を作りたがるのだ。天使か悪魔かわからないくせに――。

書店には『終末の世界』とか『ノストラダムスの大予言』とか、他にも沢山の、うんざりするほど興味本位の出版物が氾濫しているが、これでは純粋な青少年たちを混乱させるだけである。特に不安や恐怖心を起こさせることは重大な責任である。

信念をもって前進しよう！

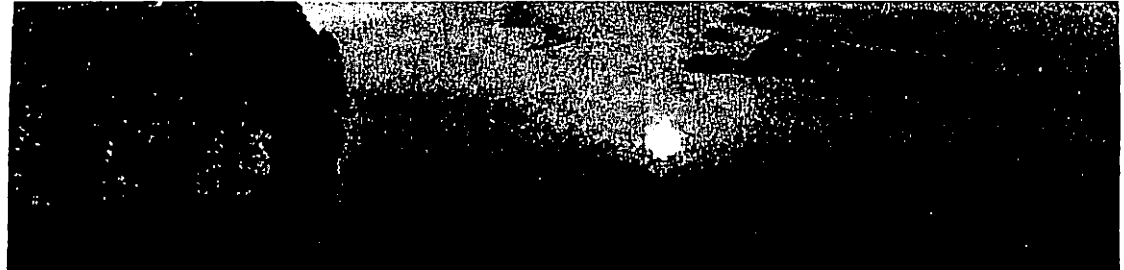
この広大な宇宙にあって〝思考の原理〟を発見する者は決して滅びないだろう。イエスの言う〝狭き門〟から私たちGAP会員は着実に歩み始めていると思う。なかにはそうでない人もいるかもしれないが――。

これから先、何が起ころうと、我々は常にテレパシックになり、信念を持って生きてゆけば、〝生命の書〟からその名を消されることはないだろうと確信する。但し創造主に自分をゆだねるならばだ。

日本GAPも二十年が経過し、スペースブラザーズが注目する大集団として、今後大きな期待にこたえるべき段階に来ていると言える。そうしたなかで確固たる強力な信念と忍耐力をもって忠実に宇宙計画の一環としてアダムスキー師の意志を受け継いでこられた久保田会長には頭が下がる思いでいっぱいである。そのことからも私たちは感謝してもしきれないほどに会長は絶大な奉仕実践者なのである。そして過去一年間休むことなく会長の助手として活躍された山口緑氏（元山形支部代表）には心から感謝の言葉を述べさせて頂きたい。本当にありがとう！と。

また過去一年私は大変多くの方々から素晴らしいレッスンを受けることができた。そして地方支部代表の方々、その他のGAP会員の方々から大変有難い激励の書簡を頂いた。深く感謝する次第である。

（日本GAP旭川支部報『スペース・プロムナード』第6号より）



☘私はこうして奉仕の尊さに目覚めた☘

ある山村での宇宙的な生活

加藤修一

美しい大自然の中へ

私は以前からあこがれていた山村での生活を実現させるために、長年勤めていた会社を思い切って退職し、引っ越した。

この山村は山肌があまりにも険しいため、家もろくに建てる余地がないありさまだ。それゆえ民家はポツンポツンと点在し、山や樹木で隠れた状態になっている。この山村は農業が主で、これといった特産物もなく、極めて平凡な村である。村に残っているのは年寄りと、わずかばかりの子供達だけ。若者はほとんど町に出払っている。しかし深山ゆえに現境は抜群である。

谷川の渓流はこのうえなく澄み切っており、流れの音色も自然のリズムそのもの。雑草の中に一歩二歩と足を踏み入れると、数々の虫達が四方八方に飛び出して行く。マムシが多いと聞いていたので、深入りはしないことにした。ウグイス、オオルリがとても美しく、清らかなさえずりを渓流の谷間に響き渡らせている。

杉木立ちの下にかがみこんでオオルリの鳴き声に聞き入っていると、谷川のせせらぎ、木々の間をかなでるそよ風等の協和音が全身にしみわたる思いである。そのたとえようもないうれしさに強く感動しつつ、しばし楽しむ。とにかく今までの勤めから解放されて、のびのびとして、広々とした歓びに全身が満たされ、とても気持ちがいい。

それにしても、何にも煩わされることのない今の自分は何と幸せなんだろうと、かえすがえすも自分自身に言い聞かせた。

夜は無数の虫やカエルの合唱に耳を傾けながら夜空を仰ぐと、これまた長年見ることもなかった星空の美しさに感涙さえする。

双眼鏡で銀河を望むと、これまた絶景である。星の数ほどの星々が目に飛び込んでくる。「よくもまあこんなに無数の星々があるものだなあ」と不思議な気持ちにさえなる。その中の人間とは一体何なのだろう、とつくづく考えさせられた。

「奉仕」の理解を求めて

さて、そうこうして自然を楽しむ日々が幾日か過ぎたある日、民家に通じる山道が雨のため崩れたということを耳にした。この時、「他に奉仕せよ」という言葉が私の脳裏をかすめた。そう言えば、アダムスキーの著書に「奉仕」という言葉がよく使われていたなあ、と思い出し、ひょっとしたらこの村人達のためになるような奉仕をしたならば、案外と奉仕に関して何か得られるかもしれないな、よしそれならひと肌脱いでみるか、ということになった。

幾日もしないうちに大雨のため、また山道が崩れた。「それっ」とばかりに土方人夫の身仕度をして現場に行くと、村人三、四人が私を奇異な目で見ている。「私もこの村にお世話になっているので、ひとつ手伝わせて下さい」とあいさつして手伝いを開始した。

土方仕事は初めてだったので、とてもきつかった。谷川から頭大の玉石を運び上げるのがどんなにつらいと思ったことか。心臓が痛くなるのが感じられたぐらいである。途中で放り出して帰ろうかと思ったが、笑い物にされるのもしゃくだし、奉仕への理解も何ひとつ得られなくなるだろうし、最後までつき合おうかと自分に言いきかせつつ、その日を終えた。皆が「今日はよく手伝ってくれた」と大感謝である。自分でも「やれやれ」と思ったと同時に、とてもすがすがしい気分を味わった。

とにかくこの山村は雨が多く、地理的にも傾斜地と悪条件のため路方の崩れも多い、それゆえ何回となく手伝いに出かけた。

またある時は身体の不自由な老夫婦の仕事ぶりを見兼ねて、手のつけられないほど生い茂ったススキやツル草の畑を草刈り機で、三日がかりで刈り取って上げた。老夫婦だけでは手ガマで半月以上かかるとのこと。それゆえ老夫婦の喜びようは大変なものであった。

「奉仕」は「調和」をもたらす

その他この村ではいろいろな奉仕をさせてもらった。これらの労働奉仕に対して、私は労賃を全く受け取らなかった。そのためまたたく間に村の人達と打ち解け合うようになった。

ある日、区長さんが私に興味を示し、夕食に招待して下さった。食事をしながら区長さんが私にこう問うてきた。

「貴方は一体どんな宗教の勉強をしているのか。都会から来て遊んで暮らしてい

ながら村人以上に村の奉仕を手伝ってくれるのが、どうしても理解できない。村人でさえ、村の奉仕を頼んでも出て来てくれる人が少ないというのに、まして都会からひょっこり来た貴方が――。わからない、考えられない」

と腕組みをし、思案しつつ頭を左右に傾けていた。

この区長さんはとても思慮深い方だ。区長さんの仕草を見て、私はおかしく、愉快でとても楽しかった。この時、心にむずがゆさと大いなる満足感が心中一杯に広がった。

一瞬、ハッとした。心に強く、今確かに強く感じた。「あっ、そうか。言葉で表現できない大いなる満足感が奉仕というものか」と、今はっきりと悟った。他に奉仕することによって自分も救われる、という言葉を思い出して、今回の体験でもって明確に理解することができた。

私の体験から分析してみると、他に奉仕することによって奉仕された相手は大変感謝し尊敬を抱いてくれる。そして仲間意識が芽ばえ、大いに信頼してくれる。まさにそこには調和があるのみだ。

町から来た不思議な人

次に「自分も救われる」という言葉であるが、私はこれがなかなかわからずにいた。しかし、これも今回しっかりとわかった。

相手に対して奉仕しようという気持ちの中には、慈悲、思いやり、謙虚さが自分自身の内部に培われるのを発見したが、これは大変な驚きでもあった。当初、私の奉仕に対する考えは次のようなものだったからである。

「奉仕奉仕と言うが、人に奉仕して一体何になるんだ。一円の得にもなりはしないではないか。一生涯において限られた自分の大切な時間と労力を人様のためにつかうなんて、面倒で、とんでもないことだ」

しかし、今はこの考えが消失して、おおらかな思いやりを持った〝奉仕の精神に目覚めた〟自分自身に大きく変化した。これは私の意識において大きな宝物となった。

この地に来て四、五か月ほどたった頃、村人の中で私のことを「町から来た不思議な人」と呼ぶ人まであらわれるようになった。なぜかといえば、小さな山小屋に一人で住み、定職にも就かず、いつも野山をブラブラ散歩して、村の奉仕となると喜んで手伝いに来てくれる有様は、不思議としか言いようがないのだそうだ。

村人いわく、「私達も貴方のような生活にあこがれる。しかし、毎日の仕事と生活に追われてとてもできない。それができる貴方は偉い。貴方は大金持ちか?」私は苦笑するだけだった。大金持ちどころか貯金もほとんどない。

今の私にあるのは人に誇れる大いなる思いやりと奉仕の精神だけである。

熱き感謝と大いなる幸福

私の生活費も底をついてきた。そして次の目標も決まったので、この村を去ることにした。ある所のおじいさんは私に最後にこう語ってくれた。「貴方にはお金に換算すると数十万円がたの仕事をしてもらった。私の息子、娘以上に私達の手伝いをしてくれたことに何とお礼を言っていいかわからない」と深々と頭を下げてくださった。私としてもとてもうれしかった。こんなに喜んでいただき、満身の歓びである。このおじいさんの「息子、娘以上に」という言葉に実感がこもっていたのに私はとても感動して、目頭に熱いものさえ感じた。

この山村での私の目的は、アダムスキー哲学の実践として、水、樹木との一体化の訓練をめざしていたが、あいにくとこれには成功しなかった。その反面「奉仕の精神」をしっかりと学び取ることができた。私は自分に誓った。「できるだけ多くの人々に奉仕しよう」。また人に奉仕できる立場にいられる自分が、いかに幸せであるかをも、しっかり認識した。私はこうして「奉仕の精神に目覚めた」のである。

私はこの地を後にしつつ、春のウグイス、オオルリの美しい鳴き声、真夏の美しいチョウチョ、セミの声、キツツキの木をほじくる音、ムササビの飛行、秋のマツタケ狩り、紅葉等の思い出を回想した。途中、谷川の清流のリズムに乗って、木の葉が流れて行くのにも大いなる大自然の調和の美を見た。

（筆者は関西地区在住の日本CAP会員）

15頁のバック写真は柴田文子さん（山形県）撮影。

●無限の愛のまなざし

会員：池田雅行氏（大阪）画　（エンピツ画）

UFOの推進原理に関する一考察

反磁場による超推進法

ウエイン・ラポート
久保田八郎 訳

「二十五年にわたるUFO研究家として私は一九八〇年代を迎えるにあたり、いわゆるユーフォロジーの最近の傾向や風潮を興味深く観察している」

これはテキサスに本拠をおくMUFON（ミューチュアルUFOネットワーク）の月刊機関誌二月号に、リチャード・ホールが書いた所信である。この機関誌の編集長たるホールは更に続ける。

「大きなUFO研究グループはほとんど消滅した。多数の小さな研究グループは残っている。用心深い、とらえどころのないヒューマノイド（大気圏外人間）も消えてしまった。UFOは異次元世界から来る霊体だと言う人は残った」

UFOは異次元世界から来るという説を支持する人には、ケネス・アーノルドから天文学者のジャック・ヴァレー、著名なUFO研究家アレン・ハイネック博士のような人たちがいる。

ノースキャロライナ州ウェーズボロでセレクトロニクス社を経営する電子工学専門家のエンター・ヘンリー・モートン（三十一歳）は数種類の特許も取っている人である。

モートンが確信するところによると、UFOは霊体ではなく大気圏外から飛来する物体で、その推進に磁場エネルギーを応用するという。最近、ノースキャロライナ州ウィンストンセーレムでターヒールUFO研究グループの会合が開催されたが、その席でモートンは自分の大胆な説を発表した。自説を裏付けるためにモートンは、UFOが車のエンジン、電燈、テレビ、C電池、ラジオ、家庭用電気器具、そして人間の行動にさえも影響を及ぼしてきた多くの実例をあげた。

以上はUFOがかなりの範囲にわたる磁場を発生していることを示すものだとモートンは言う。産業用機械のなかにはかなりの磁場（百万ないし二百万ガウス）を発生するものがあるが、モートンによると、UFOの磁場は自然に起こる磁場とは異なるものだというのである。

反磁場がポイント

モートンは確信する。UFOの乗員は機体を推進する磁場エネルギーを応用する方法を知っているのだと。そのポイントは、強烈な磁場を作り出すことではなく、反磁場を作ることにあるという。

磁場というものは負の電気量を持つ電子の運動によって生じる。ところが正の電気量を持つ陽子が運動するならば、理論的には対抗する反磁場が生じるのである。簡単にするために、これを〝反磁気〟と呼ぶことにしよう。この磁場は通常の磁場に反発する性質を持つ。

そこで、通常の磁場と相互に作用し合う反磁場は、強力な反発力を生じることになる。

この仕組みは一個の原子から陽子を開放し、それを運動させることにある。モートンの考えによると、UFOの乗員はドーナッツ型の分子加速器を用いて陽子を回転させ、ヘリウムまたは水素原子から分離させながら、ついに反磁場を作り出すという。

反磁場が生み出されるという実験的な証明があるか？　経験による確証は困難だ。というのは正電荷の粒子は核反応中にしか見られないからだ。しかし巨大な核融合反応原子炉たる太陽は常に正電荷の粒子を放射している。正の電気量を持つ粒子をともなう反磁気は、地球の馬蹄（ばてい）形磁力線がいつも太陽に面している側で平たくなっている理由の説明になるかもしれない。たぶん直撃してくるこの粒子のまわりの反磁場が、地球の磁力線を押す（反発する）ので、そのために平たくなるのだろう。

UFOは異次元から来るという人たちのいわゆる〝この世のものとも思えぬ不気味さ〟を、反磁気がどのようにしてひき起こすかを説明するには、UFOとの遭遇事件をあげねばなるまい。ひとつここで空想的ではあるが典型的な〝第二種接近〟のシナリオを書くことにしよう。

星は動いていた

深夜、あなたは人里離れた田舎道をドライブしている。空は晴れて無数の星が輝いている。

突然、一個の星が動く。つっ走ってから急速にターンする。そして無音のまま夜空を超音速で飛び続けたと思うと、次に方向転換をやる。続いてこの奇妙なオレンジ色に輝く物体はあなたの自動車の上を低くかすめ飛ぶ。ヘッドライト、ラジオ、エンジンなどは停止した。光体が近くの空中に停止すると輝きは消えて、頂上に赤い光のまたたく金属の円盤型物体が目につく。

あなたは恐ろしくなるが好奇心も起こってくる。車から出て、空中に停止している物体に近づく。接近するにつれてあなたの皮膚はひりひりし始め、頭髪は逆立ってくる。あなたは立ち止まったまま先へは行けない。耳を澄ますとかすかなブーンという音が聞こえてくる。急にその音は大きくなりピッチも高くなる。突然その音はやんだ。この世のものとも思えぬオレンジ色の輝きがUFOを包み、物体は眼前から消えてしまった。

反磁場は保護の役目もする

異次元論者はこの飛行体は全く異なる物理法則のもとで作動し、我々の時空連続体から出たり入ったりしているのだと言うかもしれない。しかしモートンに言わせれば、こうした異常な現象は反磁気

で説明できるという。

UFOの船体を包む激烈な反磁場があれば、これにより信じられないほどのパワーが船体に与えられる。船体は、自然に発生するけれども対抗的な磁場の海の中にひたる。するとこの反磁場の活動により船体は緩速から光速に至るスピードで飛ぶことが可能になるのである。

UFOから放射されているこの反磁場は、保護的なフォースフィールドとしても役立つ。そして高速で飛んで来る隕石や宇宙塵との衝突を防ぐし、空気中の微粒子を押しのけたりする。このフォースフィールドは船体の前方数マイルまでも微粒子を排除するのである。空気は割れて流れ、後方で合体する。船体の前端のエッジではショック波が形成されることはないので、衝撃波の音は聞こえない。

船体を包む反磁場が地球の大気圏内で作動すると、船体に接している空気中の粒子のイオン化が発生する。その輝きの色は赤、オレンジ、ブルー、深紅、黄、黄金色、白などで、これらは船体周囲の反磁場の強さと、大気の条件などで変わるのだ。

Gフォースをものがれる

UFOはしばしば急に出現したり消滅したりする。異次元論者は、UFOは我々の現実の世界に物質化して現れたり、非物質化して消えたりするのだと言うが、人間の肉眼というものは秒速百ナ十メートル以上で加速される物体を〝見る〟ことはできないのだ。しかしUFOの船体内にいる乗員はどうなるか？　ものすごい高速で飛ぶUFO内にいて、体を引き裂くようなGフォースの影響を受けないのだろうか？

反磁場の中心部にいる乗員は、破壊的なGフォースによってむしろ保護されるのである。というのは、乗員の身体中の原子や座席の原子など、あらゆる原子は、反磁場と同じスピードで同じ方向に同時に動いているからである。一方の側から押し入って来る力は、正反対の側から来る力を帳消しにする（相殺する）ために、反磁場は乗員にたいして破壊的な影響を与えないのだ。

一方、船体から周囲に突き出ている激烈な反磁場は、付近にいる人間、動物、電磁気応用の器具などの電子に破壊的な影響を及ぼす。自動車のエンジンすらもこのUFOのフォースフィールドによって電気系統のイグニションシステムがやられるためにエンストする。どの程度の影響があるかは、UFOからの距離と反磁場の強度によるのである。

空中に停止しているか、または着陸しているUFOに接近した人は、船体内の機械から出ると思われる音響を耳にすることがある。しかし不可視の反磁場のパワーがある点以上に激烈になると、その音は突然停止する。なぜか？　これは反磁場が空気中の粒子を押し返して船体の周囲を真空にするからである。音響は真空中を伝わらないのだ。

ホルトの宇宙飛行理論

モートンの説は革新的なものだが、この研究をやっているのは彼だけではない。NASA（米航空宇宙局）のエンジニアたるアラン・ホルトもUFOは磁気エネルギーを応用していると確信している。彼によると、莫大な距離の宇宙空間を人工の宇宙船を推進するのに磁場のエネルギーを用いるのは可能かもしれないという。

モートンと同様に、ホルトも異星人は反磁場を作り出して彼らの宇宙船を推進させるのだと考えている。しかしUFO乗員はこの反磁場を宇宙旅行ばかりでなく彼が〝時空〟と呼んでいる領域を進行するのにも利用しているのではないかという。UFOの着陸や離陸を見た目撃者は、船体が突然現れたり消えたりするのを見るが、これは〝時空〟から出たり入ったりするというのだ。彼のこうした考えは磁気流体力学（電気量を持つ流体と磁気との相互影響に関する研究）に関する人間の限られた知識にもとづいた説にすぎないことを彼自身も認めている。

ホルトは記者に語った。

「四次元の時空を持つ超空間が存在し、その中には高調波が含まれているとする。地球製の宇宙船には種々の人工的に作られた波動があり、その多端子で磁場（複数）が振動している。そして宇宙の遠い地点でも統一場理論が有効であるとする。こうした条件が存在すれば、我々ははるかな星々へ簡単に行けることになるんだ。

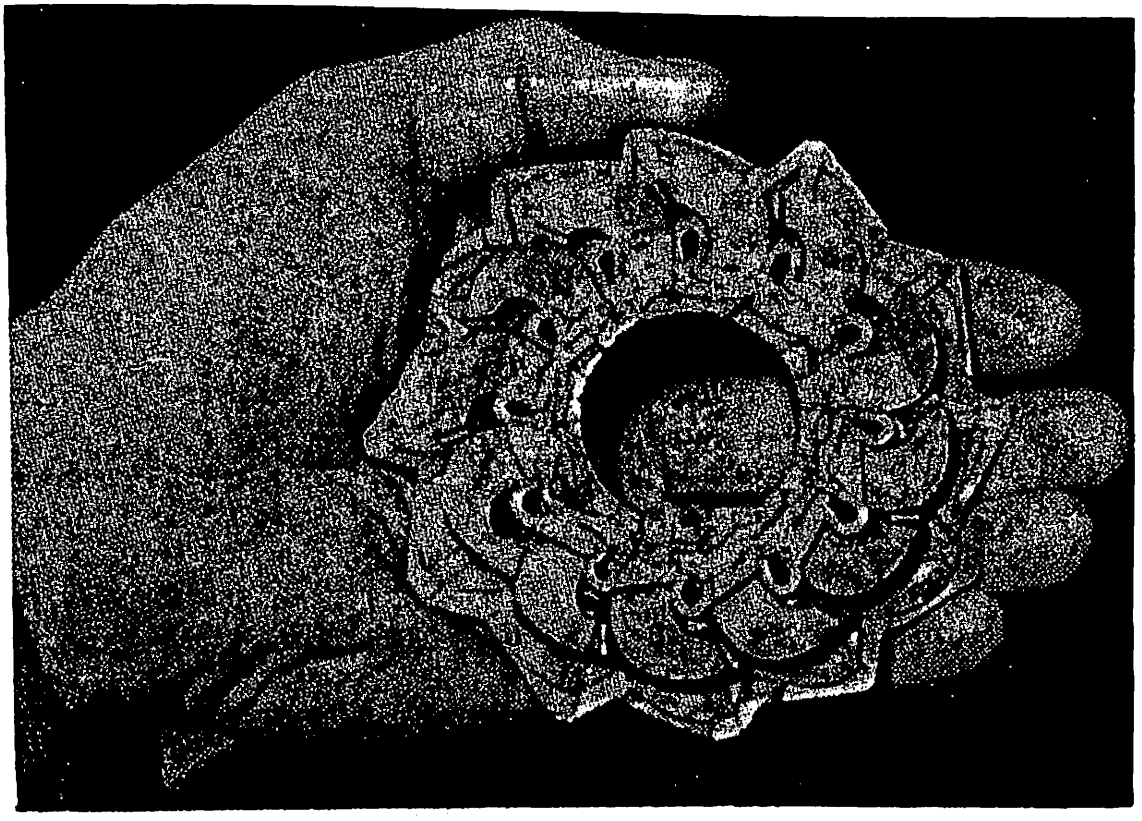
この宇宙船の宇宙飛行士たちはただパルス・レーザーを用いて、遠い時空の地点で高調波と共振する磁気流体力学的な波動を作り出すだけでよい。そうすれば我々は超空間を突き抜けて、あちこちの銀河系を越えることになるだろう」

このような磁場エネルギーを持つ宇宙船が理論的に可能であるとしても、なぜ我々は宇宙船を作れないのか？　残念ながら我々は必要な技術をマスターするにはまだほど遠いのである。

モートンやホルトの説は〝異様〟に見えるかもしれない。しかし科学は推測を通じて進歩するのだ。どれかの説が可能であることがわかれば宇宙旅行は革命的となるだろう。人間はついに遠い世界を訪問できるようになるだろう。疑いなく別な世界から来た人々が現在我々を訪問しているように――。

（デンマークGAP機関誌「UFOコンタクト」一九八一年春季号より）

（訳注＝原文にはこのあと「宇宙からの訪問者」より次の個所が引用してある。「ファーコンが説明した。『母船自体が自然の力――〝電磁気〟とあなたがたは言うでしょうが――を利用しているのです。しかも船体はいつも過剰なパワーをもっていて、このパワーには外壁を貫いて空間のある距離まで放射されるのもありますが、なかには少ししか放射されないのもあります。しかしときにはこの影響が外部の数キロメートルにまで及ぶ場合もあります。これが微小物すなわちあなたがたのいう隕石をも排除する防壁として作用し、絶えず放射されるこのパワーによって隕石類を寄せつけないわけです』」



編者付記

反磁場（Diamagnetic Field）という語は耳新しい。従来のいかなるUFO関係文献にも出てこなかった新語である。これが理論的には可能であるにしても、このような装置を持つ船体の開発はきわめて困難であり、まず実現の可能性はない。

アダムスキーの説明のなかに反磁場という語が用いられた例はない。

ア氏の解説によると、別な惑星の宇宙船は〝重力に従った〟原理を応用し、船体自体に人工的な重力場を発生させる。この重力場は惑星の磁場と調和して共振するように調節されるので、そこに共振重力場が生じると、このために船体は無重量状態になる。そうなると、ごくわずかな推力で光速を超えるスピードが出せるという。したがってこの場合の重力場はモートンのいうヘリウムや水素の原子から陽子を分離させて得られる反磁場ではなく、もっと自然な磁場を意味すると思われる。これについては本誌75号の、「さらば空飛ぶ円盤」（3）のなかでア氏は次のように述べている。

「自家発生の〝重力に従った〟場の中にあると、円盤は光速を超えるほどの速度で進行できるのだ！　自然界の力を利用するので、その運動は自然の力の運動と同じになるのだ。

宇宙船（円盤や母船）内の発生器によって生み出される推進力は、地球の物理研究所などで用いられるファンドグラーフ静電気発生機で発生する力にたとえられる。（以下略。詳細は本誌75号28頁を参照）」

すでにアダムスキー問題研究家のあいだではよく知れ渡っていることだが、パロマーガーデンズで金星の円盤から投下されたプレートに現れた象形文字と図形を、後に南ア共和国人のバシル・バンデンバーグが解読して研究した結果、この中に宇宙船の推進原理の秘密が隠されていることが判明した。そして彼は小さな模型のモーターを開発したのである。それは小さな磁石を沢山つなぎ合わせて円型とし、更にこれが二重になって、中心部には穴があいている。二重の磁石チューンは互いに逆方向に回転する。こうして人工の重力場を作り出したモーターは空間に浮かび上がって停止するという。これを発明するまでに彼は物理学やその他の科学知識をフルに応用したけれども、最後に発見した原理はあまりにも〝非・科学的〟なものであったので、彼自身大いに驚き、「こんな簡単なものをどうして小学生でも思いつかなかったのだろうと言って後世の科学者は驚くだろう」と語っている。写真によると、そのモーターは掌（てのひら）に載せられており、輪切りにしたパイナップルを二枚重ねたような形をしている＝上段の写真。

現代の科学理論はあまりに複雑化し、隠れている素晴らしい法則を発見できぬほどに歪（ゆが）められているのだろうか。

とにかく円盤の推進原理というのは意外に単純明快なもののようである。そしてカギはどうやら磁石にあるようだ。これを見直すことが肝要かもしれない。

連載第5回

さらば空飛ぶ円盤

ジョージ・アダムスキー／久保田八郎訳

●第7章 疑う人にたいする回答

人工衛星や高空気球などが大気圏外から正確なデータを供給し始めたとき、科学的な考え方にかなりの修正を加える必要が起こってきた。この章ではその修正について少しばかり述べることにしよう。

宇宙船（UFO）が出現した当時、官憲によってなされた肯定と否定のどっちづかない態度を見てきた読者は、ある頑迷な懐疑派の人たちが目撃例やコンタクト例などを葬り去ろうとして躍起になった様子を思い浮かべるだろう。

一九五三年に『空飛ぶ円盤は着陸した』が出版されたとき、この中には金星から来た訪問者との最初の会見の模様を述べたので、疑う人たちは金星に生命が存在するはずはないということを〝決定的に立証するため〟に、膨大な資料を持ち出してきた。というのは金星の大気は水と酸素を含んでおらず、炭酸ガスしかないと思われていたからである。

しかし一九五九年十一月中にアメリカの科学者連によって金星の大気中に水蒸気が発見されたため、専門家たちは金星に何かの生命が存在〝するかもしれない〟と考えるようになった。そのあと二週間もたたないうちに、ワシントン市のNASA（米航空宇宙局）本部で開かれた記者会見に出席した科学者連は、金星の大気が水蒸気を含んでいるという発見の結果、金星上の生命の存在は〝どうも確からしい〟という点で意見が一致したのである。

『アストロノーティックス』誌の一九六〇年四月号八頁から次の文を引用しよう。

「ジョンズ・ホプキンズ大学のジョン・ストロングは、地球の成層圏内よりも濃密な水蒸気を金星の雲の層の上に発見した。地球では六ミクロンであるのに金星では十五ないし三十ミクロンである」

一九六〇年二月に驚くべき声明が発表された。米国ロケット協会の創立者エドワード・G・ペンドレイ博士は次のように言明したのである。

「金星は生活するのに素晴らしい場所であることがわかるかもしれない。我々はそれを見ることができないので、その表面については多くを知らないが、それは地球とほぼ同じ大きさであってしかも太陽に少し近寄っている。金星全体がフロリダ州のようであるかもしれない」

最後まで抵抗を試みようとする各派の代弁者たちは、地球人が知っているような生命が金星に存在するはずはない、なぜならそこの大気は多量の炭酸ガスを含んでいて、金星の表面温度はあまりに高すぎるからだといって騒ぎたてた。

ところがこの声明が一般に発表されてまもなく科学者は地球の大気の上層部に高熱帯を発見したこととその温度がカ氏一千度を超えることを公表したのである。彼ら科学者の言うところでは、このような高熱帯があったのでは他の惑星の表面

温度の正確な測定がはばまれるだろうという。

炭酸ガスは文明と関係がある

惑星の大気について興味ある事実がカリフォルニア州ラジョーラのスクリップス海洋学大学のロジャー・レベル博士によって一九六〇年一月に明るみに出された。地球人はより多くの石炭、油、天然ガスなどを燃やすにつれて大気中に炭酸ガスの量を大きく増加させているとレベル博士は述べたのである。彼の予言によれば、これから百年たてば大気中に炭酸ガスをたぶん二十パーセント増加させることになるだろうという。これは五百年ばかりで地球の大気中に炭酸ガスを百パーセント増加させることを意味するのだ。一惑星の大気中の炭酸ガスの量とその惑星の文明の年齢とのあいだに関係があることを科学者は発見するだろう。

金星人は地球人よりもはるかに健康で長寿を享楽すると私が最初に述べたとき、私の説明はただちに嘲笑されてしまった。

しかし別な新しい説が一九六〇年一月に、当時アメリカ医学会の会長であったヴィンセント・アスキー博士によって発表された。地球人は今や進化をコントロールできるような時代の入口に立っているとアスキー博士は学会へ報告し、今後五十年以内に地球人は、完全な健康、高度な知性、百二十五年の寿命などを持つ超人民族に発達するかもしれないと彼は言っている。

月の大気と火星の生命

私が『宇宙船の内部』（『宇宙からの訪問者』の第二部）の中で、月にも大気があると述べたとき、世界中の疑い深い人たちが冷笑する声を読者は聞かれたであろう。

ところが一九五九年に月へ到着したソ連のロケットから電波で送り返された情報は、少数の嘲笑者たちを深刻にさせてしまった。

『エイヴィエーション・ウィーク』誌の記事によると、そのロケットは、月が低エネルギーのイオン化ガスの幕または帯に包まれていると報告したのである。このようなガスの幕は大気に似ているかもしれないと、その記事はほのめかしている。

アメリカの科学者連はこの声明をどんなふうに考えたのであろうか。航空宇宙局のジョン・タウンゼンドは、月の上空の電離層の発見はきわめて意義深いもので、自分にとっては驚異であったと述べて、更に次のように言っている。

「月からかなり遠距離にある電離層の発見は月が一定の大気を持っていることを意味する。こんなことは以前には少数の科学者に憶測できるだけだった」

この太陽系はこれまでに信じられていたような九個だけの惑星を持つのではなく、十二個の惑星を持つのであることを異星人が私に教えてくれたと述べたとき、疑う人々は高らかに嘲笑した。

一九六〇年二月にカザクスタン天体物理学研究所のソ連人科学者たちは、冥王星の軌道の外側に別な惑星が存在することを確証したと声明した。これは以前は太陽系の〝最も遠い惑星〟といわれたものである。このソ連人の主張にたいするアメリカ人天文学者連の反発が逆に疑われたので、彼らは自らの手で調査できるように詳報を求めた。ボストンのスミソニアン研究所のグスタフ・パコフ博士は、冥王星の軌道の不規則性が、その外側に別な惑星がある可能性を暗示していると言った。海星星の軌道の不規則性のために一九三〇年に冥王星の発見をみたのと似た現象である。

私が『宇宙船の内部』に火星から来た人と会ったと書いたところ、この記事も物笑いの種になった。

一九五九年にUPIの科学部編集長は次のように報道している。

「火星上に生命が存在するかどうかを推定するための最も精密な試験の結果は、存在するという証拠を増してきている」

ロウエル天文台のウィリアム・シントン博士は、パロマー山上のヘール二百インチ望遠鏡の助けをかりて、すでに次のような結論を出している。つまり火星の暗い部分は広大な植物の分布地帯で、そのなかには地球の植物に似ているのもあると。

カリフォルニア大学の科学者ウェルズ・ウェッグは、一九五八年に声明を発表して、有名な火星の運河はその複雑な幾何学的模様からして確かに知的生物が作ったものであると述べた。

ついで一九六〇年にはソ連の物理学者I・S・シフロフスキーが発表した声明のなかで、彼は火星の二個の衛星フォボスとデイモスは人工衛星であると信ずると述べた。シフロフスキーは彼の意見の基礎を、二個の衛星の表面が強く反射しすぎることと、それらの片寄った軌道の研究においた。それでこのためにフォボスとデイモスは中空の人工的な衛星であることを示すと言ったのである。

役に立たぬ観測器

この太陽系内の他の惑星群に〝地球人が知っているような〟生命は存在するはずがないという古い論は、主として天文学上の二つの有力な道具で得られる記録に基づくのである。つまりスペクトル写真機と熱電対である。

しかしこれにはまた別な論点がある。地球を回る軌道に乗っているアメリカとソ連の人工衛星群から奇妙な報告が地上に送り返されている。つまり我々が知っているような生命は地球上に存在することはできないということを人工衛星群が〝決定的に立証した〟のだ！　スペクトル写真機を利用して大気圏外からこの地球を分析した結果、人工衛星群は次のように報告してきたのだ。

「地球の大気圏内に酸素や水蒸気は存在しない！」

科学者によると、この回答は電離層の帯電層が実際には酸素と水のスペクトル線を妨げたのだという。色光線はただ記録されなかっただけなのだ！

この新発見や、同じような電離層が各

惑星の周囲に存在していることなどを考えると、他の惑星の大気に関するスペクトル写真の分析は、それが惑星の電離層の外側からなされる限り、あてになるとは言えないのである。スペクトル写真は太陽や他の恒星から〝放射される〟光の分析には役立つかもしれないが、他の惑星から〝反射される〟光を調べるのに用いる場合は明らかにあてにならないのだ。他の惑星の電離層下にある探査機だけがその大気状態について正確な測定結果を知らせてくれるだろう。

熱電対に関しては、これも電離層外で用いればその記録は正確かもしれないが、スペクトル写真と同様に電離層内で作動すると役に立たないのである。要するに地球の周囲にはカ氏一千度から四千度におよぶ高熱帯があるのだ。この高熱帯のために大気圏外の観測者にとっては、地球が人間の居住に適さないほどに高温に見えるだろう。

スペクトルの話を打ち切る前に、この際、我々の太陽系内の惑星群から地球へ到着したと噂される〝緑色の小人たち〟の話にきっぱりと結末をつけておこう。

スペースピープル（友星人）が私に語ってくれたところによると、我々が〝人間〟と呼ぶ、温かい血液を持った、酸素を吸う哺乳動物は宇宙にあまねく存在していて、地球の各人種と同じように容貌、皮膚の色、身長、体重などがさまざまに異なるのだという。人類の住むいずれの惑星でも人間こそ最も高度に発達した生物なのである。

我々が有色人種と呼ぶ薄い皮膚を持つ人種にたいしては保護的な濾過作用を大自然が与えている。皮膚の色の原因となる色素は太陽放射線スペクトルの有害な部分を濾過するのに役立っているだけで、それによって皮下の敏感な組織を保護しているのである。

各惑星の大気圏内では太陽は一定の赤味がかった色を含む放射線を放っている。濾過の役目をする色素は太陽のスペクトルの〝赤い〟部分を排除し、そのために我々の皮膚の色は〝暖色〟すなわち黄、ピンク、ブロンズ、ブラウンになろうとする傾向がある。したがって皮膚の色はただ自然の保護装置として役立っているにすぎないのに、地球人が皮膚の色にたいしてひどく誤った重要性を与えているのに驚くほかはない。

月面上の不思議なドーム

月はスペースピープルによって基地として使用されていると私が報告したとき、反対派は、もし月に人類がいるのならば我々は地球からそれを見ることができるはずだと答えた。また彼らは、〝空気も水もない〟月世界に人間が生きられるわけがないと主張した。

ところが、一九六〇年一月にフランスのニースで宇宙問題に関する会議が開かれたとき、カリフォルニア大学のハロルド・C・ユーリー博士は席上で語った。

「月はこれまで想像されてきたような死の世界ではないかもしれない」

彼の言によると、月の表面の地下には水やその他の生命を生み出す成分がいろいろ存在することを意味する放射線が月の周囲を取り巻いていると信ずべき理由があるという。

メリーランド大学のレイモンド・ディータック博士は一九五九年十二月に、月面上の何かの生命の存在を〝否定するわけにはゆかない〟と述べた。

ソ連の科学作家F・シーゲルは「月を死の世界だという概念は修正を要する」と言っている。彼は特に月のあるクレーター群の底に観察されてきた〝奇妙な光点群のその色光と位置の変化する有様〟に言及している。

『宇宙からの訪問者』の第二部（二六四頁）に次のような記事がある。

「地球から見える（月の）多数のクレーターの中に、巨大な格納庫（複数）が見えますよ。――地球人はこのことを知っていません！――私たちは本船よりもはるかに大型の宇宙船が入れるように、こんな大規模な格納庫を建設していますし、――宇宙船が格納庫へ入るときは、乗船者の体内の減圧処置がほどこされます。これには約二十四時間を要するのです」

ハーバード大学天文台から発行されている『スカイ・アンド・テレスコープ』誌の一九五八年一月号をみると、一三八頁に次のような記事が見えている。

「この数年間にアマチュア天文家たちは月面上のドーム（複数）や小さな丸い、〝丘〟などに関心を高めている。これらは次第にその数が増加するのが観測されている」

以上の月面上のドームというのは、まるで旋盤でチョークを削ったように白くて対称に見えるものである。これらは過去数年にわたって出現してきたのであって、現在までに二百個以上も観測されている。しかるに天文学者のなかには、月面上で変化するものは何もないと、まだそんなことを言い続けている者がいるのだ！

これまで天文学者は月には空気がないと主張してきた。しかしソ連のロケットが月の大気を発見する以前でさえも、多くの観測家は、月に接近するにつれて白熱して燃える流星を観測している。こんな摩擦が起こるからには大気が存在するにちがいない。オハイオ州立大学の天文学者ウォルター・ハースの報告によると、彼は月の上空に流星が燃えるのを観測したが、地面に衝突した気配はなく、これは月が流星を燃えつきさせるのに充分な大気を有していることを示すものだという。

天文学者は一時間に約十万個におよぶ流星が月に接近しているとみている。もし月が実際に大気を持たなかったとすれば、これらの流星が激突して、毎時間月の地形を根本的に変えてしまうだろう。もしこの現象が起こるものとすれば、新しいクレーター群が地球から望遠鏡で容易に観測されるはずである。というのは、長さわずかに二・一七メートル、径一・一七メートルのソ連のロケットが〝大飛沫〟を上げたからだ。このロケットが激突したときに舞い上がった埃（ほこり）とガスの雲は五百ないし九百キロメートルの高度に達したと計算されたのである。大気がなければこんな雲が湧き起こるはずはない。

宇宙の〝花火大会〟

最初の人工衛星群が情報を電波で送り返したとき、その科学的な報告を聞いて地球人はたぶん驚いただろう。それは私が少なくともそれより三年前に書物に書いた事柄を似たような表現で正確に伝えた報告であるからだ。

たとえば『宇宙船の内部』（『宇宙からの訪問者』第二部）の中で私は次のように述べている（邦訳版一四一頁）。

「宇宙空間の視界が完全に暗黒なのに驚いたのである。しかも船体の周囲いっぱいに発生している現象（複数）があった。まるで無数のホタルがあらゆる場所をあらゆる方向に飛びまわっているように見えるのだ。しかもこれは多彩な色光を放っていて、宇宙の花火大会ともいうべきすさまじい美観を呈している」

更に次のようにも記している（邦訳版一四二頁）。

「外で発生していることをすべて見ようとして眼を緊張させたとき、宇宙とその活動に私は仰天した。例のホタル現象以外に、燦然と輝く無数の巨大な光体が空間を通過するのが見えるのだ。私にわかった限りではこの光体群は燃えているのではなく、ただ光っているだけである」

これと同じ発見が一九六〇年一月に科学者連によって次のように発表された。

「大気圏外は多彩な色光に輝く、まばゆいばかりの光景で、暗黒の空間ではないと、モスクワのラジオ科学解説者は報告し、更にこれはソビエトのスプートニク（訳注＝初期の人工衛星）によってわかったことであると言って、次のようにつけ加えている。

「それはきわめて輝かしくて虹のような色を帯びているが、これは惑星間のガスが多彩な光を放って輝くからである。一方、数十億の星々がそのあいだに輝き、ほとんど固形に見える赤味がかった黄金色またはまばゆい白色の形を形成している」

科学者団のその後の報告で次の発表がなされた。

「宇宙空間は以前に考えられたような何もない真空なのではなくて、実際には無数の微粒子が充満しており、すべてが絶えず活動状態にあって、それ自体が不気味な蛍光を放っているのである」

『宇宙船の内部』の中で私は地球の周囲に形成されつつある巨大な放射能帯についても語った。それがもたらす危険性は同書にくわしく述べてある（邦訳版一五四頁）。

それから三年後の一九五八年八月に我々は次の記事を新聞で読んだ。

「エクスプローラー四号は宇宙の遠い彼方にある激烈な放射能帯について全く驚くべき発見を知らせてきたと、プロジェクトの一係官が今日語った。アイオワ州立大学の物理学助教授ジョージ・ルードウィッヒは、エクスプローラー四号から送られた初期のデータが、その放射能帯が致命的であることを示していると語った。千九百キロメートル以上のところではその放射能の強さが驚くべきものになっているとルードウィッヒは言っている」

ここでも我々は私が先に伝えた知識の正当な証拠を見い出す。というのは数年後にそれは科学上の報告によって立証されたからだ。もちろん私はその放射能帯を『ヴァンアレン帯』とは呼ばなかった。名称のもとになったその紳士にまだ会ったこともない。

地軸の傾斜も過去にあった

『宇宙からの訪問者』の中で私は（別な惑星から来る）宇宙船は磁気によって推進されると報告した。科学者のなかにはこれまで実験室で磁気推進を証明した人もあるが、反対派は円盤が（比較的に言って）電磁気のような簡単なもので推進され得ることを依然として認めようとはしなかった。

一九五九年十一月に国際電話電信公社が行った声明によると、同社の科学者団が太陽放射線のエネルギーから高圧電気を生じさせる装置を開発したという。公社の話では、この装置は宇宙船の推進パワーを供給できるほどの超高電圧を出すことができるというのだ。

高名な物理学者Y・C・リー博士は、それより三カ月前に、電気的な推進によって地球人は〝時速四百八十万キロメートルに達する〟速度で宇宙を進行することができるだろうと発表した。

『宇宙からの訪問者』の二七六頁（邦訳版）に、地球の自転軸の傾きに関する記事があり、そのなかでこの地球がすでに緩慢な、ほとんど感知できないほどの傾きを始めていると異星人は述べている。

これについて異星人たちの語るところによると、この傾きはあらゆる惑星の発達において一定の間隔をおいて発生する周期の一部分だということである。

一九六〇年二月に科学者連は南極でシダのような植物や種子、花粉、繊維、森林の跡、さらに石炭の層（これは植物の化石化したもの）などの証拠を発見したと報告した。

アメリカの地衣類学者ジョージ・ラノ博士は、この発見は南極が現在よりも太古に太陽の熱をよけいに受けていたことを示すものであると言った。

ニュージーランドのルーシー・クラムウェル博士は、この発見は現在の南米のような大森林がかつて南極にも密生していたことを意味すると語っている。この証拠に基づいて科学者たちは地球の自転軸にかつてある変化が生じたことがあると信じているのである。

私の体験記類はある方面で反撃をこうむったけれども、一方、私にできるときはいつでも私は科学者を援助してきた。その返礼として多数の科学者はまじめな科学の学究にふさわしい紳士的な上品な態度で私を助けてくれている。

最近の新発見は私のこれまでの体験を完全に立証はしていないが、結局は同じ意味において、やはり新しい知識にたいしては人間の心を開放的に保つことが賢明であることを根本的に立証しているのである。

●第8章 デマとデマ流し屋

毎年のように私を非難して流されるひどいデマのために迷っている人たちから私は多くの手紙を受け取っている。こんなデマがどうして流されるのかはわからない。そのなかには私の体験を大衆に信じさせないようにしようとしてわざと作りあげられたウソも少しあるし、またそのようなウソを作り出したり流したりする人たちの精神状態を疑わさせるほどのバカバカしいデマもある。私の体験の真実性を認めようとしない人々ですら、こうしたデマのいくつかを信じようとしないのだ。

一九五八年十二月に、ミズーリ州カンザス市の近くで一人の異星人が私を汽車からつれ出して円盤へ乗り込ませてくれてから、私たちはアイオワ州ダヴンポートへ飛んで行き、そこで日が暮れてから着陸した。ところが国内でも有名なあるUFO雑誌が私の話はでっちあげだと非難して、これが真相だといわぬばかりの歪められたでたらめな記事を発表し始めたのである。いうまでもなく、この自称暴露記事の大部分は徹底的なでっちあげであった。

その雑誌に調査報告を送った人は、自分自身がコンタクティー（異星人に会った人）であると称している男だった。彼は催眠状態で宇宙人と交信したと言っていた。彼の話を聞いた人々は彼が偽物のバッジをつけて官憲を装っていたと言っているが、これこそ不法行為というべきである。

あるとき彼は数人の新聞記者を含む一団の人々をある場所に集めて、そこへ円盤が着陸することになっていると言った。最後まで彼は円盤の乗員とテレパシーで交信中だと言い続けたが、結局出現しなかったので、集まった人々から物笑いの的となり、他のグループやコンタクトマンまでも疑われるような結果を招いたのである。

私に関して右の男のでたらめな記事を載せたその雑誌が、その男のでっちあげの記録に気づかなかったのはしごく当然である。（その雑誌を出していた）UFO研究グループの長が、気づかないうちに載せられたごまかしの記事にやっと気づいてからも、事情を訂正しようという努力を払わなかったという事実が残っている。

（訳注＝アメリカのUFO研究団体の機関誌は今も独断と偏見に満ちたものが多い。同国内のUFO商業誌に至ってはでたらめもいいところである）

彼は過去においても同様なことを一貫してやってきた。彼はこれまでに私の体験について尋ねてきたことはただの一度もない。それどころか彼はいかがわしい情報にはなんでも飛びついて、確証もしないでそれを載せていた。

ワシントン市に本部を持つこの有名な自称UFO研究家は、彼の二番目の著書の中で、「アダムスキーはパロマー山天文台に通ずる道路沿いに飲食店を経営している」と述べていた。そして私が「その飲食店の屋根の上に」望遠鏡を備えつけているとも書いて、こんな店を経営することは私の科学的な関心にとって有害であるようなことをほのめかしている。

ワシントン市にいる共通の一友人がこの男に向かって、私を一度訪問するかまたは少なくとも三セントの郵便切手を使って、書物を出す前に真相をただしたらどうかと忠告したのだが、そんな手間をかけるほどのことはないとその男が思ったのは明らかである。

パロマーガーデンズ喫茶店の名声

パロマーガーデンズ喫茶店は多数の有名な訪問者のために役立ってきた。これがただの〝ハンバーガースタンド〟ならば、世界中からやって来た訪問者たちがそこの名簿に署名などはしなかったであろう。多くの客はこの店が友人たちから（ぜひ立ち寄れと）熱心にすすめられた場所であり、パロマー登山の名所の一つなのだと所有者のアリス・K・ウェルズ夫人に語っている。

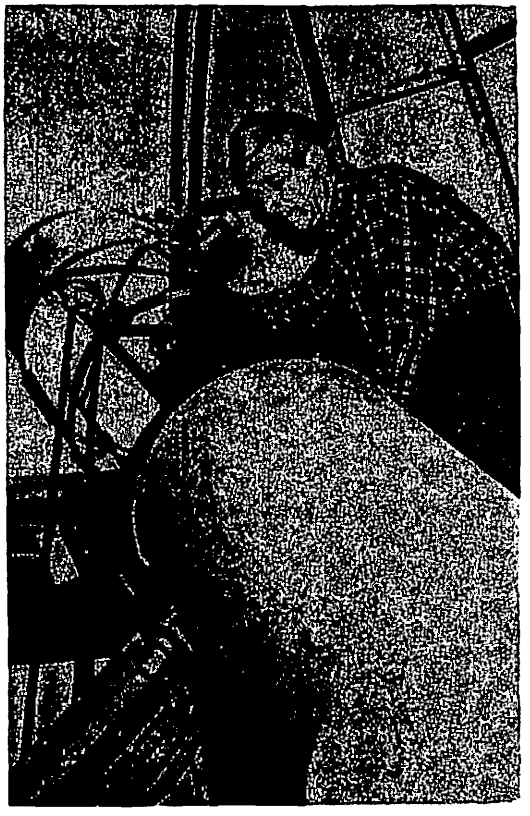
（訳注＝パロマーガーデンズ喫茶店はアダムスキーの弟子であったウェルズ夫人がアダムスキー一族の生活を維持するために経営したもので、アダムスキーはこの事業に全く関係はない。彼は金銭問題にタッチすることを嫌い、ふだんでも現金を持とうとしなかったという。

パロマーガーデンズ喫茶店は、山頂のパロマー天文台を見学に行く人のための休憩所として設けられたもので、これは天文台の職員でアダムスキーの親友であったジョンソン博士の提案にもとづいて建てられた。現在、喫茶店の建物はないが敷地跡はコンクリートで固めてあり、その奥にアダムスキーが自ら建てた木造の物置小屋が残っていて、これらは土地の現所有者によって永久に保存されることになっている。いまこの台地は車で旅をする人のためのキャンプグラウンドとして使用されている）

私はこれまでに事業をやったことはないし、パロマーガーデンズ喫茶店で使用人として雇われたこともない。妻と私はその地所で暮らしていて、そこに二台の望遠鏡を据えつけていた。一台は十五インチ反射望遠鏡で、近くの開墾地に設備され、小さなドーム型天文台の中に収納されていた。もう一つは六インチ反射望遠鏡で、これは携帯用であって、自動車で運ぶことができた。この六インチ望遠鏡が私のこれまでの書物中に載せられた円盤写真類の撮影に使用された機械である。この二台の望遠鏡は私の所用物であって、パロマー天文台とは全然関係ない。私はパロマー天文台の数人の科学者と親しいけれども、そこの職員として雇われたことはないし、また職員だと称したことも全然なかった。

この天文台には案内役がいなかったので、多くの人々はその機能について喫茶店で質問したものだった。

（訳注＝訳者はパロマー天文台を五度見学したが、現在もここにはガイドがい



●十五インチ反射望遠鏡とアダムスキー（一九五四年頃）

ないので、見学者は資料を入手して予備知識を得なければならない）

私も喫茶店のダイニングルームで客と一緒に天文学やその他の話題についてよく話し合ったりした。宇宙船（UFO）が着陸したときには私は多くの質問に答えたり、軍の酒保などで無料の講演を行ったりする立場にあった。

ある新聞などはその価値を下げるような調子で〝ハンバーグステーキの行商人〟という言葉を用いて、私が〝空飛ぶ円盤楽隊車の上で踊っていた〟くだらぬ人物だという意味のことを書いていた。私に関するこのような記事の内容がたとえ真実であったとしても（訳注＝もちろん真実ではない）それは私に不名誉を与えるものではない。なぜならアメリカは役に立つ名もなき人々に頼っているからである。

パロマーガーデンズ喫茶店は〝ハンバーガースタンド〟どころではなかった。それは『ホリデイ』誌に二度も紹介記事が載せられたからである。（訳注＝ホリデイ誌はアメリカ一流の旅の専門誌）

多くのデマが流れたけれど……

私に対抗して流されてきたデマについてもう少し述べることにしよう。一体に知性ある人々にそんなバカらしいデマを作り出したりすることができるものではないし、ましてそれを人々に信じさせたりするわけがない。多くの人々はいつもそんなバカらしいデマを探し求めているようであり、そのデマを絶対に真実のこととして他人が信ずるだろうと思いながら、それをまき散らすのである。世論において私に少しでも有利になるような事情を聞いても、それを無視するかまたは自分たちの目的にかなうように歪めてしまうのである。

あるアメリカの円盤研究誌の編者が数カ月前に、私が一九四四年に彼に原稿を提供したと言いだした。その原稿の中でイエス・キリストが宇宙船に乗って地球へやって来ると私が書いたというのである。そして私が一九五二年にその記事を書き直してイエスの名をオーソンに取り換えたと彼はほのめかした。

これは大ウソである。一九四四年に私は宇宙船や異星人のことなどを知ってはいなかった。その頃私はパロマー山腹の斜面の開墾を手伝うのに忙しくて、原稿書きなどは全然やれなかったのだ。私はイエス・キリストの御名をあまりに高く評価しているので、そんなふうにその名を利用することはできないのである。そんな調子でキリストの名を利用する者は冒瀆者であり、ほとんどイエスの名を尊敬していないのだ。金集めのためにその御名をかたる多くの人をこそ私は全然尊敬していない。

あるとき、私が死んだので私の娘が跡を継いでやっているという情報が流されたことがあった。ところが私と妻は三十七年間の結婚生活で子供をもうけたことはなかったのである。

一九五九年八月八日の朝十二時十五分にあるラジオの徹夜番組のなかで、一出演者によって次のような放送が行われた。つまり私は若い頃には心霊実験家で、金星人の霊魂を可視的に出現せしめてそれに患者の盲腸炎の切開手術をさせたというのである。私の協力者の一人がその番組の司会者に手紙を出して、そのひどいウソを訂正するようにと抗議したが、返事さえも来なかったという。

過去七年間に、あるグループ（複数）が私のUFO写真を信ずるに足らぬものにしようとしてきた。と同時に彼らは自分たちの心霊雑誌類にその写真を載せたし、科学研究所などは円盤を建造するためのガイドとしてその写真を利用してきた。いずれにせよ私という人間が存在することを認めてくれたことにたいして少なくとも私は彼らすべてに感謝してよいだろう。

また多くの人は（UFO問題の）著作によってかなりの生活をしている。私が自分の体験を伝えなかったら、彼らは一体何を書くつもりだったろうか。

パンフレットにせよ大判の雑誌にせよ、私が大衆の前で説明している事柄をそれらが書きとどめてくれたことにたいしても私は感謝している。宇宙の様子を知りたいという好奇心をそれらの刊行物が人々の心に起こさせたからである。

私にたいする反対派の人々は多くの逆宣伝をやってきたが、しかしその反対派の気づいていない援助がなかったならば、今日世界中に知識の番組は放送されなかったであろう。

（第8章終り。以下次号）

◆東京月例会体験講話◆

私についてきた二人の宇宙人（ブラザーズ）

●宇宙の意識と人間

松本隆司

宇宙人に会いたい！

私がアダムスキー氏の『空飛ぶ円盤同乗記』を初めて読んだのは、高校二年の三学期という大学入試の準備のため忙しい時でした。私は正直な話、この本を読むまではアダムスキー氏はウソつきだと思っていました。というのは、中学生のころ私は『中学生時代』または『中学生コース』とかいう名前だったと思いますが、中学生のための月刊誌の中にアダムスキー氏のことが書かれていたことを覚えていたからです。その本には、アダムスキー氏は太陽系内の偉大な進歩をとげた人類とコンタクトした人であるといった意味のことが書かれてありました。そして『宇宙哲学』、『生命の科学』、『テレパシー』の3冊の本を抽選で送ります、と書かれていました。しかし、その当時、私は大宇宙には科学的、精神的に偉大な進歩をとげた生命体がいることは確かだと思っていましたが、まさかそれが太陽系の惑星にいるとは思っていなかったからです。したがって私はアダムスキーの『空飛ぶ円盤同乗記』を買うのにためらいながら、当時のお金で五百円という大金を払ったのです。ところが、この本を読んでいくうちに、その素晴らしさに圧倒されました。私はこれまで、これ程感動したことはありませんでした。そこには真実だけがありました。

それからというもの私は宇宙人と会うことばかり夢みていました。そして高校の友達にも話したのですが信じてもらえませんでした。私は大学入試の準備などそっちのけで、この本を読んでいました。その結果は入試失敗という悲惨な結果となって現れたのです。

しかし私は入試失敗にもめげず、これらの本を読み続け、そしてやはり宇宙人に会うことばかり想像していました。そうしているうちに私もだんだん熱がさめてきました。

そうした夏のある日、私は念願かなって宇宙人に会うことができました。もちろん、その人達は、自分達は宇宙人であるなどということは一言も言いませんでした。しかし私はこの人達が間違いなくブラザーズであったと信じています。

高校3年を卒業して、私はこの時高校四年生になっていました。というのは私が通っていた高校は大学入試に失敗する人が多いので高校の中に大学入試のための予備校を持っていて、大学入試に失敗した者の多くは、その予備校へ行きましたので、なんだか高校四年という感じだったのです。私の友達の多くも〝類は類を呼ぶ〟という法則に従い、この高校に附属している予備校に入ったのです。したがって私はアダムスキー氏の体験や宇宙哲学について話す相手には不自由しなかったのです。きっと私の友達は、この話に戸惑い迷惑していたことでしょうが——。

ついてきた不思議な二人の外人

この日は夏にしては涼しい日でした。そして、この日は予備校の先生が休みましたので最後の授業はなくなり、いつもより早く帰ることができました。予備校から自宅まで一時間ほどかかりますが、自宅の近くの私鉄の駅に着こうとした時です。私は後から、誰かに見られているといった感じを受けました。おやっと思って私が後を見ますと外人が二人座ってこちらを見ていました。私はその時ふと、「ああブラザーズかな」と思いましたが、福岡市の外れで外人を二人も見るということは、ほとんどないことなのです。

電車が駅に着きましたので私は降りましたが、二人の外人も続いて降りてくるではありませんか。私はあわてました。というのは、二人の外人が私に話しかけてくるような感じがしたからです。そうなると私が英会話はまるでダメであることがばれてしまいます。私のエゴの心はあわてました。そして私を急いで二人の外人から離そうとしたのです。ところが二人の外人は私を追っかけてくるではありませんか。ここで日本人の体型の問題がクローズアップされてくるのです。コンパスの長さの相違がもたらした結果として二人の外人に追いつかれてしまいました。そして二人の外人は私を間にはさむような位置に来ましたので、つまり私の両脇に来て三人並んで歩くようなかっこうになったのですが、私は急にスピードを落としましたので当然のことながら私は二人の外人の後を歩くことになったのです。十メートルぐらいの間隔を保って私達三人は十分ぐらい歩きました。その間私は後から二人の外人を観察してみました。

まずクツは黒い革グツでしたが、なぜか土がついていました。そしてかなりすり減っていました。二人とも白い半袖のワイシャツにグレー系の色のズボンを身につけていました。そして肩にはJALと書かれた旅行用のカバンをさげていました。一人は身長が百七十センチを少し越えたぐらいで、もう一人は百八十センチを少し越えたぐらいでした。それから二人の外人は途中一度顔を見合わせて少し話したように見えましたが、声は聞こえませんでした。したがって私は彼らの声を一度も聞きませんでした。

彼らはブラザーズだった！

ところで、当時私が住んでいた自宅は、いわゆる郊外にある分譲住宅でありまして、同じ型の家が建ち並び最初のうちは、

そこに住んでいる私でさえ自分の家がわからなくなるといったほど、よく似た家が建ち並んでいました。

しかし二人の外人は私が自宅に帰る道順を間違わずに歩いて行きますので、私は必然的にその後をついて行くということになりました。そして二人の外人は階段を登り見えなくなりました。というのは階段の下からは私の家は死角になり見えないからです。二人の外人はきっと行ってしまったのだろうと思い、私も後から階段を登ったのです。そうして、ふと見ると、二人の外人は私の家の前に止めてあった自動車にもたれながら、こちらを見ているではありませんか。

彼らは私と私の家とを知っていたのです。そして私が帰る時刻も知っていたのです。ただし、この日はいつもと帰る時刻が違うのですが。そして、いつもと違っていたのは、私の家には誰もいなかったということです。家族の者はその日に限ってどこかへ出かけていたのです。夏休みでしたので母か弟か、どちらかがいたとしてもおかしくなかったのです。二人の外人と話すには非常に良い条件がそろっていました。

彼らは私を見て微笑んでいました。私はその時、強烈なイメージまたは印象を受けました。『彼らはブラザーズである！』と。

しかし、この時、私のエゴの心は大混乱をきたしてしまいました。私は急に今の自分が恥ずかしいと思ってしまいました。そして私は、うつむいて自分の家に入ろうとしました。そうしたら二人の外人もあきらめたらしく、そのまま去ってしまいました。私はすぐ後から追いかけたのですが見つかりませんでした。非常に残念なことをしました。

このことは、エゴの心の弱さを示しています。心の準備ができていなかったのです。

しかし、今度会う時までには十分に準備を整えておくつもりです。そして大宇宙を自分の目で見たいと思っています。

皆さんもブラザーズに会った経験をおもちであると思います。ブラザーズは、どこにでもいます。そして私たちを見守っていてくれます。私たちはそれに答えなくてはなりません。より良き世界を築くために。

＊　＊　＊　＊

フィーリングに基づく実践が重要

人間は、その理解力に応じて現象のいろいろな面を見ます。そしてわずかな理解力の差のため意見が異なります。しかし、すべてを理解した人にとっては異なる意見というものは問題ではありません。無限の宇宙と比べれば、そのようなものはほとんど無視できるほどささいなことです。

太陽の光もいろいろな振動数を持った波動が調和したものです。人間という波動も、いろいろな振動数と帯域を持っており、それらが調和して生きて行きます。

すべての現象には多面性があります。たとえば光は波動であり、また粒子でもあります。人間の基本的な概念、つまり時間、空間、温度とかいったものは結局、人間が創り出したものです。したがって現象に多面性があるのではなく、人間の基本的な概念に多面性があるとは言えないでしょうか。結局、自然がすべてを決定するのであって、人間ではありません。従って人間は言葉や文字ではなく、フィーリングと行為によってこそ多くを学びとることができます。それは自然に基づいているからです。

新しい知識を求めるあまり実践を忘れば何も得られません。知識と理解とは異なるのです。

ブラザーズとて人間であり彼らも学びつつあるという点では我々と変わりません。先に行っていようが後からついて行こうが問題ではありません。永遠の中にあっては。そして前進しようというフィーリングが重要であり、今、現在の自分というものを直視し分析することが必要です。そうすれば、これからどうすればよいか自然にわかってくるでしょう。

人間とは何か

さて私は、ときどき次のようなことを考えることがあります。人間とは何かと。人間とは何でしょう。

『テレパシー』の冒頭には、〝人間とは活動している想念である〟と書いてあります。それでは想念とは何でしょうか。『テレパシー』には想念とは化学作用によって生み出されるエネルギーの放射線であり、空間に記録される一定の振動率をもっていると書かれています。そうすると人間とは、エネルギーを持った放射線の発生器であり、受信器であるということになります。とは言っても何のことやらさっぱりわかりません。物質とは荷電粒子に囲まれた空間です。そうすると物質でできている人間も荷電粒子によって囲まれた空間です。

ここで原子を地球くらいの大きさのものと考えると、原子核は半径六十メートルぐらいの球と考えられます。そして、そのまわりを半径六十センチメートルぐらいの大きさの電子が地球の大きさぐらいの軌道をえがいてまわっているということになります。

そうすると、人間はほとんど「空」であるということができます。そうすると人間とはほとんど空間でできており、その中に荷電粒子が振動しながら存在しているということになります。

宇宙空間に静止しているものはありません。地球やその他の天体も振動していますし、絶対零度の物質でさえ零点運動という振動を行っています。すると人間とは一定の振動率をもって振動しているということになります。

こうしてみると、ミクロな細胞、分子、原子、それより小さな世界も、マクロな人間、天体、太陽系、銀河系、大宇宙に至るまで、一つの振動という法則に従っていることがわかります。すると人間と他のものは本質的に同じであるということがわかります。人間のエゴの心は、人間と他の物とは何か違うのだ、人間の方が他の物よりエライのだと思うかもしれませんが、素粒子の世界まで行くと何の

違いもないのです。

それでは、人間と他の物と違う点はいったい何でしょうか。たとえばコンピューターと人間との違いとは何でしょうか。

コンピューターは十年後には視覚、聴覚、味覚を持たせることができ、さらに推理力すらもつことができると言われています。そうなるともはや、コンピューターは人間とかわらなくなってしまいます。『2001年宇宙の旅』に出て来たコンピューター〝HAL‖9000〟のようにです。

しかし人間とコンピューターとは大きな違いをもっています。それは意識です。

すべての生物、無生物は一体となって通信し合い影響をおよぼし合っています。したがって全宇宙が一つの生命体なのです。人間はこの中で最も素晴らしい無機物と有機物とが結合した一つのフォームです。したがって、テレパシーまたはフィーリングというものは、人間が最も感度のよい受信器であり、発生器なのです。これに対してコンピューターは、いかにそのメモリを増し、プログラムが複雑になり、そして色々なセンサーをもとうが、この最も大切な生命力という点で、人間とは異なるのです。これは、コンピューターを構成している部品が人間を構成している部品とは、そのフォームにおいて大きく異なるからです。したがって私達は、このフィーリング又は感じを大切にし、これを発展させるようにしなければなりません。というのは、これをやらないかぎり、〝HAL‖9000〟と同じことになってしまうからです。

目で見る世界が絶対ではない

それでは、人間の感覚器官の一つである目について述べてみましょう。ライフ・人間と科学シリーズの『細胞と生物』という本におもしろい記事がありましたので、これを引用してみましょう。

「神経細胞のはたらきに関する原理についての研究によって、わたしたちはいっそう広範な暗示を得ることができる。あらゆる視覚系をつうじて重要な特徴は、それには限界があるということである。たとえばカエルの目では、水色がかった青色をのぞくすべての色、自分の周囲にある多くのものの形、昆虫の翅やそのほかの特徴などを識別することはできない。カエルの目のなかに組み立てられたこのような識別力は、カエルが現実の世界にあるすべてのものを見る能力がないということを示している。真実の姿は、視覚信号がカエルの脳に到着する以前にすでに曲げられている。カエルと同じように、ヒトもまた生まれつき見えるものしか見ることができない。もちろんヒトの場合には、カエルほど限定されてはおらず、その目にうつる真実の姿はカエルの何倍も豊富だとはいえるが、それにしても、ヒトの目で見る世界が唯一絶対のものとはいえない。この世界には生物種の数だけ真実があるはずである。

あるいはまた真実というものは、個人個人の感覚器官の相違によって微妙に異なるものかもしれない。すべての人間は、個人的な印象を寄せ集めたなかにすんでいる」

ここで、ついでですからカエルを使った有名な実験について触れておきましょう。

カエルは殺したての昆虫をいっぱい入れたかごの中で餓死するのです。カエルの食べるべきものは目の前にあり、食べようと思えばすぐにでも食べられるはずです。しかしカエルの目は動かない物は昆虫とみなさないのです。このことはカエルは目というセンスマインドの奴隷であると言えます。このことは当然、人間にもあてはまります。人間の目がとらえているものが真実であるという保証はまったくないのです。私たち人間も、このカエルと異なるところはありません。意識の海の中にいながら、このことに気づかないからです。

しかし、今私達は宇宙哲学により、このことを知りました。あとは実行するだけです。フィーリングと実行によってのみ真実をつかむことができるのです。

●日本GAP支部報紹介（各発行人へ直接ご注文下さい）

	判型その他	編集発行人	頒価	最近号	バックナンバー	年間発行
旭川支部報 スペース・プロムナード	B5判 手書きコピー 40頁前後	日本GAP旭川支部 〒071-13 旭川市末広6条4-1158-6、 石川公一	¥200 〒200 (切手可)	No.6	各号若干あり	年4回 季刊誌 (臨時に詩・随筆の特集)
松山支部報	B5判 手書きコピー 平均12頁	日本GAP松山支部 〒794 愛媛県今治市貴金町1-4-4、 伊藤達夫	無料 〒170	No.20	なし	年11回 発行 (支部大会の月は中止)
静岡支部報	B5判 手書きコピー 10頁以上	日本GAP静岡支部 〒422 静岡市西島304-9、 野口敏治	現在無料	No.39	極少あり	年間12回発行
山形支部報 ユニバーサル・メッセージ	B5判 手書きオフセット 11頁	日本GAP山形支部 〒992 山形県米沢市松が崎2-4-31、 清水　正	¥100 〒130	No.13	8～12号あり	不定期刊なるも年4回の予定
名古屋支部報	B5判 手書きオフセット 10頁以上	日本GAP名古屋支部 〒458 名古屋市緑区鳴海町漆山79-3、 武田充弘	¥150 〒170	No.4	なし	年間1～2回
熊本支部報	B5判 手書きオフセット 約10頁	日本GAP熊本支部 〒860 熊本市黒髪2-295、宮崎アパート 首藤秀利	¥100 〒60	No.5を製作中	なし	年間4回

●日本GAP沖縄支部、琉球新報で紹介！

本年１月24日付沖縄最有力紙「琉球新報」に沖縄支部の紹介記事が大きく掲載されて話題となった。記事内容はきわめてまじめなもので、日本ＧＡＰの活動方針と主義をよく理解した友好的な報道である。沖縄支部の真剣な態度とアダムスキー問題の重要性が報道機関に認識された例証であろう。(写真はカラー)

★沖縄支部大会

５月３日（祭日）、沖縄市の「沖縄社会福祉センター」で、午前10時より午後5時まで支部大会を開催。会員多数の参加が望まれる。会費¥2,000。終了後、７時より市内の「平安閣」で歓迎夕食会を開催。会費¥5,000。大会プログラムは本誌前号39頁に掲載。本土より20名の会員が参加（２日より４日間滞在、各地を見学の予定）。注意＝大会会場と夕食会場は前号予告の中頭教育会館とヒルトンホテルから上記の２場所に変更されました。詳細は宮城裕氏宛ご照会下さい。　電話09893－2－1568

(11)　1版　1982年(昭和57年)　1月24日　日曜日　琉　球　新　報

ミュージック新世代 ◇17◇ こびを拒否する黒人

リック・ジェームス

ヤングやんぐYOUNG

UFOは人類への警

日本GAP沖縄支部

宇宙人と接触せよ

想念の観察訓練で可能

１９８１年の大みそか、那覇市内の某ホテルの15階で日本ＧＡＰ沖縄支部のメンバー４人と会見した。地上は年の瀬のあわただしさに満ちていた。雲が低くたれこめ、時折雨がぱらついた。「円盤が出そうな雰囲気ですね」「今日は出ませんよ」。男はニヤリとして言った。しばらく沈黙ののち、ふと窓辺を見ると一個の円盤が飛来した。よく見るとそれは窓ガラスについたシミだった。ハレー彗星の76年ぶりの地球出現まで、あと４年。宇宙への関心は高まるばかりだ。今回はテレパシーや超能力開発訓練、ＵＦＯ目撃など宇宙人とのコンタクトに積極的な沖縄のグループを紹介しよう。

スペースブラザーズとの交流を夢みる日本ＧＡＰ沖縄支部会員＝中頭教育会館

目的は理想社会の創造

ヤングBOX

目撃ルポ

UFO CONTACT

白銀色の円盤が出現

静岡県　岩崎敏夫

円盤が我が家の裏の西北上空に現れ、十二秒間横に静かに真南上空に移動し、東海道線の架線の上空で上昇して雲の中に消えました。最初発見の時は信じられず、目の錯覚かなと思い、思わず左人差指をつねって痛さを確認し、ああこれは本当なんだなと思いました。

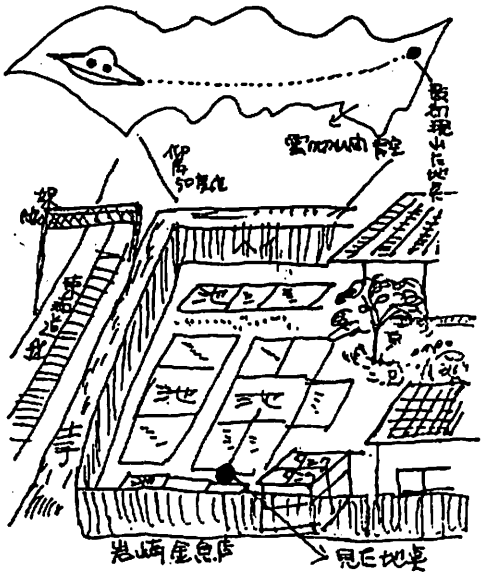
時は一九七〇年八月十六日頃の夕方で、あたりは夕焼けで輝いて雲を赤く染め、円盤は白銀色にキラキラと輝いてとても美しい光景でした。今でも目の中に焼きついているほど素晴らしい感動でした。

茫然と眺めていたので家の人に知らせるのも忘れていました。また知らせる余裕もありませんでした。

円盤には丸い窓が二つあり、まばゆいほど反射して、すべるように動いていました。速度はかなり減速していたようです。大きさは蛍光灯の蛍光管の太さで、長さは十センチメートルぐらいに見えました。

雲は巻層雲で、最初は雲の切れ間が少なかったのですが、一～二秒でぐっと青空が大きくのぞき、はっきりと見ることができました。

●岩崎家の上空に現れた円盤



半年ぐらいはだれにも話さず黙っていました。その後、『空飛ぶ円盤実見記』『空飛ぶ円盤とアダムスキー』など沢山の本を買いました。円盤を見たおかげでどれもすなおに信じられました。円盤を見る一カ月ぐらい前から、この宇宙には素晴らしい星があって、素晴らしい文明をもった人達がいるだろうと、裏の池から夜空の星もよく眺めていました。結局これもミラクルワードを唱えていたようなものではないかと支部報をみて思った次第です。（静岡支部報第39号より）

想念で円盤を呼び出す

愛媛県　中川敏恵

私が高校生の時はいわゆるUFOブームで、一度でいいから自分もUFOを見たいといつも思っていました。でもUFOを見る人は特別な人なんだという固定的観念を持っていた頃でもあって、私のような普通の人々の部類に入る人間には到底無理なことだと思っていました。

ところがある日、テレビの特集番組でテレパシーによるUFO呼び出し実験をやっているのを見て、急に自分でもできそうな気がしてきたのです。今思えばすごく大たんな思いつきですが――。

それから私は何かに憑かれたように日夜（想念で）送信し続けました。一週間しても現れなかったのですが、途中でやめようとは思いませんでした。

そしてさらに数日が過ぎたある日の夜、目を閉じて送信していると急に胸さわぎがしてきて、目をあけると、北方の空に三等星ぐらいの輝きを持つオレンジ色の光体がゆっくりと下降していました。

「やった！　ついに現れたんだ！」

と思うと同時にそれは北極星付近で停止し、マイナス三等星ほどの輝きにピッカリと変光し、そのままU字型を描きながら東方へと去って行きました。今でもあの時の感激は忘れません。努力すればUFOは見られるという証明にもなったと思っています。

あの頃よく自分でつけていた『宇宙日誌』というのがあったのですが、今読み返してみると新たな感動が沸き起こります。UFO目撃録や、知り始めたばかりのアダムスキー哲学など、なんと純粋で意欲的だったことでしょう。まだ学生で、社会的プレッシャーの少ない世間知らずだったと言えばそれまでですが――。

最近はUFOに関しても宇宙哲学に関しても内部のボルテージが下がり気味なので、何とかして宇宙的想念を保とうと頑張っています。今までは何となくそう思っているだけでしたが、やっぱり身体でもって宇宙的フィーリングを起こす方が良いですね。最近はそのせいか身体の調子がとても良くなりました。

これからはUFOに、哲学に、頑張ってゆきたいと思っています。

気分が落ち込むたびに円盤が激励する

旭川市　川上三秀

私は仕事の関係で釧路に出向していましたが、その折（一九八一年八月二日、午後十一時五十分）、イメージを描き、

テレパシーを送りましたところ、カシオペア座にUFOが現れ、光で合図を送ってくれ、すごく感激しました。

また、職場での対人関係で落ち込んでいましたところ（一九八一年十月六日、午後七時二十二分）、帰宅途中に銀白色の尾を引いたUFOを目撃し、その翌日も同じ時間に、何かに見られているようなフィーリングが起き、自宅近くの頭上で発光現象が起こりました。

圧倒的な目撃は昭和二十八年十月に起き、今までに六回目撃しており、それは必ず何か精神的に落ち込んでいる時のように思います。そのうちにぜひコンタクトを実現したいものと思っております。そのためにお互いに頑張りましょう。

白い尾を引いたUFO

広島県　三浦公子

私が今までに見たUFOで印象に残っているのは、白い尾を引いたもので、ノートを見ますと昭和五十五年四月二日となっています。

当日の午前中だったと思います。GAPニューズレター（本誌）で岩手県の熊谷友子さんが黄金の尾を引いたUFOを目撃されたという記事を読んで「UFOでも尾を引くものがあるのだな」と思ったのを覚えています。

当時私は広島市の沖にある島に住んでいまして、畑仕事が好きなので、十分あまりかかる山畑に行っていました。当日午後二時頃家を出て坂道を十分ぐらい歩き、畑までもう少しのところで（その時顔を上げて歩いていました）北西の方から南東に向かって白い尾を引いた物体が飛んでいるのを見つけました。その物体は無音でしたので、飛行機ではなくてUFOだなと思いました。

二回目は同じ日の午後六時すぎです。四月の午後六時頃はまだ明るく、畑仕事から帰ってひと休みし、六時少し前に家を出て、スーパーで買い物をすませ、当時子供たちは剣道を習っていましたので途中十分ぐらいけいこを見に寄った後、自転車で二分ぐらい行ったところで、ふと空を見上げると、昼間見たのと同じ白い尾を引いたUFOらしき物体が今度は北の方から南に向かっていて、一瞬キラッと銀色に光るのが見え、自転車をおりて目で追っていたら急に白い尾がなくなったので、上ばかり見ながら四メートル幅の道路をあちこち（そばに電柱があり、電線が何本か張り出していたので見えにくく、UFOも小さかったので）目をこらして見ますとジグザグに動いており、急いで「GAPをおまもり下さい」と二度口の中でブツブツ言った時、そのUFOが約十倍ぐらいのオレンジ色の光の玉のようになって輝きました。それを見て恐怖心からでなくウワーッという気持になり、髪の毛が逆立ったような感じになったのを覚えています。

光った後、また白い雲のような尾を引いて南の方へ向かい、山にかくれて見えなくなりました。一分ぐらいの短い時間でした。まわりに多くの家があったのですが、他にはだれも見ていませんでした。

（以上、松山支部報第19号より）

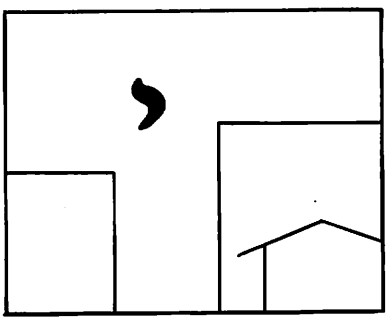
東京上空のUFO

千葉県　遠藤昭則

五～六年前だったと思いますが、東京月例会のあった日で、会場（東京文化会館）に向かうために総武線に乗って外を見ていました。

すると亀戸駅の近くだと思いますが、真っ黒な図1のようなものが家と家の間の遠くの北方の空に見られました。そしてこの日はテレパシー練習の成績が良かったことを覚えています。ただしほんの一瞬間の出来事だったので、何かの見間違いかもしれません。

図1



それから三年前の総会の次の日のことですが、私の勤めている学校で、午後四時頃、学年の先生方の会議が理科室で行われていました。

そのとき私がふと南の空を見ますと、青い空に浮かんだ雲の中を、図2のような白い丸い雲みたいなものが動いて行きました。たぶんUFOのフォースフィールドだと思います。

今年の一月の東京月例会の時のことです。四時三十分頃にちょっと用事があって上野から秋葉原へと山手線で向かっていました。そしてもうすぐ秋葉原に到着するというときに、進行方向に向かって左側の空を見たら図3のようなものが遠くに浮かんでいました。色は黒かったと思います。

図2

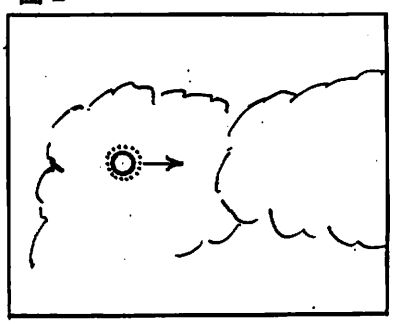
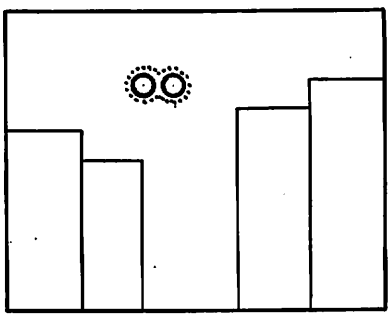


図3



私の宇宙的体験

北九州市　田中寛子

久保田先生、お元気でいらっしゃいますか。霜月の熊本支部大会では初めて先生とお会いすることができ、また夕食会におきましても楽しいひとときをご一緒でき、感謝いたしております。（中略）

今日は私の体験した事柄のうち、特に明瞭なものだけをピックアップしましたので御一読下されば幸いです。

①夢日記　一九七七年九月二八日付

私と母はデパートにいました。すると突然、地球人ではない男の人が現れ、私に「帰れ」といったようでした。母はその男の人と少し争ったのですが、その場に倒れてしまった様子でした。私は宇宙船に乗っているようでした。下の方に窓があり、星がどんどん流れて行き、何かのメーターのようなものの数字が上がっていきました。するともう着いたらしく、私は男の人達と外へ出ました。外は夜のようでした。ここはまるで月のようでもありました。私は大きな講堂のような建物の所へ来ていました。とても明るくて、イスがたくさんならべてありました。私は長袖のワンピースを着ていました。見渡すと私と同じ服装の人達がいました。私はとりあえず前の方のイスに座りました。その後たくさんの人が入ってきました。皆が私と同年代くらいで、皆女性でした。私は左隣りの人に話しかけてみました。彼女が言うには、彼女はこの星で生まれたのだそうです。ここに来ている人は皆そうで、ある時派遣されて地球へ行ったということでした。その時今までの記憶は全部消されたと言うのです。まわりの人達もめいめい何か話している様子でした。

私は「そうか、そうだったのか」と思うと、急に自分を生んでくれた本当の母に会いたくなりました。そして、もうじき会えるんだと思うと喜びで一杯でした。

②UFO目撃　一九七二年八月一日付

中学一年生の頃ですから、昭和四十九年頃の体験です。祖父母宅からタクシーで家族四人で帰る途中、窓越しにビルの上空（地上からは百～二百メートル）に静止したように見える発光体を見ました。十秒くらい経過しても動かず、オレンジ色で、少し青みがかったりしていました。ちょうど三角形の頂点に位置する三機の編隊でした。はじめはヘリコプターかと思ったりで、誰にも話さなかったのですが、帰宅後話してみると、兄も同じことを言っており、驚いた両親から兄とは別個に絵を書かされ、それは一致していました。ですが翌日の朝刊にも載せられず、何の騒ぎもありませんでした。

③仙人のようなお爺さん　一九七七年八月一日付

小学校低学年の頃だったと思います。母とショッピングに出かけデパートを出た後、デパートの前の横断歩道を渡っていた時のことです。何気なくさっき出てきたばかりのデパートの前を見た時、ダークグリーンの作業着のようなもの、下は同系色のズボンを着け、やせ型で驚くことは異常に縦長い顔のお爺さんで、私は「キュウリみたいな顔したお爺さんだなあ」と思ったのです。母にこの話をしても母は見ておらず、まわりの人もその老人に目を向けていた人はおらず、おかしいと思うのです。

④夢日記

高校三年生頃でした。窓越しに眩しい光を受け、何か大きな光体が私の部屋のすぐ横に来たようでした。夜なので寝ていたのですが外の発光体から強い吸引力を受け、頭から窓に突っ込みそうになったのです。私は日頃から待ち望んでいたUFOが迎えに来てくれたのだと思いましたが、反面家族の事を思い「まだ行けない」と強く思いました。

次の瞬間目が覚め、驚いたことに私の頭は窓にすれすれの所まで来ていて、フトンから約九十度も移動していたのです。それは夢から覚める直前の状態のままでした。

⑤予知夢

一九七九年十二月二十五日付

受験合否の通知が届きました。面接の評価、試験の合計点まで明記されてありました。私は不合格の通知を受けたのです。自宅ではなく祖父母の家で、私は泣いていました。

⑥幽霊体験　一九八一年八月十七日付

熊本支部、常通寺の本堂で支部の皆さんと談話中のことでした。天井近くで、紙が重なるようなバサッという音がしたのです。しばらくして、渡り廊下を歩いているというより、スーと体が何かに押されて動いているという感じの女の人を見たのです。はじめは近所のおばさんかと思ったのですが、しばらくしてまた白い光を見たのです。その女の人は中年ぐらいの婦人で、四十才前後、肩ほどまでの黒髪、無表情の横顔、グレー地に枯葉模様の半袖のワンピースを着ていました。しばらくして、何気なく窓を見た時です。窓越しに丸い白光を見ました。車のライトかしらと思ったのですが、再び見直すと今度は二つの白光体が浮遊していたので、目の錯覚でもないと思いました。

⑦夢日記　一九八一年十一月十四日

家の前の空き地の上空に、三機のUFOが発光しながら浮かんでいました。金属製のようで球型着陸ギアーが三個はっきり見えました。昼間でした。私がドキドキしながら「他の惑星から来られたのですか」とテレパシーで叫ぶと、UFOからも、「そうです」と返答があり、それは男性の声でした。次の瞬間、私の右隣からも「他の惑星から来たのです」と、いつ現れたのか二十五才前後の男性がすぐ横に立って、私と一緒にUFOを眺めていたのです。見てすぐに、地球人ではないと直感しましたが、どこか見覚えのある顔でした。

その後、私の家に入りました。また誰かと座って話をしていました。私は地球人ではないその人のフィアンセのようでした。「この人だったのか」という印象がありました。髪が長く、彫りが深く、笑顔がよく、背は私とはそう変わらない人でした。

ところで、私は入会して四年たち、GAPのメンバーの方々とお会いするうちに何が大切な事なのかが分かってきた思いがします。今年の六月から熊本支部に寄せて頂いて、多くの先輩、師、家族のようなフィーリングを感じさせて下さる方々にお会いできて感謝しています。

最近、短大の研修旅行で沖縄へ行ったのですが、自然がとても美しく、終始心がウキウキとしていました。こんな時は宇宙的フィーリングを感じ易いのだと思いました。旅行と自然、そして人と接することは貴重な条件だと思いました。沖縄では沖縄支部の方々と幸せにもお会いすることができ、感謝の気持ちで一杯です。

ア氏の著書は読む度に新しい発見をします。この一生を経ても発見は続くと思います。とても未熟な私ですが、私なりに努力していくつもりです。先生、いつまでもお元気でいらして下さい。

（12月6日）

熊本支部大会にスペースブラザーが!?

先日は私事で拙い体験談ではございましたが、ご一読頂ける機会を得られまして、心から感謝致します。

今日は、十一月二十二日に開催されました熊本支部大会に出席させて頂いた折、会場前で会った一人の男性がスペースブラザーズであったという印象を、昨日受けましたので、先生に御一報差し上げるべく、また御指導頂くべくペンをとりました。

もう最終プログラムである質疑応答が始まっていましたが、私はある

衝動で後方から会場を出ました。その時、会場入口の受付に一人の男性がいて、受付に置かれたままになっていた名簿等に目を走らせていたところでした。私は何気なく「こんにちは」と言いかけましたが、言葉になりませんでした。男の人は私の方に向き直り少し当惑ぎみな様子でしたが、私は何の懸念も感じられませんでしたので、そのまま男の人の後ろを通り過ぎて行きました。すぐに私は戻って来たのですが、もう誰もいませんでした。

その男性は黒の背広を着て、衿元は白色のものでした。中肉中背、身長は一七五センチ前後、パーマのある黒髪、年齢は三十才前後に見えました。上品な方でした。

これまでにもこれと同じフィーリングを感じた覚えが一度あります。一九八〇年八月です。三十才前後の上品で美しい女性の方でした。その方は私がデパートのメガネコーナーでアルバイトをしていた折、一言も口を利かずにサングラスを買われて行かれたのです。帰りしなに少し微笑しましたが、それはハッとする程のものでした。

私は未熟ですから、私の印象が誤ったものであることの方が多いかもしれません。ですが勇気を持って書くことにしました。私なりに少しずつ宇宙の意識と融合していけたら幸いです。お役に立てる日がいつか来ることを祈ってやみません。

（12月31日）

ミラクルワードが職を引き寄せた！

北海道　畑野貴博

先日は素晴らしい年賀状ありがとうございました。今年もがんばって下さい。

先日、青森支部月例会に出席して、初めてGAPの方々にお会いしたのですが、それ以来僕の環境が変わってきました。これも中根さんの高次波動に触れたためと大変感謝しております。これからは毎月出席するつもりです。

さて、今度僕はある会社に内定したのですが、それはミラクルワードによるもので、先生はそういうレポートを集めておられるということですので参考にと葉をとりました。

僕は以前から進学よりも活動的な職業に就く方を希望していました。そのイメージとしてテレビ映画の、"百万ドルの男"のヒーローを思い浮かべたわけです。そして、もう八年前から持っているそのカセットを一日中きいていまして、「僕はスティーブ・オースチン。宇宙飛行士なんだ！」と何度も唱えていました。すると二か月後、それが突然実現したのです。

その日、母がケーキ屋へ行って店の人に「子供が職探しで大変なんです」とか何とか言ったんですが、その人が「自分は刑務所関係で頼りになる人を知っている」と言って、今の就職口を勧めてくれたのです。しばらくして判明したのですが、どういうわけかその人の家族と母の家族が知り合い同志だったのです。それでミラクルワードは本当にすごいと思いました。

きらめく星空の下に

滋賀県　関谷正明

夜空の美しい頃となりました。こちら日野の夜空は惑星間を航行する母船から見るようにはっきりとのぞむことができます。金星が美しいですね。帰宅時の車内からは自宅の方向にオリオン星座が見え、ときどきはるかかなたを流星や火球が横切ります。室内には身心の細胞をリラックスさせる"蟹座のワルツ"が流れています。こんな曲でダンスができれば最高でしょうね。

送って頂いたニューズレターで、「メキシコ時間のない国」という本を紹介されていましたが、私は昨年FM大阪で「誰も書かなかったメキシコ」の著者、中林アツマサ氏（ギタリスト）の興味あるお話を聴いていました。メキシコのオアハカからジープで八時間、歩いて数時間のところに、テレパシーを日常生活に使用しているインディオの部落があり、訪れると何も連絡していなかったのに迎えに来られたそうで、著者も一度訪れてみたいものです、と話されていました。テレパシーはハダシでないとできないとも聞いているとも言われていました。

宇宙的な人々との巡り合い

米ワシントン州　広田真知子

いつもニューズレターを送って頂きありがとうございます。すばらしいニューズレターを読むのみで、努力しないダメなGAP会員です。

日本ではあまり経験しなかったことですが、学校で知り合ったメキシコ人女性がUFOと接近遭遇したとか、バス仲で知り合った男性がUFO関係にとても興味を持っているとかで、こうしたことを身近に感ずるようになってきています。この男性の息子とアラン・ハイネック博士の息子が友だちだと言っていました。この男性は何年か前にアリゾナでUFO六機と母船のようなもの一機を見たそうです。彼は前世も知っているようで、十五ー六世紀の頃インドにいたそうで、その前はオーストリアで法律家であったといいます。またイギリスに住んでいたジェシーとかジェシカとかという女性が、地球からは見えない星に転生して私を助けるとか何とか言っていました。ただでさえ英語がわからないのに、そのことをバスの中で話し合ったものですから、彼が本当にそう言ったのかどうか自信がないのですが――。今後もGAP会員を続けてゆきますので、よろしくお願い致します。

信念と謙虚さで前進

長野市　大久保武彦

昨年は「アメリカ・メキシコ・カリブ海宇宙考古学の旅」を企画され大成功裡に帰国されましたが、毎年GAPの旅行記はとても楽しく、興味深く読ませて頂いております。旅行は本当に人間にとって大切なものなのですね。今年もまた海外旅行を予定されているようですが、今からどんな秘密が解き明かされるのかと胸がワクワクしております。永遠の謎に満ちたピラミッド群や、近年にわかに注目されはじめたファティマの事件など興味尽きない史跡めぐりです。

ニューズレター七五号の旅行記にデザートセンターとイエスの秘密が記されておりましたが、このような「事実」はGAP以外どこでも教えてくれないので、GAPにめぐりあえたのは大変幸運だったと思います。また、クリスチャンでもない私のような凡人がこんなすごい秘密を知ることができるなんて、偶然というか運命のイタズラというか、何かとても不思議な気持ちが致します。

アダムスキー氏は過去世でヨハネであったということですが、アダムスキー氏はまたエマーソンと何か関係があったのでしょうか。私の頼りないインスピレーションではどうも二人がとても親密であったというか、ダブって見えることがあるのです。

先生もお体にはくれぐれもご配慮下さいませ。私の印象では先生はGAP活動のために相当のご無理をなさっておられ、それこそギリギリいっぱいまでがんばっておられるということが感じられます。私には何もできないのですが、先生の今生での使命が無事に完遂されますよう祈っております。まだまだ地球の宇宙的目覚めには時間がかかるように思いますが、挫折することなく、信念を持ち、謙虚な気持ちで前進してゆきたいと思います。

"知らせる運動"への協力

広島市　升田裕子

昨日はすばらしいニューズレターをありがとうございました。内容の重要さにビックリいたしております。

そこで広島の町にこのすばらしい、知らねばならない事柄を大切に伝えたいと思いますので、十部ほどお送り下さいますようお願いいたします。

今、大学の講義でホルストの〝惑星〟をやっています。この時にいつも必ず惑星の数から始まって、学生の反応を見ながらしゃべりまくっております。木星について述べてある「土星旅行記」の内容にはなるほどと思いました。いろんな本によく似たことが書いてありますが、どうも自分だけに都合よく書いてあるような気がして、あと一歩確信が持てないでいたものですから、とてもうれしいことでした。私にとって土星は非常に気になる星です。

先生、どうぞお身体お大事に！

生きていること自体が奇跡

旭川市　石川公一

このところ私の内部に大きな変化が起こりまして、今まで以上にア氏の著書類を真剣に拝読させて頂いております。そして私の未熟さというものがより一層浮き彫りにされました。実にア氏は偉大です。素晴らしいです。ア氏の著書中、特に『宇宙哲学』が最もむずかしい比喩的な言葉でもって説明されているようです。しかし、それが理解するにふさわしいものなのです。先生の血の通ったカルマの翻訳は、絶対に宇宙的であり、真実であり、創造主の声であると確信しております。先生、ほんとうにありがとうございました。

私の内部に変化が見られた直接の原因は、東京月例会での先生の講演テープをきいた際によるものです。さらに松本氏の¼のゆらぎの講演内容も影響しております。私はある夜寝床についてから宇宙空間を想像し、無限性を求めて自分の意識を広げるようにして、常に一体性であることを認識するように反復の言葉を繰り返し、最後に「私の生命を、父よ、あなたにささげます！」と唱えて寝たのです。たった一度しか言ったことはありません。それが驚くに至ったのです。

家庭において口論があってもすぐに調和されて、私自身とても優位に立つことが不思議なくらいできるのです。以前からも私は食事の前などには「父に感謝します」という祈り文句を唱えていて、習慣づいていました。しかし今回は本当に全面的に百パーセント完全に信頼しきって、たった一度唱えただけで、これほどに変化が起こるなんて奇跡としかいいようがありません。

私は思います。私自身、今こうして生きていること自体が奇跡であると。先生がおっしゃるミラクルワード（イメージ）は最高の実現方法であるということがよくわかります。私は芸能界で大成功して、そのことの正しいことを実証するよう頑張ります。

宇宙こそあらゆる全ての奇跡です。私もその一員であることに最高のよろこびを感じます。いつも平安と祝福が父から与えられますように、お祈り申し上げます。

母船が月例会を注目していた？

名古屋市　斎藤泰文

過日の二月東京月例会では、私のつたない話のために貴重な時間をさいていただき、また夜の大黒屋ではすばらしいパーティーにお招き頂きまして、本当に有難うございました。

実は一月の月例会の時の記念撮影時のことにさかのぼりますが、二月の月例会で清瀬の高校一年生の一人が面白いことを言っていましたね。ちょうどあの時、フラッシュガン二本とも破損して、弱いストロボにしました。この時、彼の言葉では窓外に白い物体が移動してゆくのが見え、その物体について実は気象庁に問い合わせの電話等が殺到した、ということでした。実は私たちもあの場面に遭遇しまして、久保田先生が油汗を流して苦労されているのを横目で見ながら、窓外の物体をずっと見ていました。確かにその物体は木の葉運動はしませんでしたが、細長い白い物体でした。ゆっくりと窓の外に向かって右側に移動していました。あのときはほとんどのGAP会員が物体を見ていたと思います。

二月の月例会の翌日、大山ひろみ女史と山木、松村、千田の各氏と私の五人で鎌倉へ円盤観測に出かけた時、ふと電車中その話題が出ました。その時私はふっと、あの白い物体はあるいは母船だったんじゃないか？と思いました。いや、きっとそうです。

去年の名古屋決起大会の夕食会でも、フラッシュガンの調子が悪かったのを覚えていますが、私はこのフラッシュガンの作動と母船の通過には深い関係があるのではないかと思います。

電球が正常に作動するには空間の電界と磁界が、それなりに安定している必要があります。いや、電流が流れるには有線か無線には関係なく、適度の電位差を空間につくりだせればこと足りるのです。そこから考えると、フラッシュガンが正常に作動しなかったことは、あの会場付近の電界が乱されたためとみることができます。すなわち、これは実はあの〝白い物体〟の通過に起因すると思えるのです。

してみると、先生が写真をお送り下さったときのお手紙の内容がすっきり説明できます。写真の出来上りは〝いまいち〟ですが、別な角度で見れば唯一の円盤通過の証拠写真であるとみることもできます。

この見方がもし正しいとすると、日本GAPはいかにブラザーズが注目しているかの傍証になります。それは本当に素晴らしいことです。

是非、沖縄へ！

沖縄市　稲嶺誠一

久保田先生、お変わりございませんか。南国沖縄もチョッピリ肌寒くなりました。本土の方はいかがでしょう。お忙しい中にもかかわらず、私達沖縄支部会員のためにお手紙下さいまして、ほんとうにありがとうございます。

沖縄南国の旅と支部大会の件、決定下さいまして、誠にありがとうございます。今から少しずつ心の準備と万全を期すよう、努力していきたいと思います。沖縄の県民性で沖縄の人はほとんど話をペラペラしゃべらないので、久保田先生が沖縄にいらしても気になさらないでください。

昨夜、熊本GAP会員の田中寛子さんから、沖縄に大学の研修旅行で来ているから会ってくれないか、と電話があり、宮城さん、新里さん、石野さん、喜屋武さん、普久原さん、外間さんと私の計七名でお会いすることができました。本土の会員との接触は今回が初めてで、皆本土の会員の精神的レベルの高さにビックリしておりました。（中略）

沖縄は大変な特殊事情で、本土の会員の方となかなか接触する機会がありませんので、沖縄にお寄りの際は是非お寄りいただけたらと思います。（中略）

最近、近くの東南植物園（沖縄市）にて、宮城さん、喜屋武さんと私とで、テレパシーを送ってみたところ、夜の八時～九時頃まで、最初に十五分送り、五分休み、さらに送信し始めて五分ほどした時に、西の空三十度くらいの所に、突然オレンジ色の物体がZ字を描いて上に飛んでいきました。時間は二秒間くらいで、距

● 稲嶺誠一氏。（右）

離は一キロぐらいだったと思います。宮城さんは東の方を見てましたので、残念ながら見ておりません。

今年も残り少なくなりました。先生も大変だろうと思います。私にできる事がありましたら、何でも手伝いたいと思います。

来年もまた頑張ります。ひとりでも多くの方が宇宙哲学に共鳴する方が出れば、私は大変うれしいです。

『第3の選択』に思う

盛岡市　清水畑　博

一月二十一日の木曜スペシャル、『第3の選択』は実にショッキングなものでした。一九六二年に米ソ合作の宇宙船が火星に滑空着陸したというものです。フィルムでは、火星の表面は砂漠のようでしたが、アメリカの砂漠地帯のようであり、ところどころに森のようなものが見えてました。しかも、着陸地点でモグラのような小動物があわてて土の中に入り、少し移動したのがはっきり写っています。

Ⓐ一九六二年というのはロシア語で言われていましたが、「六二年」というのに少しひっかかりましたのでコンピューターの歴史を調べましたところ、①ICが現れたのは一九五三年頃、②事務用語として世界中で汎用されているCOBOLができたのは一九五九年、③LSIは一九六五年頃ですから、一九六二年当時の電子技術はICレベルということです。ICのレベルでもロケットは打ち上げることができますが、現在のLSI、超LSIに比べてはるかに大型のロケットになると思われます。

Ⓑデータ通信

火星と地球との距離は、火星大接近のときに約八千万キロ、火星が太陽の反対側にあるときは約二億八千万キロですので、ジョドレルバンク電波天文台（英）やパース（豪）、三百メートル級（プエルトリコ）のアンテナでは受信可能です。

Ⓒ通信データのコード変換

長距離を送信するには、たぶんFM波でしょう。とすれば、コード変換が必要になります。カメラの映像は一本の走査線ですから、ひとつひとつのチップを白黒の濃淡、または赤や青に変換する必要があります。これには波長やコード表が一致することが不可欠で、それ専用の回路を使わなければいけません。つまり、当事者しかこの回路をつくれないことになります。

例の画像の中で英国の「ハース氏」とかいう若い人が、その回路を持っていたというのは、この作業に関係していたということを示すのでしょう。部外者であるTV局の人は、たとえ技術者であってもこの回路をつくるのはまず不可能です。だからこれについては、英国TV局のフィルムは真実だったと思います。現代でもこの技術はめんどうなものです。もし英国のTV局がこの話をでっちあげるとしたら、ずいぶん金を使ったことになって、費用対効果の点で合わないはずですね。

Ⓓ火星に着陸の場面で、ソ連あるいは米国の声が「気圧七〇七mb、温度摂氏四度」といってたようです。気圧について、天文学者の理屈によると、元素の脱出速度でその惑星の空気の量、さらには表面の気圧が決まるということです。これが正しければ、月はほとんどゼロ、火星は数mbということになるようです。しかも地球ですら、水素は宇宙空間に出ていって、大気が薄くなるわけです。実に馬鹿げた話ですね。

センサーが五〇%狂っていたとしても三〇〇mb以上はありますので、どうやら七〇七mbというのは正しいかもしれません。酸素の比率が何%かはわかりませんが、もし一五%もあれば人間は呼吸可能です。七〇〇mbは地球では約三千メートルの山の頂上です。徐々に慣らせば高山病にはならないでしょう。

Ⓔ要人の誘拐について

政府機関には、表向きの目的とか看板とは別に、全く異なることをやっている所があるようです。NASAもタテマエは「月に人を送る」ことですが、真の目的はICBMをソ連の目標地点に正確に当てる技術を育成することのようです。

優秀な技術者や学者（いずれもまだ有名でない人々）が、軍事関係の仕事を強制されることもあるかと思います。天下太平というのは日本だけで、他の国々は大変な状態ですからね。

Ⓕ火星への航行

ボーマン軌道で約三百日で火星に行けることは、ずっと昔から知られています。第二宇宙速度、つまり約秒速十一キロさえ超えられれば可能でしょう。月と異なるのは時間がかかりすぎることだけです。

Ⓖ電源

酸化銀電池や原子力電池（放射性同位元素からでるβ線を電源とする）などは、数年はもつかもしれませんが、出力が弱く送信機の電源にはつかえません。火星上空でロケットエンジンを噴射するためのトリガーにはつかえるかもしれません。一度ロケットが作動すれば、そのエネルギーのごく一部を送信機に回すことも可能なはずです。

Ⓗ地球からの脱出

サターン5型は、推力が三〇〇〇トンということでした。火星探査機が小型であれば、それほど推力をつかわなくても第二宇宙速度は突破できます。この辺の計算は昔から行われていました。別にむずかしいものではないでしょう。

①アポロ計画がショーだったという説

一九六九年七月にアポロ11号が月に着陸しましたが、それまでの技術力からすれば別にどうというものではないような気がします。人間を安全に送るということで問題があったのではないでしょうか。

米国に世間の目が向いている間に、ソ連から次々に大型ロケットが打ち上げられて、月でなにかやっているというのも、あながちウソとは言いにくいですね。

②アポロ飛行士が暗号を使ったこと

アポロ11号が月へのランディングの際、「ブラボー」とか「タンゴ」などといってましたが、これは無線でよく使われるものです。タンゴは「T」ですし、ブラボーは「B」です。若干の変形はありますが――。

むしろ寸刻をもムダにできない宇宙飛行士が、あえてこのような一種の暗号を使ったことに着目すべきです。よほど大事なものですね。しかも、その存在があらかじめ予想され、もしくはわかっていたからこそ、そのような暗号を使うことができたということです。NASAはUFOの存在をすでに知っていたから、そのような暗号を使ったという推理はどうでしょうか。

●おめでた三件

(1)会員・藤原美由紀さん（愛媛県松山市）は去る三月二十七日、福岡市でめでたく結婚にゴールイン。

(2)会員・武田雄児氏（香川県琴平町）も三月三十日に琴平グランドホテルで盛大な華燭の典を挙行。お二人のご多幸を祈る。

(3)会員・斎藤泰文氏（名古屋在住）は（だれも知らぬうちに）同じく会員の寺井淳多子さん（豊田市）と芽生えた愛がついに実を結び、五月三十日に挙式の予定。宇宙的なスイートホームの実現を祈るや切。

●解説「テレパシー」第三部（昨年八月―十二月分久保田会長講義）の残部僅少。ご注文は左記へお早めに。〒989―16宮城県柴田郡柴田町大字本船迫字内沼田96―2　安藤澄雄

だれにもわかる「生命の科学」1982年版

第1部の予約受付のお知らせ

1982年度東京月例会における久保田会長による「生命の科学」解説講義の講義録を上記書名で出版します。6月下旬発行。

第1部　B5版　活字タイプオフセット印刷　1月～3月分。　¥700　〒200

なお、都合により予約注文制としますので、ご希望の方は5月末まで下記へ振替でお申し込み下さい。
安藤澄夫　振替仙台30019

主要訪問地紹介

■**カイロ**　エジプトの首都でアフリカ大陸最大の都市。新市街と旧市街とに分かれており、旧市街には約300のモスク（回教寺院）があってミナレット（尖塔）が林立し、住民の多くはガラベイヤという長い民族衣装を着て独特なエキゾティシズム(異国情緒)に満ちています。ここを基点としてギザ、サッカラ、ルクソール等の遺跡を見学します。

■**エジプト博物館**　ナイル川東岸のナイル・ヒルトンホテルの近くにあり、先史時代から古・中・新王国時代、グレコローマン期に至るまで10万点以上のぼう大なコレクションを蔵する世界最大クラスの博物館で、特に2階東側のツタンカーメン王の部屋が圧巻です。その他ミイラ室等もあり、必見の場所です。

■**ギザの3大ピラミッドとスフィンクス**　カイロ市内から15kmの所にある3大ピラミッドはあまりにも有名で、考古学上では王の墳墓とされて、スフィンクスの正面から見て右よりケオプス(クフ)、ケフレン(カフラー)、ミケリヌス(メンカウラー)の3人の王の名で呼ばれています。最大のものはケオプス(クフ)王のピラミッドで、底辺230m、高さ137m。ケフレン(カフラー)のピラミッドの内部トンネルへ入って玄室も見学します。夜間は各ピラミッドに美しい光を照射する素晴らしい「光と音のショー」が行われ、オプショナルによりこれも見物します。

■**サッカラの階段状ピラミッド**　ギザからバスで約1時間のサッカラにある階段状ピラミッドはエジプト最初のピラミッドで、第3王朝のジェセル王の墓とされ、宰相のイムホテプが建立したもの。ギザとは違って静寂な大砂漠の中にいちまつの憂愁をたたえて屹立しています。

■**ルクソール**　カイロから700km南方のナイル河畔の古都テーベの大遺跡で、カルナック神殿、ルクソール神殿、その他の神殿が大石柱群によって形成され、威容を誇っています。いずれも歴代の王が寄進して増築したもので、巨石に圧倒されます。カイロから飛行機で行き、ルクソールに1泊しますから酷暑にも疲れず、見学時間も充分にあります。

■**王家の谷**　ルクソールからナイル河を船で渡って西へ5km行った大岩盤地帯。古代の王たちはここに地下の大墳墓を建設し、現在までに発見されたものは64ありますが、特に有名なのはツタンカーメン、ラムセス2世、セティ1世、ラムセス6世らの墓で、これらの内部を見学します。付近にはハトシェプスト女王の葬祭殿もあり、これは高い岩山を背景に女王の寵臣センモウトが建築したもので、この壮厳な神殿は古代エジプト建築の傑作のひとつとされています。

■**リスボン**　ポルトガルの首都で、近代的な面と中世の面影を残すムーア風の異国的な情緒をたたえた異色ある都市です。エドアルド7世公園を中心に聖ジョルジェ城、コメルシオ広場、ロッシオ広場その他の見所が沢山あります。リスボンでは1泊します。

■**ファティマ**　ヨーロッパでは知らぬ者のない一大聖地なのに日本では全く知られておらず、したがって日本人はほとんど行きません。リスボンから130km北東のこの町は1917年にルシア、フランシスコ、ジャシンタの3名の子供が貴婦人の姿を見たり、7万人の大群集の眼前で巨大な円盤が空中に出現したりして、世界的に有名になりました（詳細は久保田八郎著「7つの謎と奇跡」（主婦の友社刊）の「ファティマの謎の太陽円盤」を参照）。奇跡が発生する（たとえば難病が治る）世界3大聖地のひとつであるファティマへはリスボンからバスで行き、見学後1泊します。

■**マドリード**　闘牛とフラメンコで代表されるスペインの首都マドリードは南欧の陽光が降りそそぐ情熱の都市で、プエルタ・デル・ソルと呼ばれる中心部の広場、スペイン広場、王宮、プラド美術館その他の見所が沢山ある美しい町です。1泊して2日間にわたりゆっくりと市内見学をし、夕方は各自自由においしいスペイン料理を賞味して下さい。

■**トレド**　マドリードの南約70kmの地点にある古い石造都市で、6世紀以来約1000年間ここがスペインの首都でした。高さ実に90mの大鐘楼がそびえるカテドラル（大寺院）は11世紀の創建になるもので、町全体が中世そのままの姿を伝える史跡の古都です。ここはマドリードからバスによるオプショナル・ツアー（希望者のみのツアー）とします。

■**パリ**　あまりにも有名なこの花の都は史跡と美術の都市でもあり、また最新のファッションの源泉として日本人は必ず訪れるべき素晴らしい首都です。ここに2泊し、24日の午前中は市内見学についやしてサクレクール寺院、ノートルダム寺院、エッフェル塔その他の名所を歩き、午後は自由行動にしますからブチックなどで好きな買物ができます。夜は各自で本場のフランス料理を存分に味わって下さい。

■**フランクフルト**　西ドイツ経済の中心地で、毎年春と秋に見本市が開かれますが、西ドイツの玄関口ともいうべき巨大な空港があり、ここへ着陸します。近郊のハイデルベルクの古城見物やライン川下りの基点になる大都市で、バスで市内を見学します。

■**ハイデルベルク**　フランクフルトの南方約85kmにある古城と大学で有名な古都。山腹に13世紀以来神聖ローマ帝国のラインランド地方選挙侯の居城であった優美なルネッサンス風の城跡があります。ハイデルベルク大学はドイツ最古の大学で1386年に創立。昔はビールと恋と歌が渦巻く奔放な学生生活で有名な町でした。城からはネッカー川の流れが見渡せます。

■**ライン川下り**　ライン川は伝説と詩に満ちた1,300kmの大河で、スイスのアルプスを源としてドイツの主要都市を通過し、北海に注ぎます。いわゆるライン河下りはマインツからコブレンツに至る区間で、広漠たるブドウ畑や古城などが見られ、伝説とハイネの詩で名高いローレライの岩がハイライトで、ここを通るときは船客が各国語でローレライの歌をうたいます。船は大きな客船で内部は立派な食堂になっており、芳醇なドイツワインやドイツ料理を賞味しながら美しい風景を眺望します。

■**ローマ**　"永遠の都"といわれるイタリアの首都ローマも2000年の歴史と伝統が脈打って大理石の遺跡群に満ちています。コロッセオ、フォロロマーノ、パンテオン、トレビの泉、カラカラ大浴場跡、パラティーノの丘その他の史跡がありますが、なんといっても見のがせないのはバチカン市国の世界最大のサンピエトロ大寺院です。イエスの弟子だった聖ペテロが開祖で、16世紀から17世紀にかけて着工完成した壮麗な高さ132mの大ドームその他の建築はミケランジェロ、ベルニーニその他の巨匠の手になるもので、本堂内はイタリアルネッサンス及びバロックの国宝級美術品が充満する芸術の殿堂です。

この旅行は他社の海外団体旅行の3倍分に相当する豊富な見学先を含んでいます。したがって他社なら総費用は80万円台になるはずですが、この企画では奉仕的な価格にして多数の方のご参加が容易になるように努力しました。このような豪華な海外研修旅行が安い費用で行けるのは日本GAPの企画で実現するだけです。

同行者紹介

● 旅行団長
久保田八郎　1924年生。島根県出身。慶大文学部卒。ＵＦＯと宇宙哲学の研究グループ「日本ＧＡＰ」を主宰。毎年海外研修旅行を企画。ノンフィクションミステリー研究家。訳著書にジョージ・アダムスキー『宇宙からの訪問者』(ユニバース出版社)、久保田八郎著『7つの謎と奇跡』(主婦の友社)、その他多数ある。

● 添乗員
田中　正　1944年生。東京都出身。1968年より3年間ドイツに留学、ゲーテインステュトエイトで学び、その後イギリスに1年間在住して帰国。数社の旅行会社を経て現在はワールドセブントラベル社の営業次長。海外団体旅行のベテラン添乗員。

第4回日本GAP海外研修旅行

エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅

（永遠の謎と神秘に包まれた古代エジプトの大遺跡へ！
うるわしきヨーロッパの各都市の古き面影を求めて！）

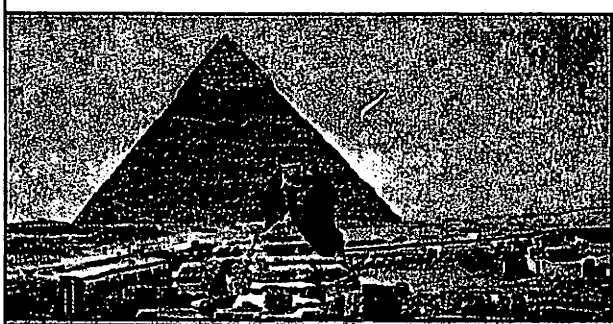
日本ＧＡＰは年次企画として過去３回にわたり海外研修旅行を実施しましたが、1982年（昭和57年）８月にも企画第４回目のエジプトとヨーロッパを周遊する素晴らしい旅を施行することになりました。ふるってご参加下さい。

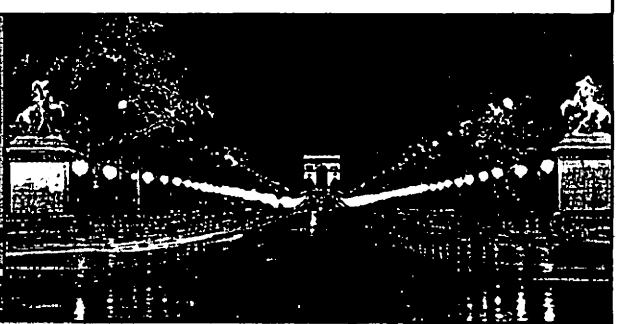
まず最初にエジプト入りしてギザの３大ピラミッドを皮切りに謎と神秘に包まれた地上最大の巨石文化遺跡群を視察し、そのあとポルトガルの首都リスボンと謎の太陽円盤出現地として名高いファティマを訪問。続いて美しいスペインの首都マドリードへ行き、フランスは花の都パリで２泊してヨーロッパ文化のエッセンスにひたり、更にフランクフルトから西ドイツへ入国してハイデルベルクその他の景勝地を巡遊後、船でライン河を下りながら天下の絶景を眺望し、最後はイタリアの首府ローマで古代の名高い遺跡を見学して、６ヵ国をめぐる大旅行を満喫しようというものです。

名コンビの久保田八郎と田中正が豊富な海外旅行の経験を生かして企画した手作りのこの旅は日本ＧＡＰ独特のもので、費用・内容において他社の追随を許しません。しかも毎回のＧＡＰ海外研修旅行団は他の旅行団にみられないほどの調和と友情に溢れて、現地のガイドさん方から絶賛を博しています。今回も多数ご参加の上、感動と歓喜に満ちた日々をすごし、生涯忘れ得ぬ思い出を残して下さい。

旅行中は久保田とベテラン添乗員の田中が同行して親身のお世話をし、現地では優秀な日本人ガイド（予定）が案内します。早目にお申し込み下さい。

旅行団長　日本ＧＡＰ会長　　久保田八郎





旅行期間：昭和57年８月15日～８月29日〈15日間〉
参加費用：¥638,000（分割払い可・月々約¥28,800・24回）
案内書　　ハガキに「第４回海外旅行案内書送れ」と
記入して下記へお申込み下さい

〒133 東京都江戸川区本一色町365-818　日本GAP

企画　日本ＧＡＰ
（運輸大臣登録一般旅行業第67号）

主催　株式会社トラベル日本
（運輸大臣登録旅行業代理店業第1957号）

販売　旅行代理店・ワールドセブントラベル株式会社

第3回 松山支部大会

●三月二十一日(日)
　午後一時～五時三十分
●ホテル・シャトーテル松山九階会議室
●出席者　四十八名

久保田先生は二十日夕刻山口緑氏や松本隆司氏とご一緒に空路松山入りされて出迎えの十数名の会員と一年ぶりの再会をされました。その夜はすでに松山入りしていた各地の会員の皆さんと共に歓迎夕食会に臨まれて春の松山の雰囲気に浸られました。

翌二十二日、とうとう大会の日がやって来ました。会場には地元はもとより北は北海道から南は九州まで総勢四十八名が出席して下さり、かつてない盛大な大会となりました。佐々木智子氏の優雅な司会で始まり、久保田先生が「宇宙とは何か」というテーマにマトを絞った高遠な哲学を展開されました。「宇宙は本来『無い』ものである。存在するように見えている万物は『愛(＝意識)』そのものである。宇宙とは『愛』であり『一体性』である。自分も『愛』であり、他人もすべて『愛』である云々」先生の口からこのような哲学が語られるのはこれが初めてでありましたので、出席者の顔にも驚きの表情がはっきりと浮き出ておりました。

休憩時間をはさんで全員自己紹介が行われましたが、あらためて遠来の方が多いのに驚きました。四国以外から実に三十四名も来て下さったのです。はじめて松山大会に来た方も二十五名いました。

このあと昨夏日本GAP実施「アメリカ・メキシコ宇宙考古学の旅」の記録映画が上映され、続いて質疑応答があり、盛況のうちに大会を終わりました。

夕食会は四十名が参加して下さり、夜間照明に浮かんだ松山城を間近に眺めながら歓談に花が咲く中を時間が過ぎてゆきました。

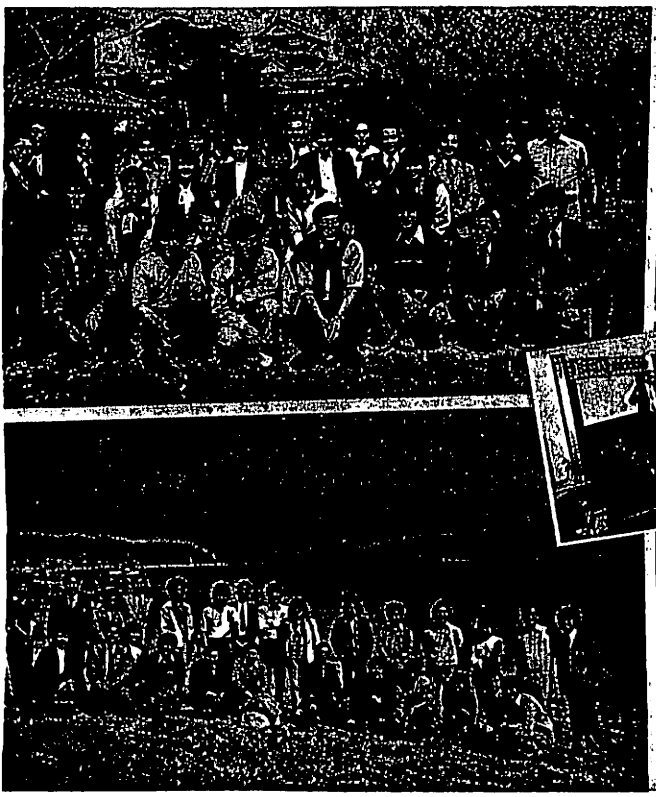
翌日は市内観光でしたが、これにも三十名が参加して下さってとても盛況でした。城山へ登って景色を眺めたり、鳥のさえずりを聞いていると、春の訪れを肌で感じることができました。午後は松山港から船で沖に浮かぶ興居島に渡って白い砂浜を散策して、さわやかな潮風を胸いっぱいに吸い込みました。関東や東北の方が浜辺で童心にかえって無邪気に自然とたわむれる姿に地元の私達も心を打たれるものがありました。

このあと午後三時に久保田先生は松山港から十数名の会員と共に水中翼船に乗船され、地元の会員がお見送りする中を一路広島へと向かわれました。これで三日間にわたる大会の幕を閉じました。

交通不便な四国路にお越し下さいました久保田先生と山口氏、そして各地の会員の皆様の厚き友情とひたむきな求道精神にはただただ感謝のほかはありません。心から敬服いたします。また松山支部の皆様にはひとかたならぬ御援助と御協力をいただきました。代表として深く感謝致します。なお、シャトーテルと全日空の関係者の方には何かとお心遣いをいただきました。重ねてお礼を申し上げます。

終わりに久保田会長の限りなき御健闘をお祈りいたします。

(松山支部代表　伊藤達夫)



〈予告〉今年度地方支部大会（その２）

	旭川札幌合同支部大会	静岡名古屋合同支部大会	青森支部大会	大阪支部大会
日時	6月20日(日) 午前10:00→5:00	7月4日(日) 午後1時→5：00　1：00	8月1日(日) 午前10：00→5：00	9月12日(日) 午前10：30→5：00
会場	綜合結婚式場「三愛(さんあい)会館」3階 旭川市4条通り8丁目（買物公園沿い右角）。 ☎(0166)24−6111。国鉄旭川駅より平和通り買物公園を直進。徒歩約8分。	「静岡交通ビル」 4階大ホール、静岡駅南口前 ☎(0542)83-9234	「青森県教育会館」 2階会議室 青森市橋本1-2-25. ☎(0177)77-3121 青森駅前より国鉄バス「東部営業所」行に乗り「電話局前」で下車。	「ＫＢＳびわ湖教育センター」 滋賀県守山市水保町2892番。 国鉄守山駅下車、近江バス名神大津行びわ湖教育センター前下車。
会費	￥2000（希望者のみ全員記念写真代 ￥500）	￥2000（希望者のみ全員記念写真代￥500）	￥2000（希望者のみ全員記念写真代￥700。グランドキャビネ判	￥2000（希望者のみ全員記念写真代￥700。グランドキャビネ判）
プログラム	10:00 支部代表挨拶(石川伊藤) 10:20 久保田会長の祝辞 10:30 支部講演（高野省志・川上三秀） 11:30 特別講演（松本隆司＝東京） 12:00 昼食・休憩 1:00 映画「アメリカ・メキシコ宇宙考古学の旅」 2:00 大会講演「宇宙哲学とUFO問題」（久保田会長） 3:30 休憩・記念撮影 4:00 質疑応答（会長を囲んでの座談会形式） 5:00 閉会(「また会う日まで」をラテン語で全員3唱して終了。)	1：00支部代表挨拶 野口敏治(静岡) 武田充弘(名古屋) 1：10 会員体験講演 黒田保夫(静岡) 川谷定義(名古屋) 2：10 講演　久保田八郎「アダムスキー哲学とＵＦＯ問題」 3：30 休憩・記念撮影 3：45 全員自己紹介・質疑応答 5：00 閉会	10：00 支部代表挨拶（中根豊） 10：10 講演(鈴木武男・中根豊) 11：00 記録映画「アメリカ・メキシコ宇宙考古学の旅」 12：00 昼食・休憩 1：00 講演　久保田八郎「日本ＧＡＰの使命と宇宙の法則について」 2：30 休憩・全員記念撮影 3：00 全員自己紹介・質疑応答 5：00 閉会	10：30 支部代表挨拶 平塚和義(大阪) 10：35 講演(有志) 12：00 昼食・休憩 1：00 講演　久保田八郎「宇宙哲学の本質とUFO問題の真相」 2：15 休憩・全員自己紹介」記念撮影 2：45 記録映画「アメリカ・メキシコ宇宙考古学の旅」 3：45 質疑応答 5：00 閉会
夕食会	大会終了後5:30より同会館内別室で夕食会を開催。お楽しみ抽選会やゲームあり。 会費 ￥5000 （二次会・三次会も計画）	大会終了後6：00〜8：00まで静岡ステーションホテルで希望者のみの夕食会を開催（立食形式）会費　￥4500	大会終了後6：00〜8：00まで同会館内別室で希望者による夕食会を開催。 会費　￥4000	大会終了後6：00〜8：00まで希望者による夕食会を同センター内で開催。 会費　約￥4000
宿舎	旭川駅付近の旭川ワシントンホテルと旭川プリンスホテルをお世話します。(駅より徒歩4分）シングル1泊￥4200〜￥5000程度。	静岡駅南口前 「静岡ステーションホテル」 シングル　￥4400	ホテルサンルートをお世話します。 シングル1泊￥5500 ツィン　1泊￥9000	11日と12日の宿泊は同センター(これはホテルです)の部屋をお世話します。 ツイン1泊12000程度
夕食会と宿舎の申込	夕食会と宿舎希望の方はハガキに宿泊日と「夕食会参加」と記して5月末までに下記へお申込下さい。観光シーズンのため早目にお願いします。 〒070 北海道旭川市神楽6条8丁目432-22、川上三秀 ☎(0166)61−0044	夕食会出席の宿泊希望の方はハガキに宿泊日と「夕食会参加」と記して6月6日までに下記へお申込み下さい。 〒422 静岡市西島304-9、野口敏治 ☎(0542)86-7729	夕食会出席と宿泊希望の方はハガキに宿泊日と「夕食会参加」と記して6月末までに下記へお申込下さい。 〒039-26青森県上北郡東北町字夫雑原541. 中根豊 ☎(01756)3-3386	夕食会出席と宿舎希望の方はハガキに宿泊日と「夕食会参加」と記して8月25日までに下記へお申込下さい。 〒661 兵庫県尼崎市水堂町3-16-8、平塚和義 ☎(06)436-3478
備考	大会翌日は旭川近郊を希望者のみでドライブ。アイヌ部落、鐘乳洞、ストンサークル、動物園などを見学の予定。 ※6月は支部大会のため月例会は中止。	大会翌日は希望者だけで日本平近郊へ観光の予定。 ※7月の支部月例会は、支部大会のため中止。	大会翌日は希望者による八甲田山・十和田湖へのドライブを予定。 ※8月は支部大会のため月例会は中止。	大会翌日は希望者のみにてびわ湖一周竹生島めぐりを行う予定です。 ※9月19日(日)の大阪支部月例会も開催しますのでよろしく。

■ＧＡＰ今年後半支部大会が上記のように決定しました。各支部とも張切って準備中で、いずれも高次元な素晴らしい大会が予想されます。地方の会員の方々は都合のよい会場をお選びの上、ふるってご参加下さい。

■今年度は上記の他に熊本支部大会が予定されています。日時は11月21日(日)午後1：00より。会場は熊本市近郊の温泉地。詳細は次号に掲載。

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　時	会　場	会費	携行品・行事
東京本部	毎月第1土曜日 午後2：00→6：00	上野公園内「東京文化会館」4階会議室。☎03—828—2111。国電「上野駅」の「公園口」下車，改札口の真向かいスグ。	¥300	2：00→3：00会員による体験講演， 3：00→4：30久保田会長の「生命の科学」講義と近況報告，テレパシー練習，休憩。 4：30→6：00自己紹介，意見発表，質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」☎（388）7351。 国鉄または阪急電車「吹田駅」下車。連絡先＝平塚和毅　☎06—436—3478	300	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」（文久書林刊）を持参。東京例会における久保田会長の講演テープを公開。テレパシー練習・研究発表・座談会
新潟支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00	新潟駅前「寄年の家」☎0252—44—6766 連絡先＝足立亘宏　☎0252—62—0968	200	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の宇宙哲学講義録音テープを公開。テレパシー練習，座談会。
熊本支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00	熊本市仁本木3—12—45　常通寺 連絡先＝津野田俊行　☎0963—52—3381	200	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」（文久書林）を持参。久保田会長の東京例会における「宇宙哲学」講義録音テープ公開。座談と研究発表。テレパシー練習。
名古屋支部	毎月第2日曜日 午後1：00→4：30 ※5月と6月は午前9：30→12：00に変更。7月は支部大会のため月例会は中止。	名古屋市中区古沢町7—1「名古屋市民会館」特別会議室。☎（052）331—2141 国鉄・名鉄・地下鉄「金山橋駅」下車。徒歩5分。 連絡先＝林　国宣　☎0586—45—6468 武田充弘　☎052—622—7339	300	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」「宇宙哲学」を持参。久保田会長の講演録音テープ公開。研究発表，テレパシー練習、座談会。
仙台支部	毎月第4日曜日 午後1：10→4：20	仙台市「市民会館」会議室（西公園内） 連絡先＝笠原弘可　☎0222—95—0725	200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，テレパシー練習，座談会。
山形支部	毎月第1日曜日 午後1：00→5：00 ※5月と7月は第2日曜日に変更。8月は全員で青森支部大会出席のため月例会は中止。	福祉文化センター　山形市小白川町、山形駅よりバスで貯金局前下車・徒歩3分。☎0236—42—5181 連絡先＝清水　正　☎0238—21—5441	200	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」を持参。東京本部月例会における久保田会長の講演録音テープ公開，テレパシー練習，研究発表，座談会。
札幌支部	毎月第1日曜日 午後1：00→4：30 ※6月は支部大会のため月例会は中止。 ※7月のみ18日に変更	中央区北一条西一丁目「札幌市民会館」会議室。☎011—241—9171　連絡先＝伊藤重信　☎011—251—4331	300	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」と官製ハガキを持参。読書会，テレパシー練習，自己紹介。
静岡支部	毎月第1日曜日 午後1：00→5：00 ※7月は支部大会のため月例会は中止。	プラザー静岡ビル8階（静岡駅北口すぐ）静岡市御幸町9—1 連絡先＝野口敏治　☎0542—86—7729	200	テキストとして「テレパシー」「生命の科学」を持参。東京本部例会における久保田会長の講演録音テープ公開。テレパシー練習，研究発表。
旭川支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00 ※6月は支部大会のため月例会は中止。	旭川市4条通り10丁目右1号「北海道新聞旭川支社」5F会議室。電話0166—23—2111 連絡先＝石川公一　☎0166—51—5699	500	東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。研究発表。アダムスキー著「生命の科学」を持参。質疑応答（旭川支部独自で直接会長から回答を得る）コーヒー、紅茶あり。2次会も行う。
松山支部	毎月第4日曜日 午後1：00→4：30	松山市民会館会議室 連絡先＝伊藤達夫　☎0898—22—3060 ※5月のみは広島市中区八丁堀7-11の広島YMCA会館地下会議室に変更。	200	テキストとして「生命の科学」「テレパシー」を持参。東京月例会における久保田会長の講義録音テープ公開。質疑応答，座談会。
群馬支部	毎月第2日曜日 午後2：00→6：00 ※4月は支部大会のため月例会は中止。	群馬県太田市「太田市民会館」第6会議室。 連絡先＝服部　久 ☎0276—63—2163・2771	200	東京本部月例会における久保田会長の講義録音テープ公開，座談会等。
青森支部	毎月第3日曜日 午後1：00→5：00 ※8月は支部大会のため月例会は中止。	青森市松原「青森市民文化センター」教養室(2)　☎0177—34—0163 連絡先＝中根　豊　☎01756—3—3386		テキストとして「生命の科学」「テレパシー」を持参。東京月例会における久保田会長の講演録音テープを公開。テレパシー練習、研究発表、座談会。
沖縄支部	毎月第4日曜日 午後1：00→5：00	沖縄市仲宗根4—1「中頭教育会館」4階。☎098937—7132・7133 連絡先＝稲嶺誠一　☎09893—8—2995	300	テキストとして「生命の科学」久保田先生による宇宙哲学解説テープ公開。質疑応答。想念観察とテレパシーの研究報告。自己紹介。座談会等。

★本誌バックナンバー(旧号)★

わが国でアダムスキー問題を正しく伝える唯一の文献である本誌は後世に残る貴重な資料となるものです。ぜひおそろえ下さい。

No.70 主要記事「創造主のハート」G.アダムスキー／「愛と太陽の大地」久保田八郎／「コンピューターによるUFO写真の真偽判定は正しいか」田畑宏／「質疑応答」S.ホワイティング／〈写真〉「東京上空のUFO」その他

No.74 主要記事 ●金星旅行記「死と空間を超えて」G.アダムスキー／「日本GAPとアダムスキー」久保田八郎／「超低空に舞い降りた円盤！」末永雅仁／「各地支部大会詳報」／「さらば空飛ぶ円盤」(2)第2章この太陽系内の宇宙活動・第3章宇宙船と重力 G.アダムスキー／その他。

No.75 主要記事「土星旅行記」(1) G.アダムスキー／「イメージ法で起こる奇跡」高梨和明／「太陽と神々の国讃歌」久保田八郎／「さらば空飛ぶ円盤」(3)第3章宇宙船と重力(続き)・第4章最近の科学の発達／その他。

No.76 主要記事「土星旅行記」(2) G.アダムスキー／1981年度「日本GAP総会講演集」伊藤重信・山口 緑・武田克弘・足立亘宏／「総会の日にUFOを目撃」伊藤進夫・仲間勇樹・橋口真市・松村芳之／「さらば空飛ぶ円盤」(4) G.アダムスキー第5章わが太陽系内の変化・第6章異星人の象形文字／その他。

※No.69より71までは各¥500。No.72から¥700。〒各¥200。

「生命の科学」解説講義録音テープ

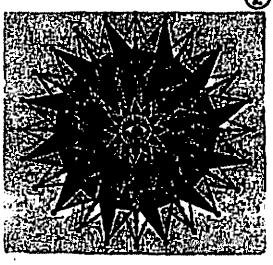
今年度東京月例会において1月より毎月1課ずつ久保田会長が解説される貴重な録音テープ。アダムスキー哲学の理解を深める上で重要な資料となるものです。会長の平易な説明と深遠な内容をぜひお聴き下さい。近況報告も含まれています。

テープ1本(90分) ¥1000 〒200

※このテープの注文に限り××月分と記して必ず下記へご注文下さい(57年1月より毎月録音。1課より在庫)。

〒430 静岡県浜松市寺島町221、小島国弘
TEL.0534-52-8502/振替名古屋7-51065

①



②

①オーソン肖像写真 ②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第2部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウェルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ペッツが描いた名画の写真。(キャビネ判)(カラー写真)

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は"すべてを見透す眼"で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判)(カラー)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。ご注文は必ず日本GAP宛直接に振替でどうぞ。

①¥500〒120 ②¥200〒60一括注文の場合〒120

③想念観察手帖

アダムスキーの宇宙哲学にもとづいて自己の想念印象を観察し、宇宙的想念と非宇宙的想念とに分類して記入する。宇宙的テレパシックな人間になるための必携品。1冊で1カ月分の記入が可能。¥500 〒120

④テレパシー練習用 ゼナーカード

アメリカで開発されて世界的に広まったテレパシー練習用カード。5種1組のカードを1箱に5組、計25枚収納。美麗箱入り。

¥500 〒120

日本GAP

会員募集

日本GAP
〒133東京都江戸川区本一色町365－818

★日本GAPはUFO研究界の大先駆者・久保田八郎が故ジョージ・アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団！ ★コズミックマン(宇宙的人間)を志向する千数百名の男女会員は単にUFOの目撃報告の分析のみにとどまらず、アダムスキー氏が残した偉大なガイドブック「生命の科学」「テレパシー」等の研究実践により潜在能力の開発に研さん中！ ★困難を克服して力強く生きよう！意識を宇宙の彼方へ拡大しよう！ ★入会案内書をハガキで日本GAPへ申し込もう！

編集後記

★本号は惑星金星に関する問題やUFOの推進原理、その他宇宙哲学の素晴らしい記事、UFO目撃ルポ等により充実した内容になったと自負しています。特にUFO目撃報告は重要ですから体験ある方はぜひレポートをお寄せ下さるようお願いいたします。その他、宇宙哲学の実践体験記も歓迎します。会員の方の熱意ある投稿によって本誌が盛り上がることを期待します。

★今年一月より毎月東京月例会で行う編者の「生命の科学」解説講義録音テープを浜松市の小島国弘氏が製作頒布しておられます(左上広告)。アダムスキー哲学の真髄を理解する上で貴重な資料ですから多数お求め下されば幸いです。また地方支部の月例会でも必ずこのテープを会場で公開されるようお願いします。支部月例会が高次元な雰囲気に満たされるようご配慮下さい。

★三月二十一日は松山支部大会が開催され、盛況裡に幕を閉じました。関係者各位に厚くお礼を申し上げます。四月二十五日は群馬支部大会、五月は沖縄、六月は旭川・札幌合同、七月は静岡・名古屋合同、八月は青森、九月は大阪、十一月は熊本と活発に支部大会が各地で開催されます。地元の方はふるってご出席下さい。特に沖縄支部大会には本土から二十名が団体で参加の予定です。盛大な大会になるでしょう。

★今夏八月に実施予定の「エジプト・ヨーロッパ宇宙考古学の旅」は三月末現在申込者七名でまだ残席がありますから多数ご参加下さるようお願いします。五月三十日(日)午後一時より五時まで都内のトラベラー商会(中央区銀座二－二－一九、藤間ビル内。電話〇三－五六三－五四六五。国電有楽町駅下車、駅前交通会館左側面をまっすぐ行き、フードセンターより外堀通りをへだてた向かい側。徒歩三分)で第一回旅行説明会を行いますので考慮中の方も一応ご出席下さい。

★近来緩慢ながらもアダムスキーの体験記の内容が次第に認められるような傾向になってきたと言えます。ますます信念を強固にして前進を続けようではありませんか。

★現在約三十名の会員の方々により本誌が書店に卸されています。地元の書店に委託の交渉の労をとろうという方は編者宛ご一報下さい。詳細な説明書を差し上げます。これは営利を目的とするものではなく真のカルマを持つ人を一人でも多く発掘することを目標としたものです。ご協力下されば幸いです。(K)

●読者の原稿を募集！

宇宙哲学実践体験、UFO目撃、宇宙哲学に関する原稿をお送り下さい。掲載分には薄謝をプレします。
※市販の原稿用紙を使用し、一行を十八字で書くこと。匿名・筆名可。但し本名を併記のこと。

日本GAP機関誌・季刊春季号
「GAPニュースレター」改題
宇宙哲学とUFO 77号
編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色町365－818
電話(651)0958
振替東京4－35912
一九八二年四月二十日発行
定価七〇〇円・送料200円